

論文 / 著書情報
Article / Book Information

標題	華
Title(English)	ka
発行者	TIT建築設計教育研究会
Publisher(English)	TIT society of architectural design education
巻号 / vol.	No. 14
発行日 / Pub. date	1997,
権利情報 / Copyright	本著作物の著作権はTIT建築設計教育研究会、および、収録されている論文・記事等の執筆者に帰属します。本著作物は、TIT建築設計教育研究会の許可のもとに掲載するものです。ご利用にあたっては「著作権法」を遵守してください。

夏号/Summer

Ka

No.14 1997

1996年度設計製図第二(2年生)優秀作品より	—2
1996年度設計製図第四(3年生)優秀作品より	—10
1996年度卒業設計製図優秀作品・大岡山建築賞	—28
Visitor's View : 妹島和世	—35
OB作品紹介 : 竹田秀道	—36
TIT建築設計教育研究会より	—38

閲覧用

1996年度設計製図第二(2年生)優秀作品より

Best Sophomore-Studio Work: Autumn Semester

ふだんの居場所を考える

Buildings for Everyday Campus Life

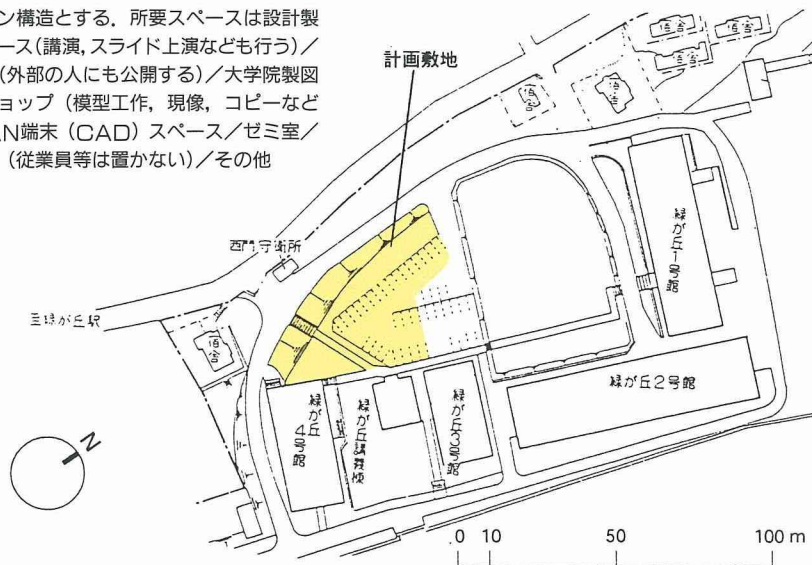
担当：青木教授，藍澤教授，大佛助教

課題趣旨：緑が丘地区西門入口の斜面および駐車場を利用し，建築学科および6類のためのスペースを計画する。毎年4年生のディプロマ制作時期におこる，製図室の入れ替えや大がかりな引っ越し，設計製図の作業スペースの不足，課題作品やディプロマを展示するスペースの未整備，講評スペースの不足など数多くの問題があり，来訪者への展示公開や講演会などもままならない。また，CAD，LANの整備も遅れているため，学生が自由に使える端末機がないことや，ゼミスペース，卒論や図書の検索・閲覧などのスペースも準備できていないことが問題としてあげられる。さらに6類全体の学生からは，雨の日や授業以外の居場所がないことや，簡単な飲食を行うスペースもないこと，自由に使える外部空間の不足が不満としてあげられている。課題はこうした学生の身近なテーマに対して，具体的な空間を提案してもらうことを求めている。

計画敷地：緑が丘地区西門の斜面および駐車場。

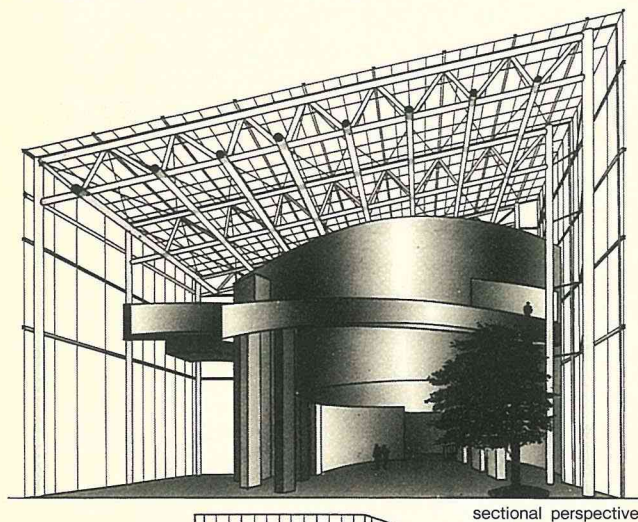
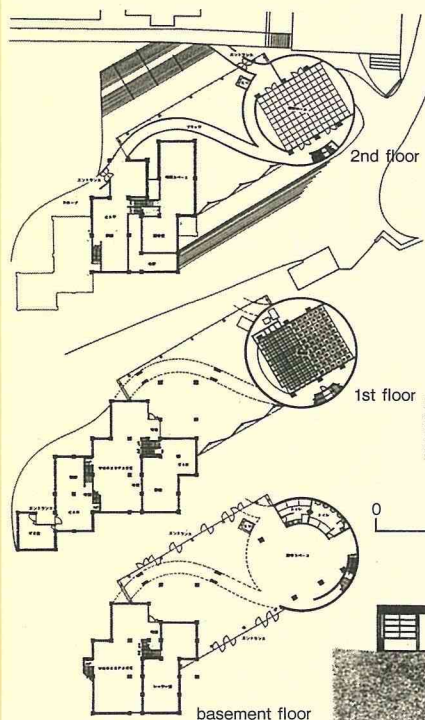
設計条件：規模は地上2階，地下1階以内で主構造

はRCラーメン構造とする。所要スペースは設計製図講評会スペース(講演，スライド上演なども行う)／展示スペース(外部の人にも公開する)／大学院製図室／ワークショップ(模型工作，現像，コピーなどを想定)／LAN端末(CAD)スペース／ゼミ室／喫茶スペース(従業員等は置かない)／その他

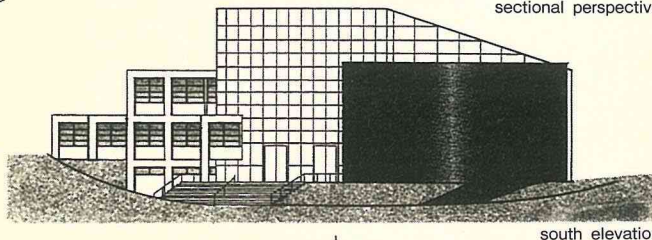


For Oneself

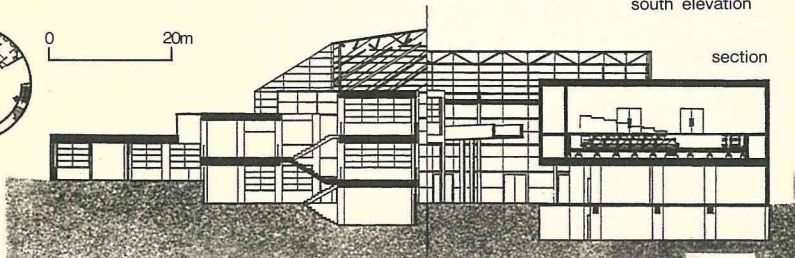
西嶋順子
Junko Nishijima



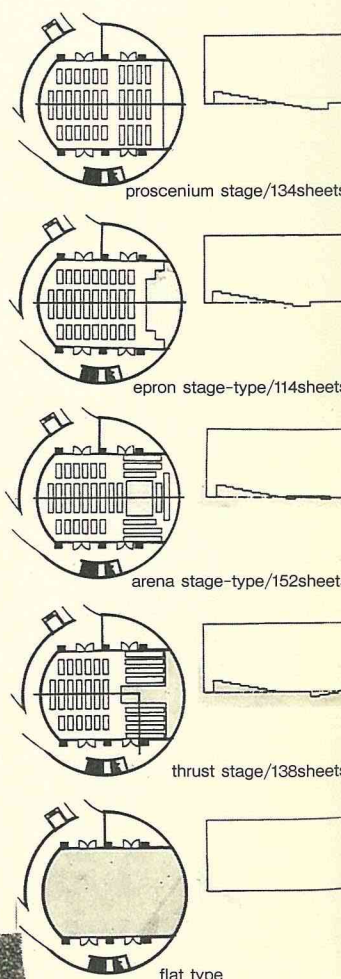
sectional perspective



south elevation



section



proscenium stage/134sheets

epron stage-type/114sheets

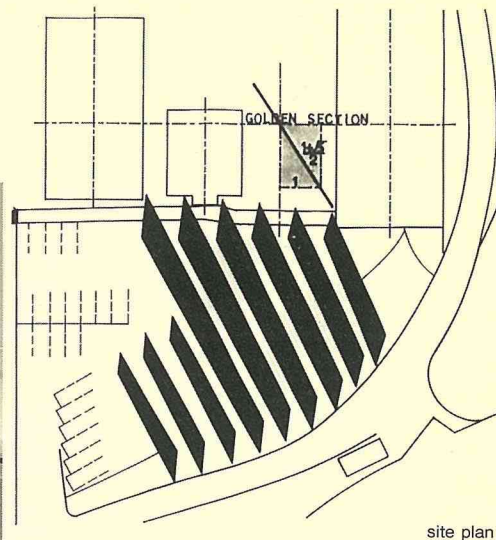
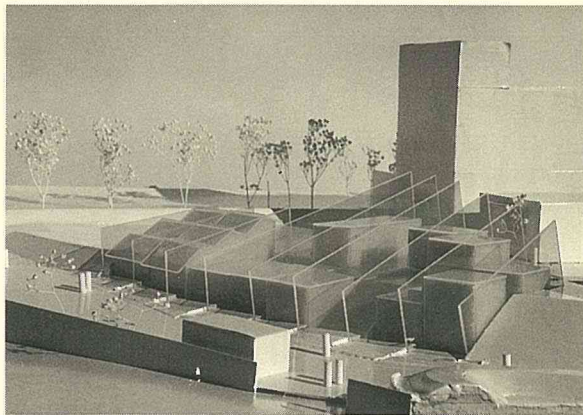
arena stage-type/152sheets

thrust stage/138sheets

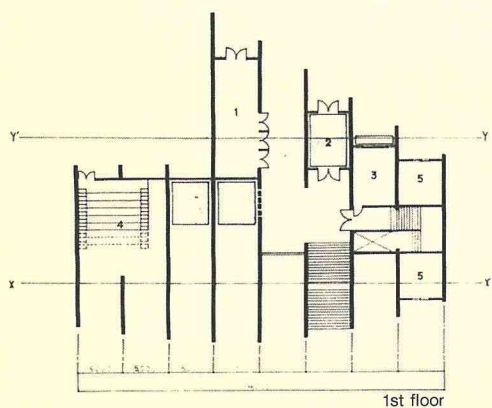
flat type

Integral Student Union

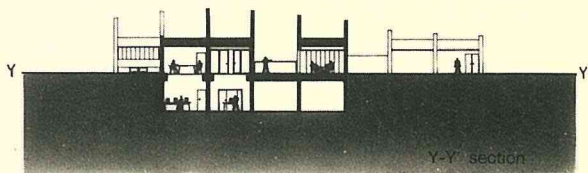
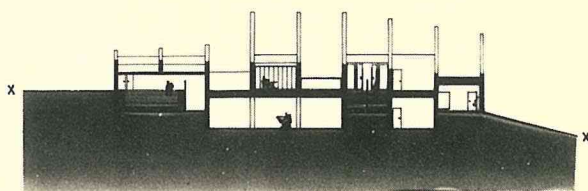
岡本晋二郎
Shinjiro Okamoto



site plan

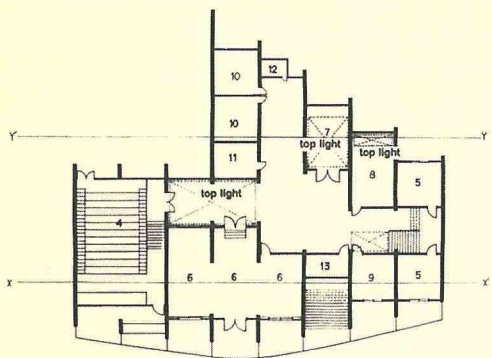


1st floor

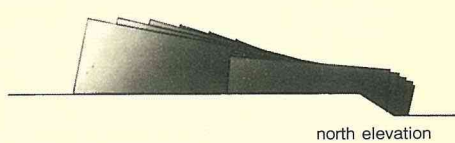


Y-Y' section

0 20m



basement floor



north elevation



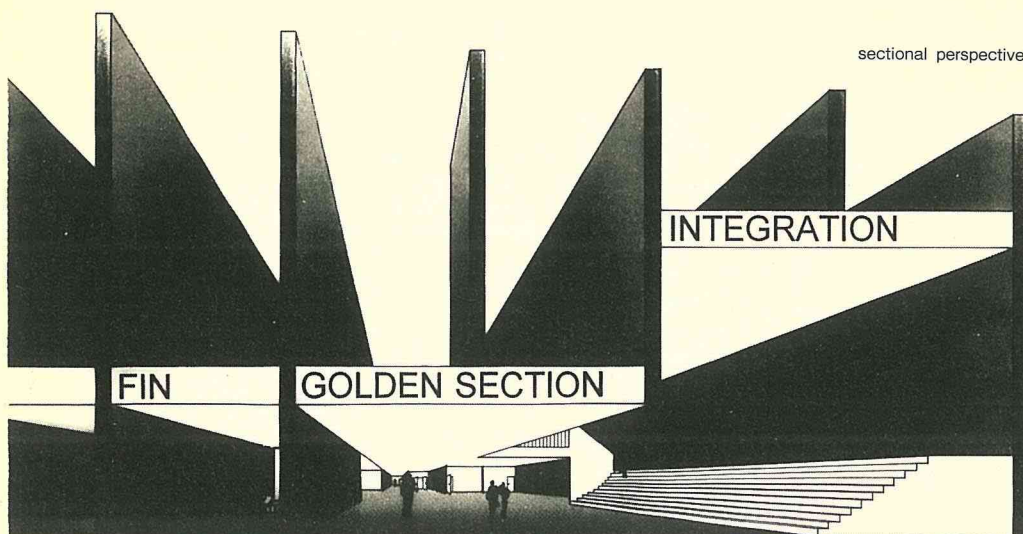
south elevation

-INTEGRATION-

■建物全体を最小限のモジュールで細かく分化し、それぞれの空間について取り扱い、それを足していくことで建物全体の構成について理解することができる。このプロセスは、積分の考え方に似ていると考えた。そこで、建築における積分というものを考え、そこから設計を行った。そしてこの積分するという概念が、積分区間を細かく分化する線として、“FIN”という形で現れた。このFINによって、この敷地のもつ特性、設計の目的などを、それぞれの空間で分けて取り扱うことができるようになった。

-FIN-

■平面上で、どの方向にFINを設定するかということは、適切な積分をするために非常に重要になってくる。そこで、社会工学棟・M011・文教センターを結ぶ線を一辺とする、黄金分割によって作られる、四角形の対角線の向きにFINを向けた。これによってFINの向きにより、もっとも視覚的な影響を受ける場所である社工棟・M011の付近での景観・動線の流れをまとめることを目指した。また同時にFINの上部の傾きを2度ずつ変えていくという操作を用いて敷地の形状にうまく合うようにした。■1階を動線・休憩室・展示室などの6類の人たちの共有スペースとし、地階には設計製図に必要な部屋を集めた。そして、Voidをつくり、展示室の床をすりガラスにすることで、地階に光が落ちるようにした。



sectional perspective

INTEGRATION

FIN

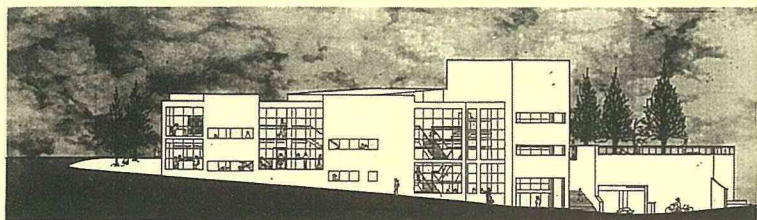
GOLDEN SECTION

GINNNANN

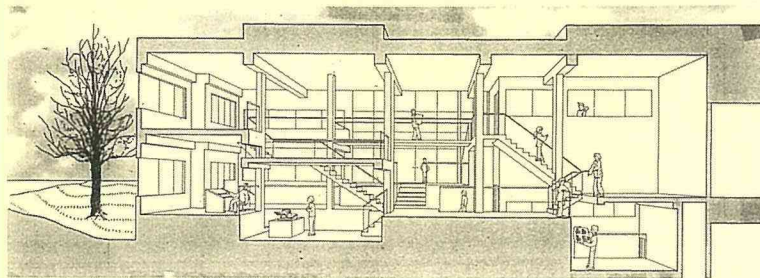
Ginko Nuts

稲毛 誠

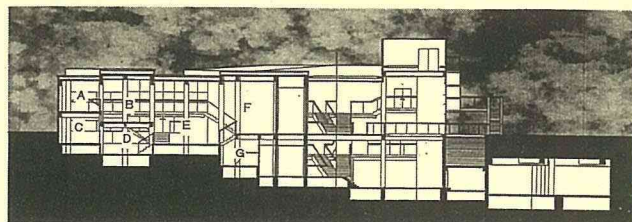
Makoto Inage



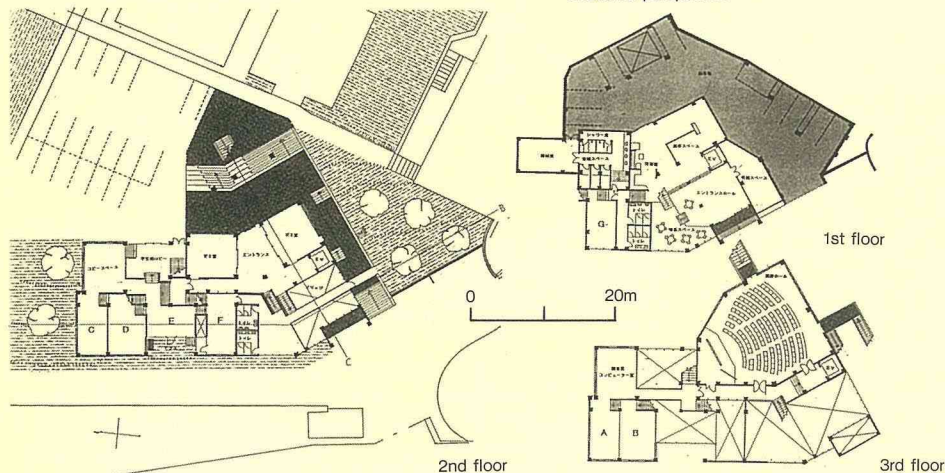
elevation



sectional perspective



section



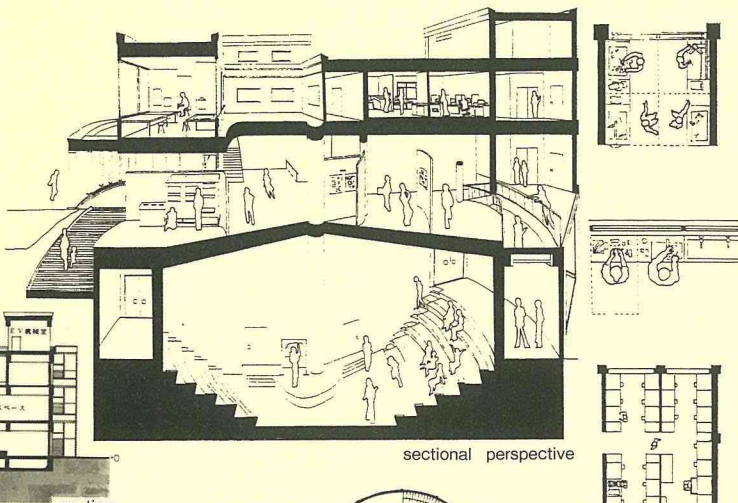
■製図室, CAD室, ワークスペースをそれぞれ大きな部屋にするのではなく, 3つの機能をもった部屋(セル)をAからGまでつくる。それらのセルを設計のプロジェクトの規模に応じて自由に組み合わせ, 空間の大きさを設定できるようにする。一つひとつのセルには他のセルとの独立性に順位があり, 例えばGは比較的独立性が強く, A, BやC, Dのように一体に近いところもある。隣り合ったセルの高低差を1~2mにすることで, セル同士の独立を保ちつつ, 視線や会話が交錯し合うようになっている。

緑の会館

Green Building (Midorigaoka)

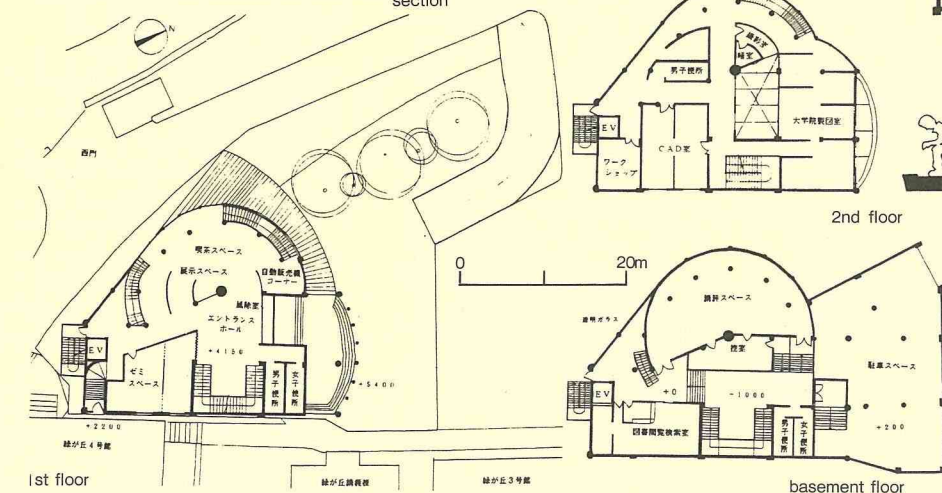
増田泰良

Yasuyoshi Masuda



sectional perspective

section



2nd floor

basement floor

■大学院製図室
前に壁がある方がいろいろと便利なので, 各席が壁に向かうよう配置した。また振り返れば顔を合わせて周囲の人と相談したり議論したりできる。

■ワークショップ
手元が暗くならないように十分に採光する。さらに塗料や接着剤などを頻繁に使用するので, 窓を大きくとり換気にも十分注意する。

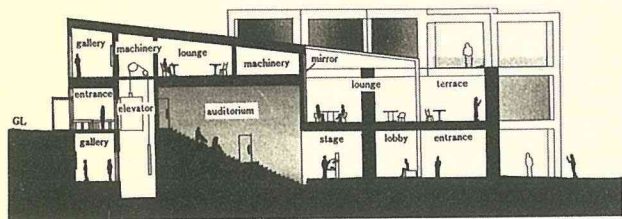
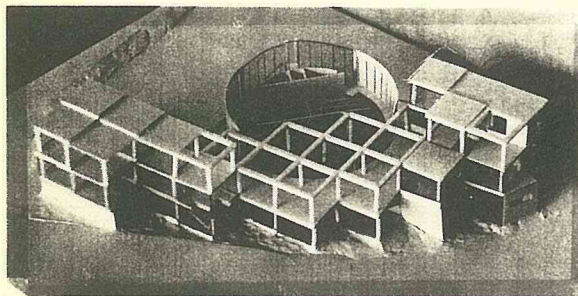
■CAD室
落ちついて作業できるように, 各端末を壁際に配置し, 目隠しを付けるが, 振り返れば周囲の人と相談できる。直射日光の影響を抑えるために, 窓にはブラインドまたはカーテンを備える。

■講評スペース
スライド映写などを行った際に見やすいように階段教室の形式をとる。普通教室と違いノートを一生涯とったりしないので, 机がなく限られた面積を有効に使えるベンチ席とする。

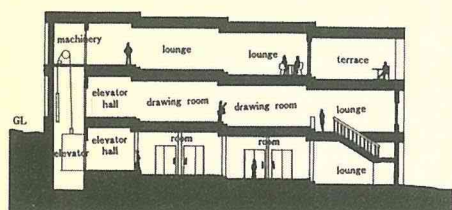
■敷地には緑が丘1号館方向と西門方向の2つの方向性があり, それを考慮しながら設計を進めた。学生が気軽に利用でき, かつ地域へも開放できる東工大緑が丘地区のシンボルとしての建築を目指した。内部の各室は使いやすさを第一の目的とし, 現状の短所の解消にも努めた。学生が, 時には地域の人が集い, 常に活気にあふれた空間になることを期待する。

The Intersection

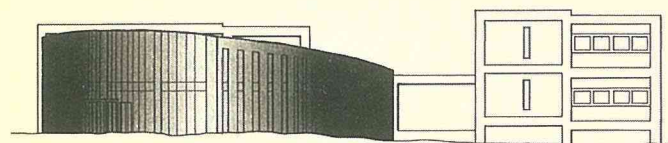
渡會奈由香
Nayuka Watarai



section

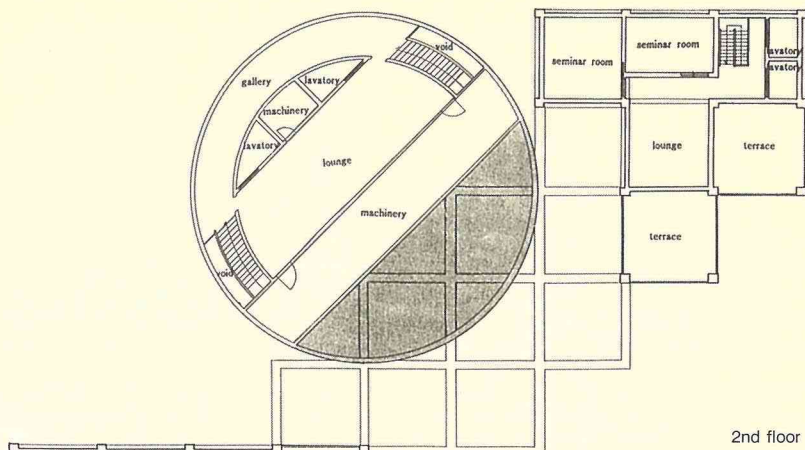


section

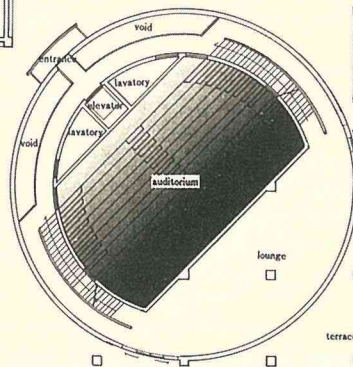
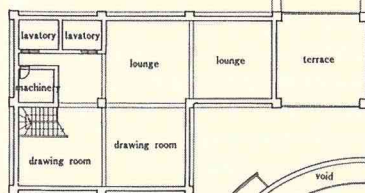


west elevation

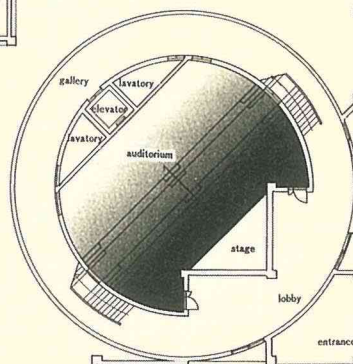
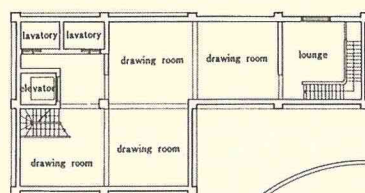
■現在、構内にはほとんど外部の人は訪れない。時々、お花見や銀杏を拾いに来る程度である。この閉ざされた空間を地元の人たちに開こうと、空間・人との“交わり”を考えた。南門からと校舎からのアプローチを考え、中央の円形ホールと東門を開放し、西棟は主に学生の利用とした。ラウンジを随所に設け、特に円形ホールと交わる1階には、鏡とガラスを用いて、外部と内部の空間的な交わりを試みた。



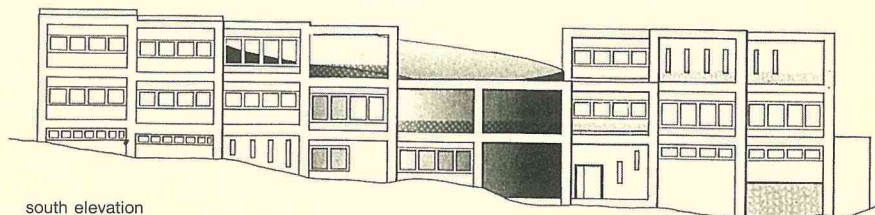
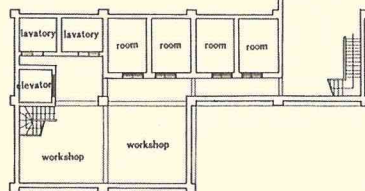
2nd floor



1st floor



basement floor



south elevation

1996年度設計製図第二(2年生)優秀作品より

Best Sophomore-Studio Work: Autumn Semester

都市と住居

Urban Space/Residential Space

担当：八木教授，奥山助教授

課題：この課題の対象敷地は，仮想の設定として，現在3軒の戸建て住宅のオーナーが区分所有しているものである。自由が丘の中心的な繁華街からは多少距離をおいているが，前面の緑道が最近整備されたことなどから，住居だけではなく，商業施設が十分利用可能な立地条件となった。そこで，3人のオーナーが共同で敷地の有効利用および経済効率という観点から，賃貸居，貸商業スペース，および3軒のオーナーハウスを含んだ住商混在型の集合住宅への建替計画を求めてきた。都市に住むという居住形式に対する現時点での可能性を各自想定し，街に対して働きかけるような具体的な計画として提案してほしい。

設計条件：オーナーハウス3戸(1戸あたり150~200㎡程度，家族構成は自由)，賃貸住居25戸程度(規模室構成は自由)，パーキングスペース(住宅用・最低20台分)，商業スペース(業種内容は自由)，敷地周辺の地盤レベルは，北側緑道に対して南側前面道路は約1m上がっている。

建物規模：原則として地上5階建，地下2階以内とする。法的規制を遵守すること。(近隣商業地域，建蔽率80%，容積率400%)

構造：RC壁式構造，RCラーメン構造，鉄骨構造の中から選択する。

設備：基本的に個別空調システムを想定する。電気室，受水槽室が地下に必要(150~200㎡程度)

法規：特に設定しないが，2方向避難路は確保すること。

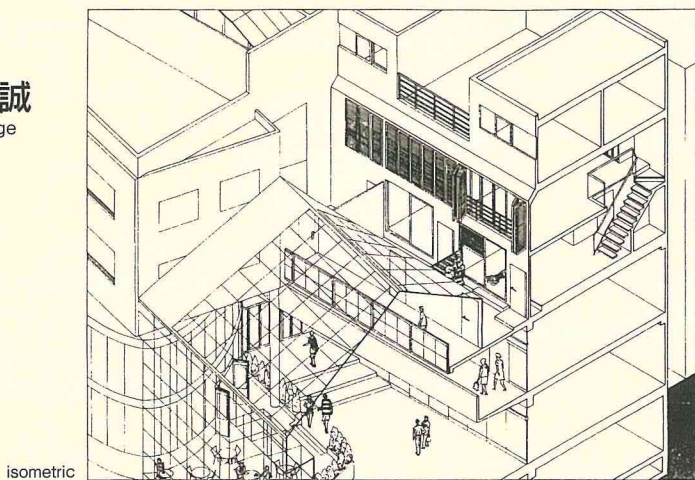
提出物：配置図(1F平面図を兼ねる・1/200)，各階平面図(1/200)，断面図(2面以上・1/200)，立面図(3面以上・1/200)，オーナーハウス平面詳細図(1/100)，全体アクソノメトリック図(1/200以上)，設計趣旨(簡条書)，建物名(各自の設計趣旨を明確にしたタイトル)，模型，模型写真，その他(設計意図を表現するのに必要と思われる図面を追加してよい)



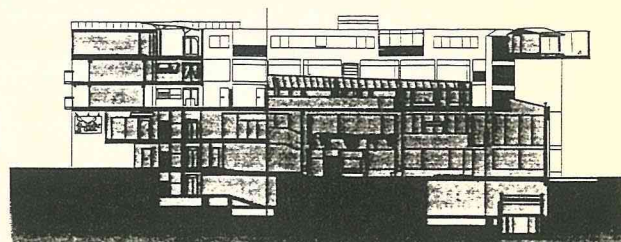
対象敷地：世田谷区奥沢5-26 S=1/4000

Square Liberty

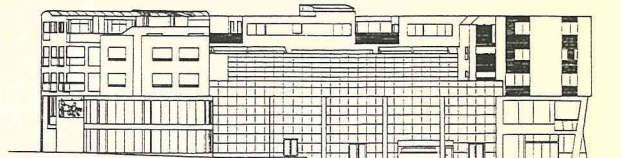
稲毛 誠
Makoto Inage



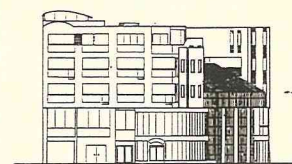
isometric



A-C section



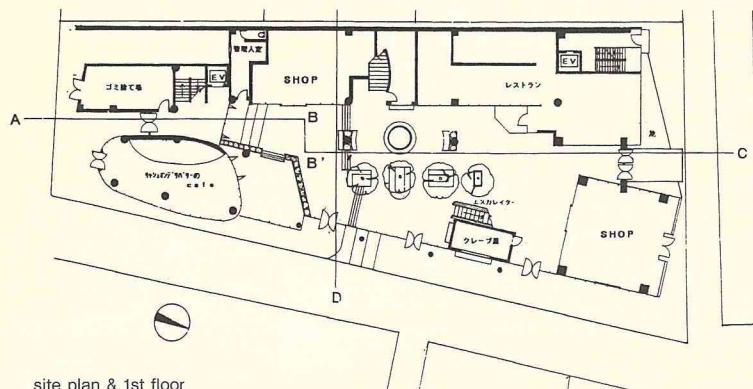
east elevation



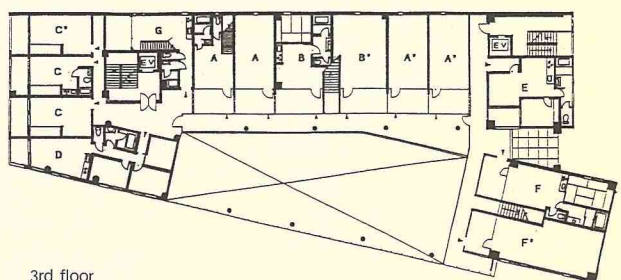
south elevation



north elevation



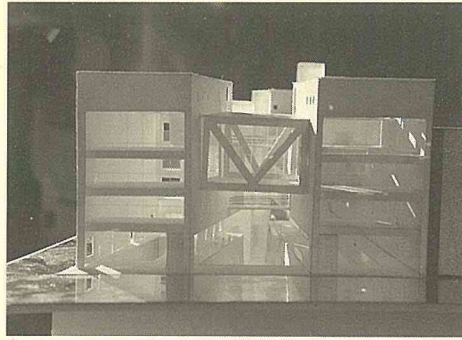
site plan & 1st floor



3rd floor

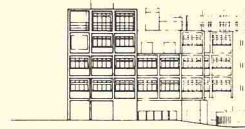
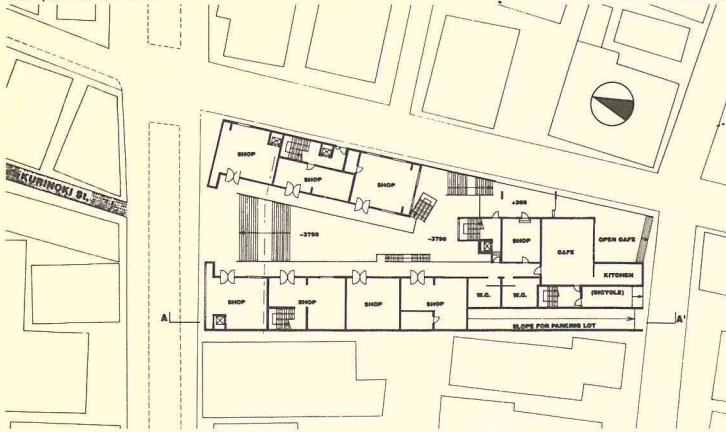
Twin Wall

照井 崇
Takashi Terui

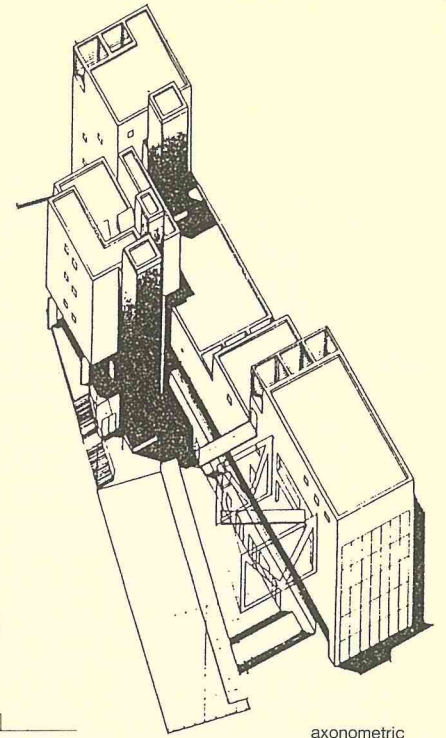


north view

site plan & 1st floor



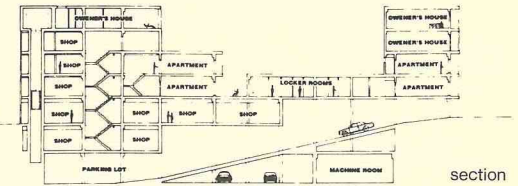
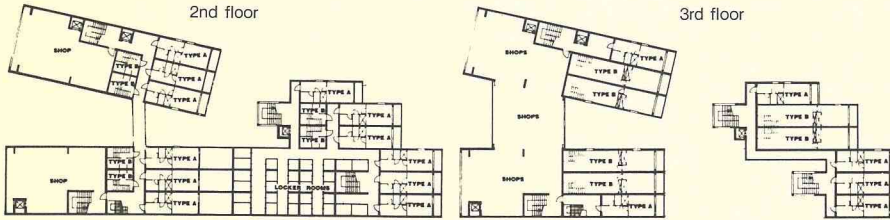
south elevation



axonometric

2nd floor

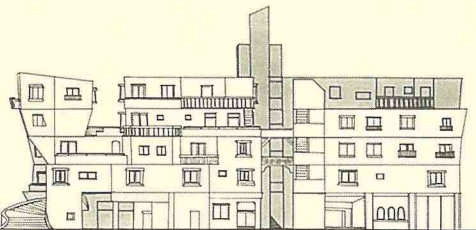
3rd floor



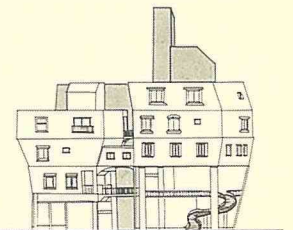
section

The City in a Building

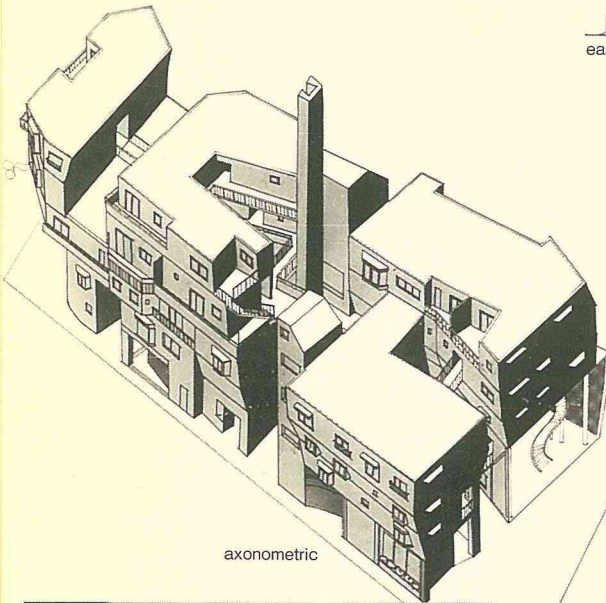
増田泰良
Yasuyoshi Masuda



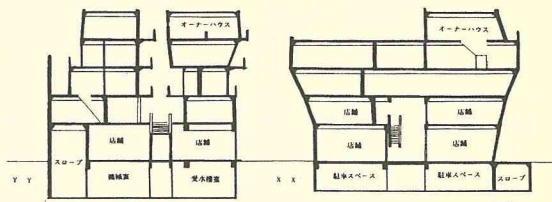
east elevation



north elevation



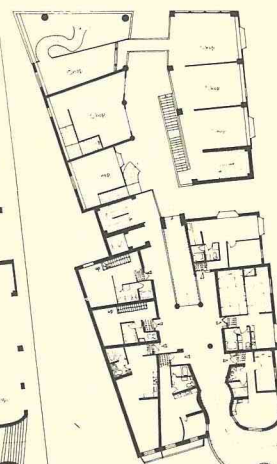
axonometric



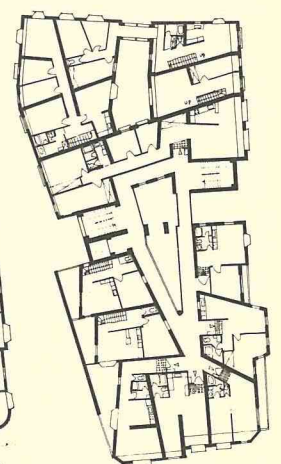
sections



site plan & 1st floor



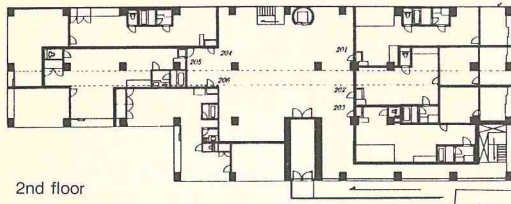
2nd floor



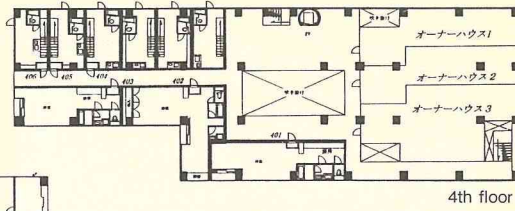
3rd floor

Again

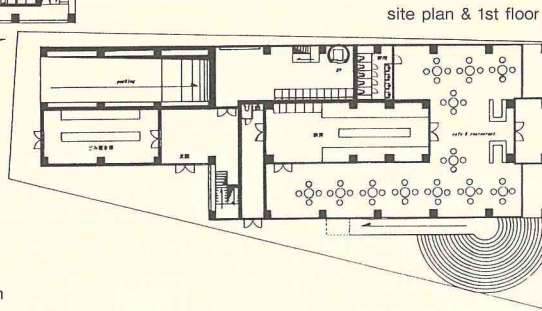
岡本彰生
Akio Okamoto



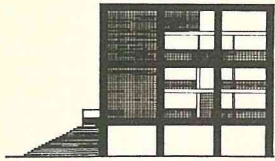
2nd floor



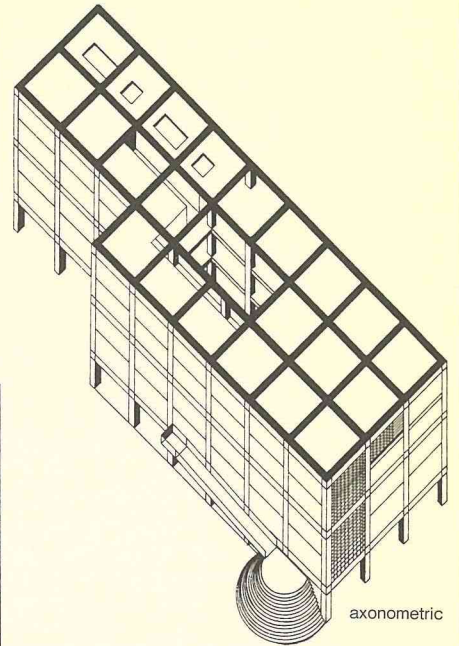
4th floor



site plan & 1st floor



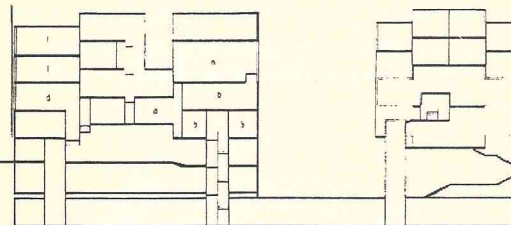
north elevation



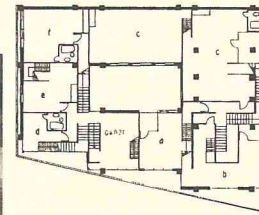
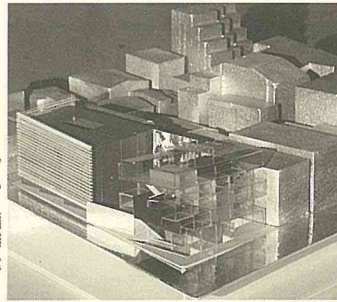
axonometric

Read Between the Words

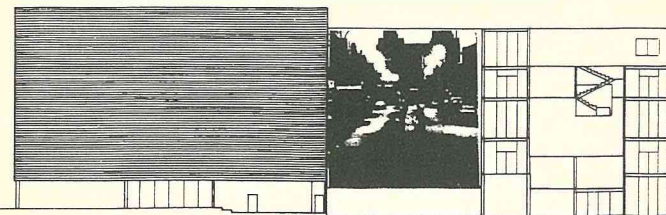
高橋 寛
Hiroshi Takahashi



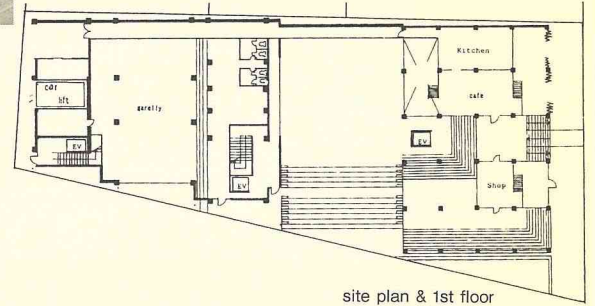
section



2nd floor



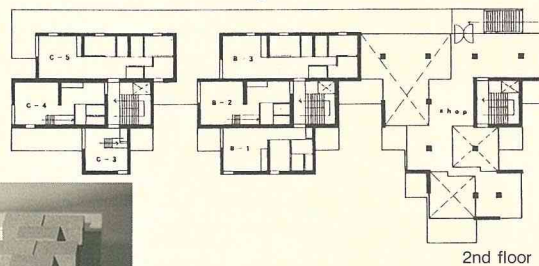
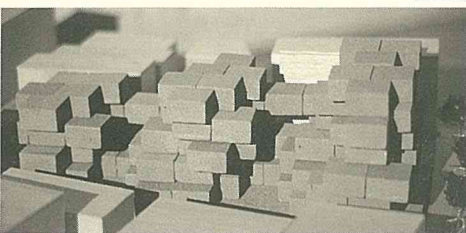
elevation



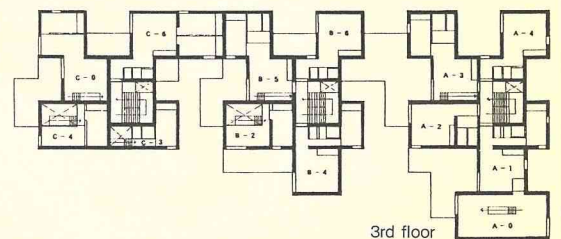
site plan & 1st floor

Blocks Dance to the Rhythm

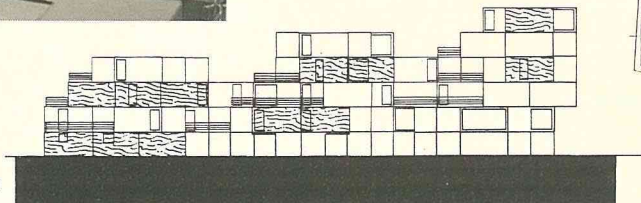
田中正洋
Masahiro Tanaka



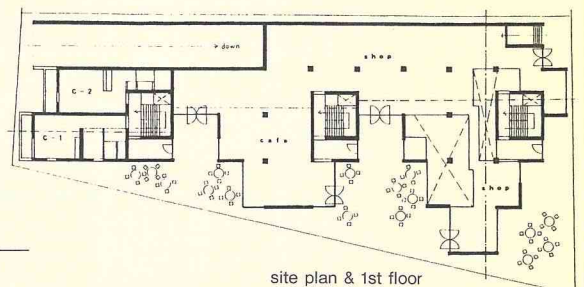
2nd floor



3rd floor



east elevation

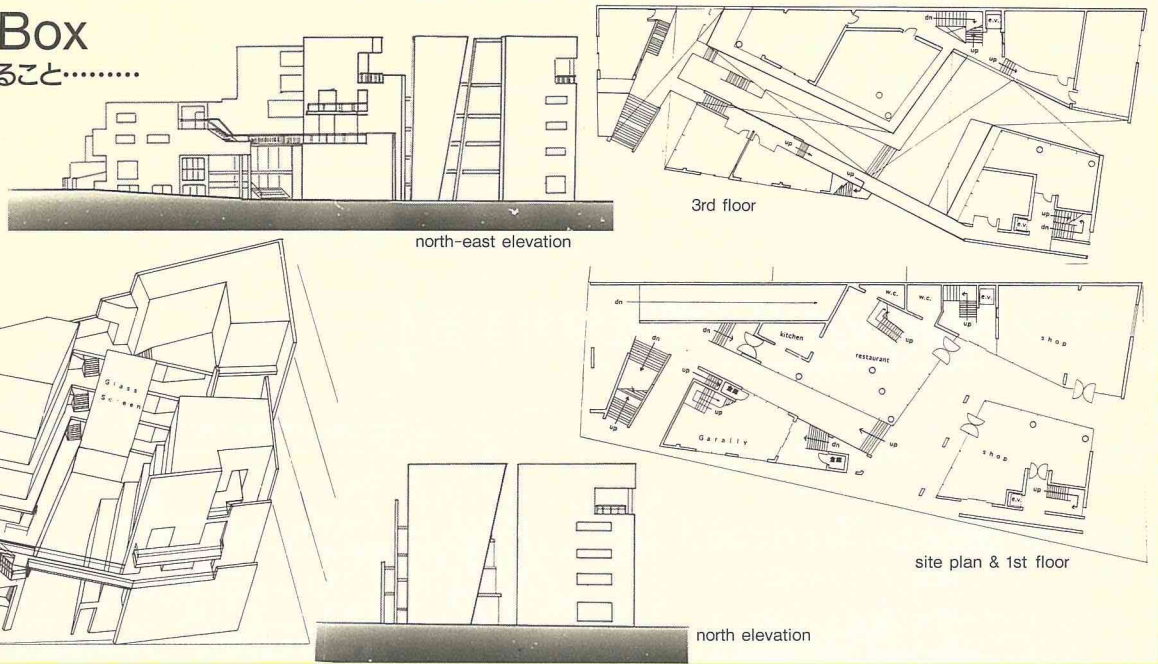


site plan & 1st floor

Urban Void Box

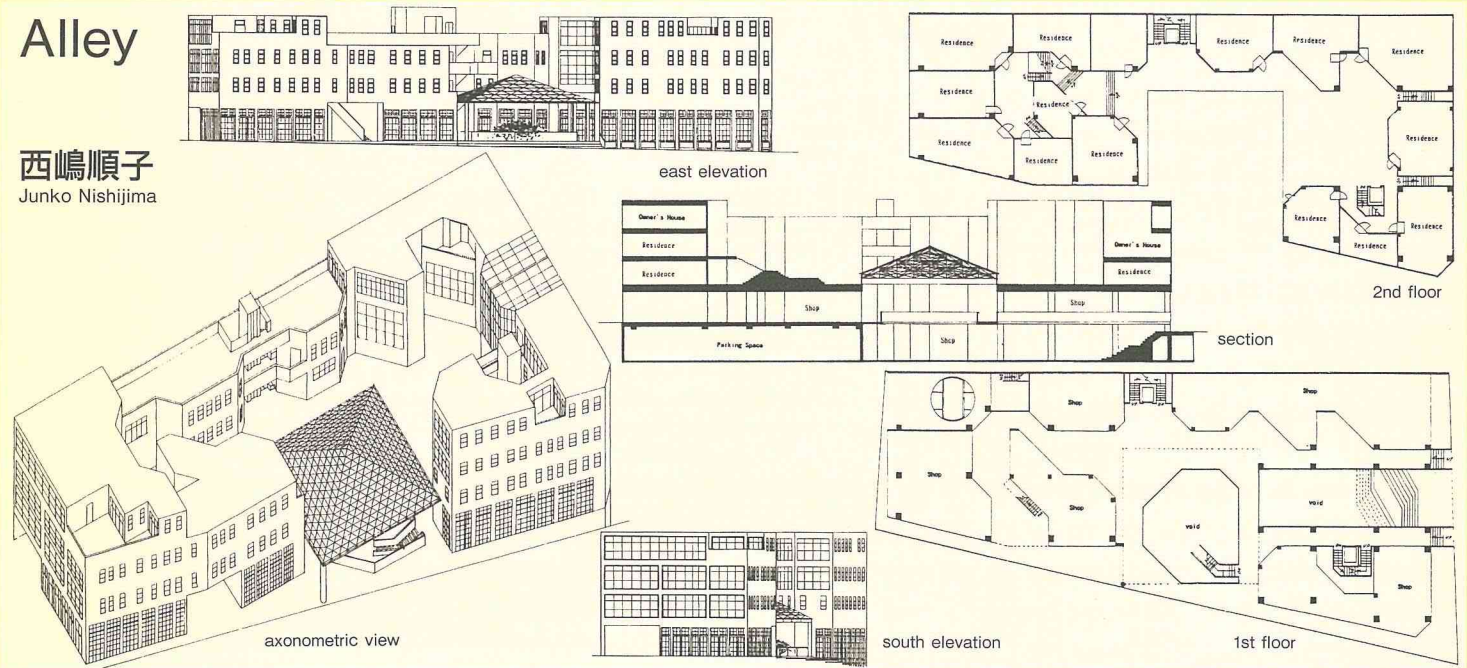
変容と空虚の狭間でできること……

中島光平
Kohei Nakajima



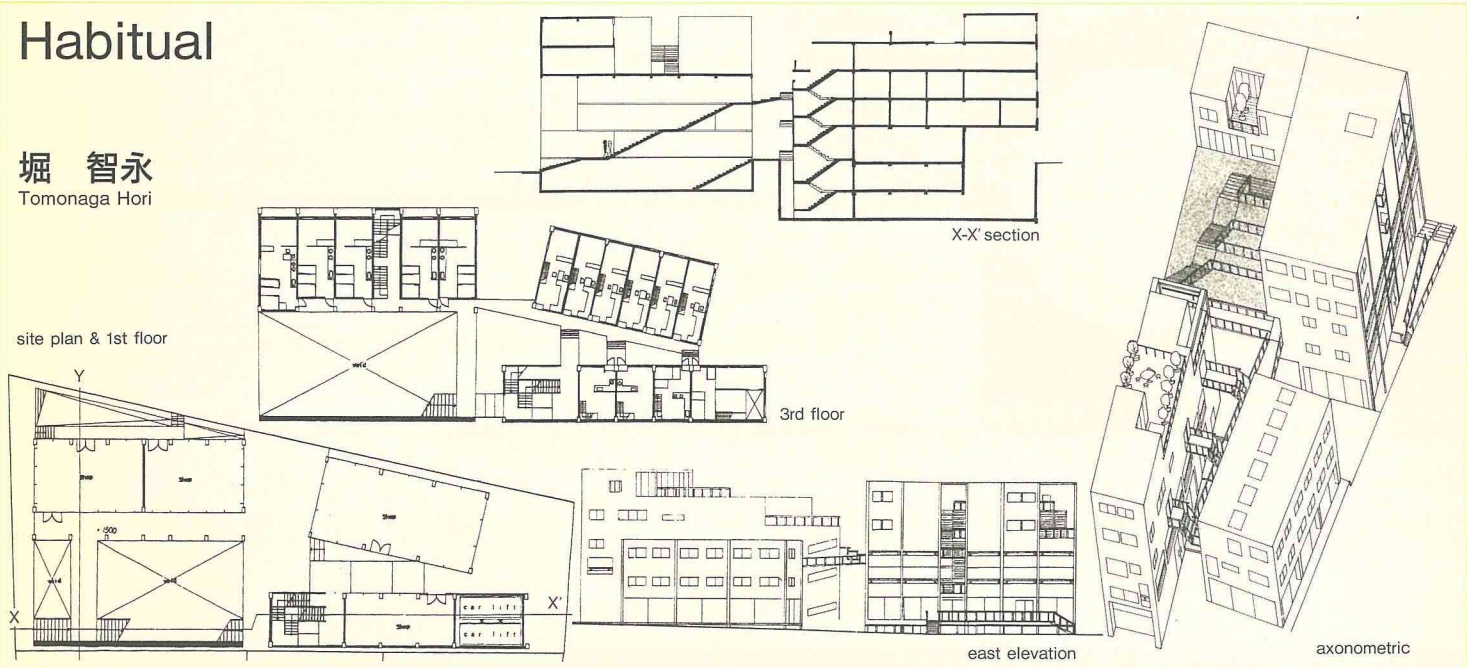
Alley

西嶋順子
Junko Nishijima



Habitual

堀 智永
Tomonaga Hori



1996年度設計製図第四(3年生)優秀作品より

Best Junior-Studio Works: Autumn Semester

【コモン広場周辺の住宅群を設計する】 Houses Surrounding a Common Space

講評

非常勤講師 宮脇 檀

日本の住宅地の大部分を占めている戸建て住宅地の環境について、現実としての劣悪化をどうするかについての研究も計画も、公的にはほとんどないのが現状である。その解決の糸口のひとつとして環境や空間の共有という展開があることを理解し、計画線上に載せる体験をしてもらおうと企画した課題であった。理解しやすいように、私たちがすでに宅地造成計画まで行ったコモンという共有広場をもった団地を選び、グループごとに任意のコモンを選び、その周辺の住宅群をひとつのシステムとして計画させる方法をとった。

課題提出時に日本の住宅地の問題点、およびコモンという共有地の概念、事例に関する講義を行い、敷地見学、その他の資料頒布などを行った。結果としては、基本的に単体としての住宅に対する実生活上の体験、知識、興味そして設計経験のすべてにおける不足、住宅地というものに対する無関心、集合化という概念の理解不足、社会に出れば必修である共同設計という試みも初めてであったことなどから、決して満足すべき結果ではなかった。日本の建築界全体がもっている風潮がそ

宮脇 檀
Mayumi Miyawaki



1936年 名古屋市生まれ

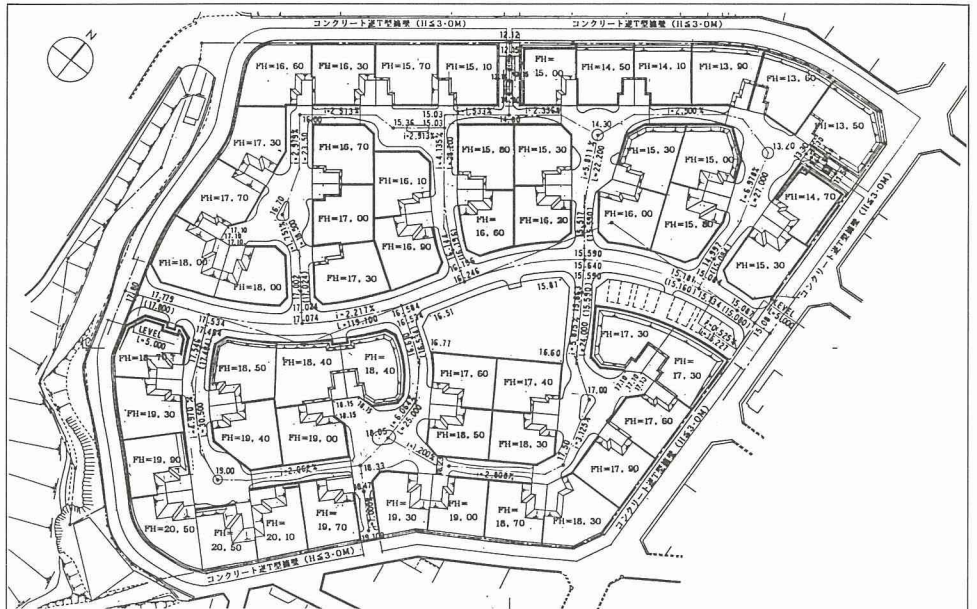
1959年 東京芸術大学建築学科卒業

1961年 東京大学大学院修士課程修了

1964年 宮脇檀建築研究室開設

現在 日本大学生産工学部建築工学科教授

主な作品：松川ボックス(80年建築学会賞)、秋田相互銀行角館(商業空間デザイン賞特別賞)、静思堂(兵庫県みどりの建築賞)、高須住宅地85(緑の都市賞建設大臣賞)、高岡公園体育館(豊田市景観賞優秀賞)、出石町役場(兵庫さわやか街づくり賞)、シーサイドももち・グリーンテラス城山・コモンシティ星田などの住宅地計画、新本牧地区都市景観計画などの環境計画。



課題：コモン広場周辺の住居群を設計する(共同設計)。コモンという共有地をもつ小型の住居集合がある(設計済み、未工事)。同計画内の任意のコモンを選び、コモンのコンセプトを決定し、そのコンセプトにしたがった住居を設計し、配置する。

敷地(地形、地域、環境、住民、生活)を読み、読みにより環境の設定やその環境に立つべき住民とその集合を設計する。

敷地：日野市高幡不動鹿島台住宅跡地(ガーデン54住宅地隣地)。1.5hの敷地に53軒の戸建住宅を計画。1コモンあたり6~8軒の住宅が建つ。

要求：コモンとは何か、コモンをもつ住居集合とはどのような方向をめざすか、新しい住宅地の形、それにふさわしい住居のデザインと環境。

日程：

10月4日：課題説明

10月7日：この課題を選んだ学生のための補助オリエンテーション。日本の住宅地、日本の住宅の現状、コモンをもつ住居地の問題点、計画のポイント等を、グループを作り(4~5人)関係資料の読みとり、現地視察、計画するコモンの決定、コンセプト討議を行っておく。

10月18日：コンセプト提出、発表。各グループごとにコンセプトのプレゼンテーションを行う。

10月24日：第1回エスキス。コンセプトに基づいた全体環境計画の提出。住宅の考え方も含むことは当然。

11月11日：環境計画をうけての住宅設計。コモンに対する住宅の考え方、あり方とその形、平面、立面、形態等。

11月15日：第2回最終エスキス。全体のまとまりを見る。コモンと住宅の関係、住居と住居の間にあるものを計画する。

11月22日：最終提出、全員講評

提出図：

①A-1用紙に、計画コモン周辺の基本計画図(建物配置、平面、外構、植栽、舗装、道路)を示したもの。図面は1:100彩色

②コンセプトを表現するためのプレゼンテーションボード、彩色

③模型または鳥瞰透視図(模型が望ましい)

のまま現れていたといっただけではよいのか、出題ミスであったのか、講義的部分を増やして理解度を高めるべきであったか諸賢の批判を仰ぎたいところである。

□個別講評 グループ1：コモンに対して個室がパーゴラをもって連続的に対応し、リビングが独立的に存在するというコンセプト自体はひとつの解だが、2階レベルで相互に呼び合う個室がそのためにコモンという共有地からレベル的に離れてしまった矛盾と、このコモン以外への計画的な広がり薄さが気になった。

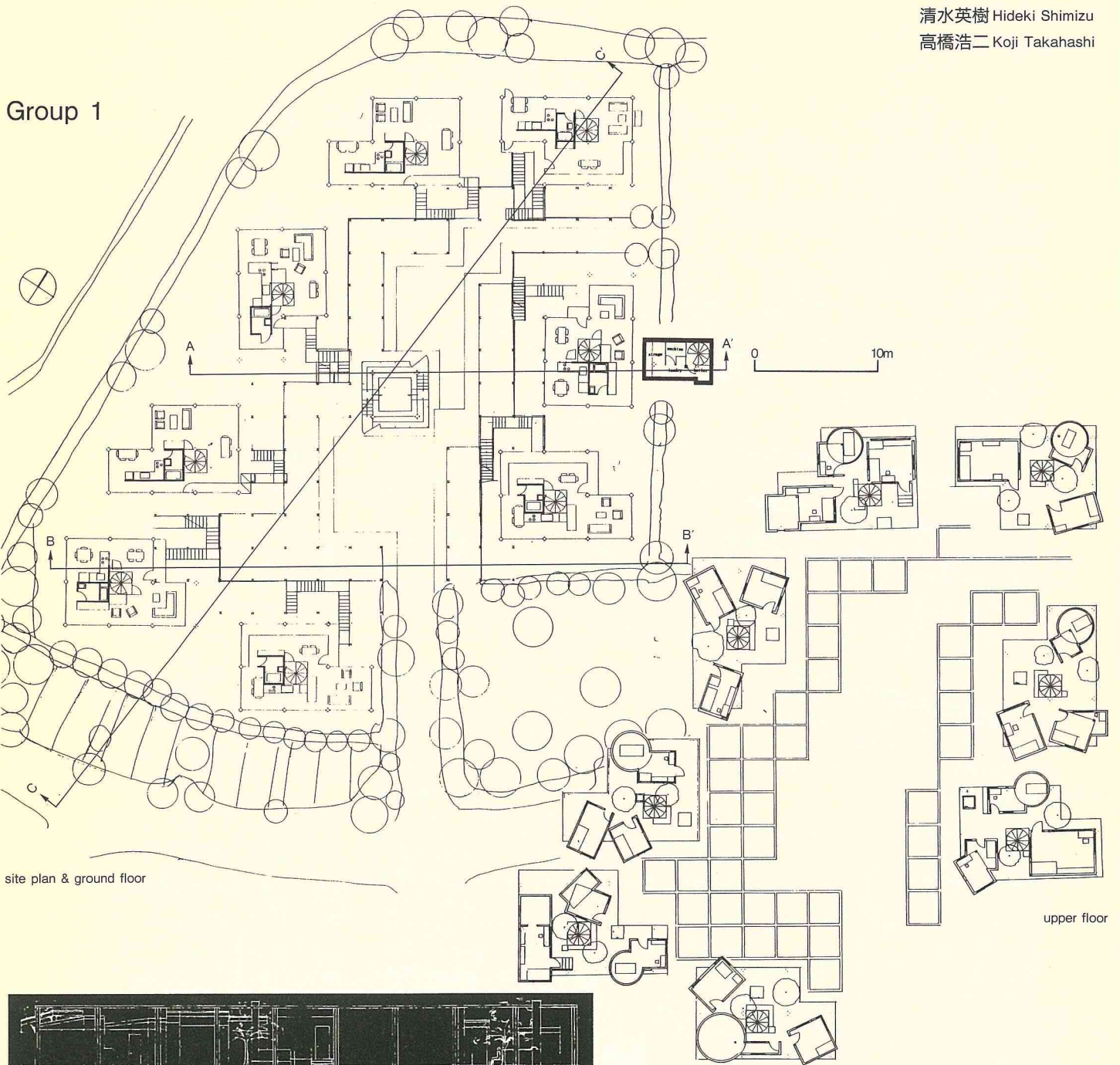
□個別講評 グループ2：地表1階部分はすべて共有的に透明で開放され、コモンの緑の梢を2階住戸から眺め、規格化された各住戸は屋上で繋がるという考え方は、現実にはあり得るはずはないが、その新鮮さを評価したい。

□個別講評 グループ3：子どもたちがコミュニティをつくるという事実から、子どもたちのスケール、行動に合わせた空間の連続で環境をつくらうという視点を買いたい。

The Mind of Billy Milligan

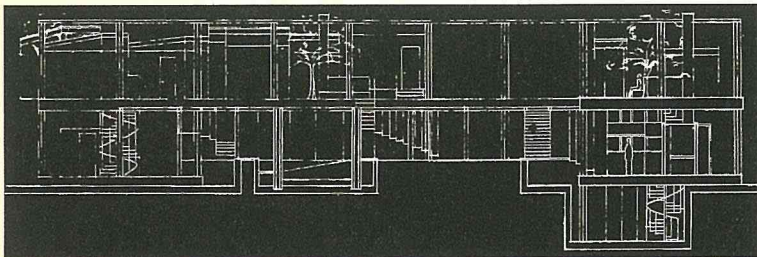
青柳憲昌 Norimasa Aoyagi
石井秀明 Hideaki Ishii
清水英樹 Hideki Shimizu
高橋浩二 Koji Takahashi

Group 1

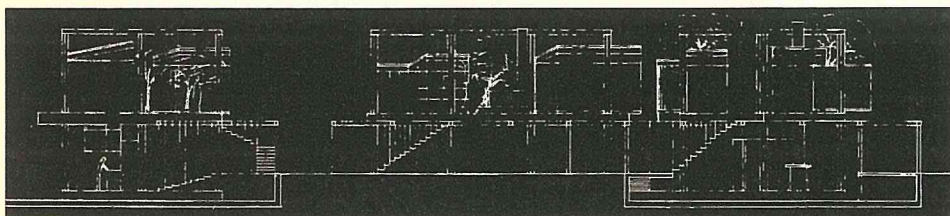


site plan & ground floor

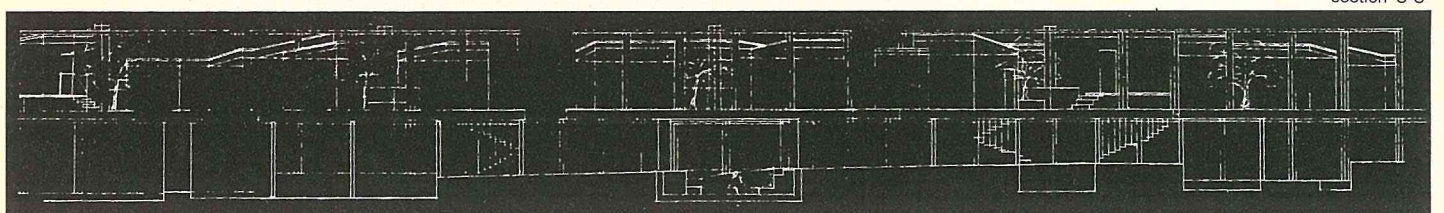
upper floor



section A-A'



section B-B'

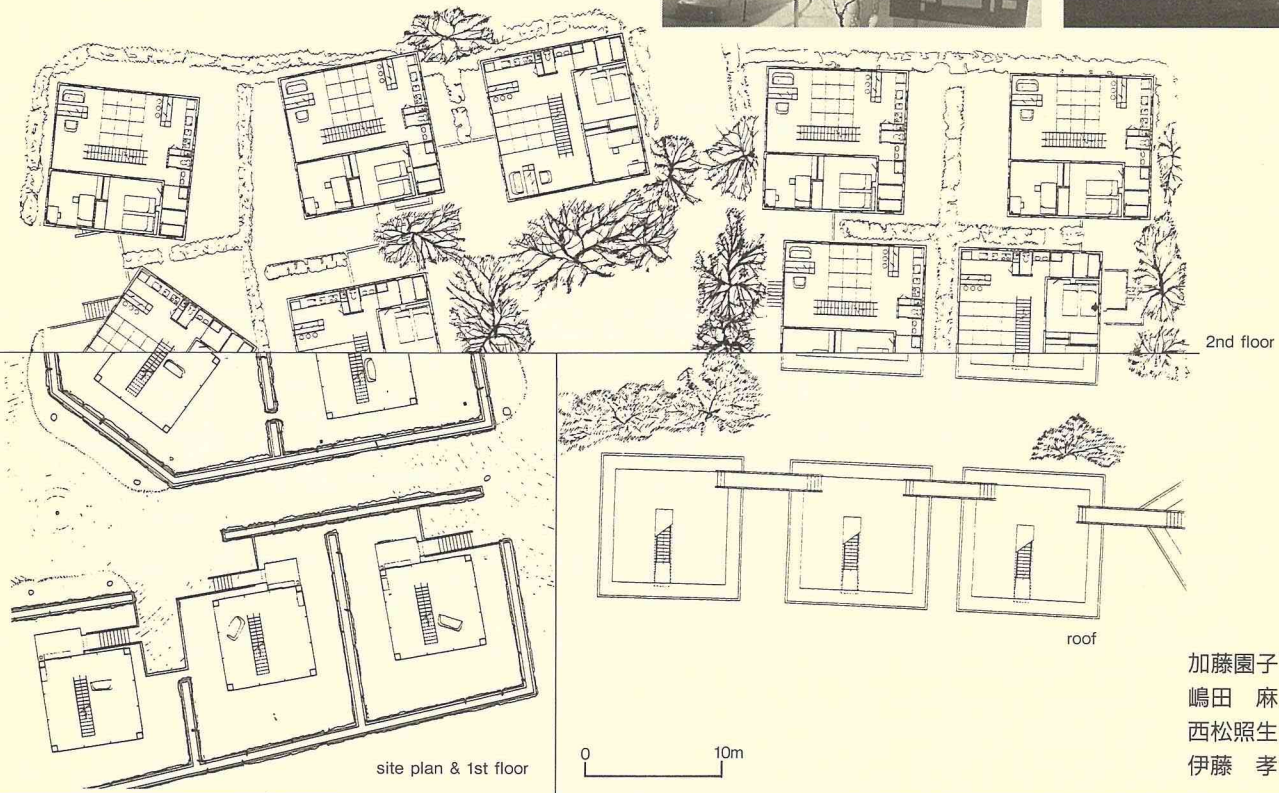
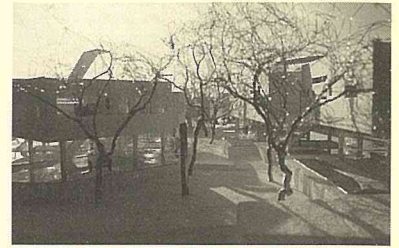
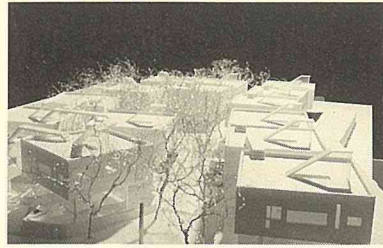


section C-C'

Platforms for Publicity

公共性の難壇

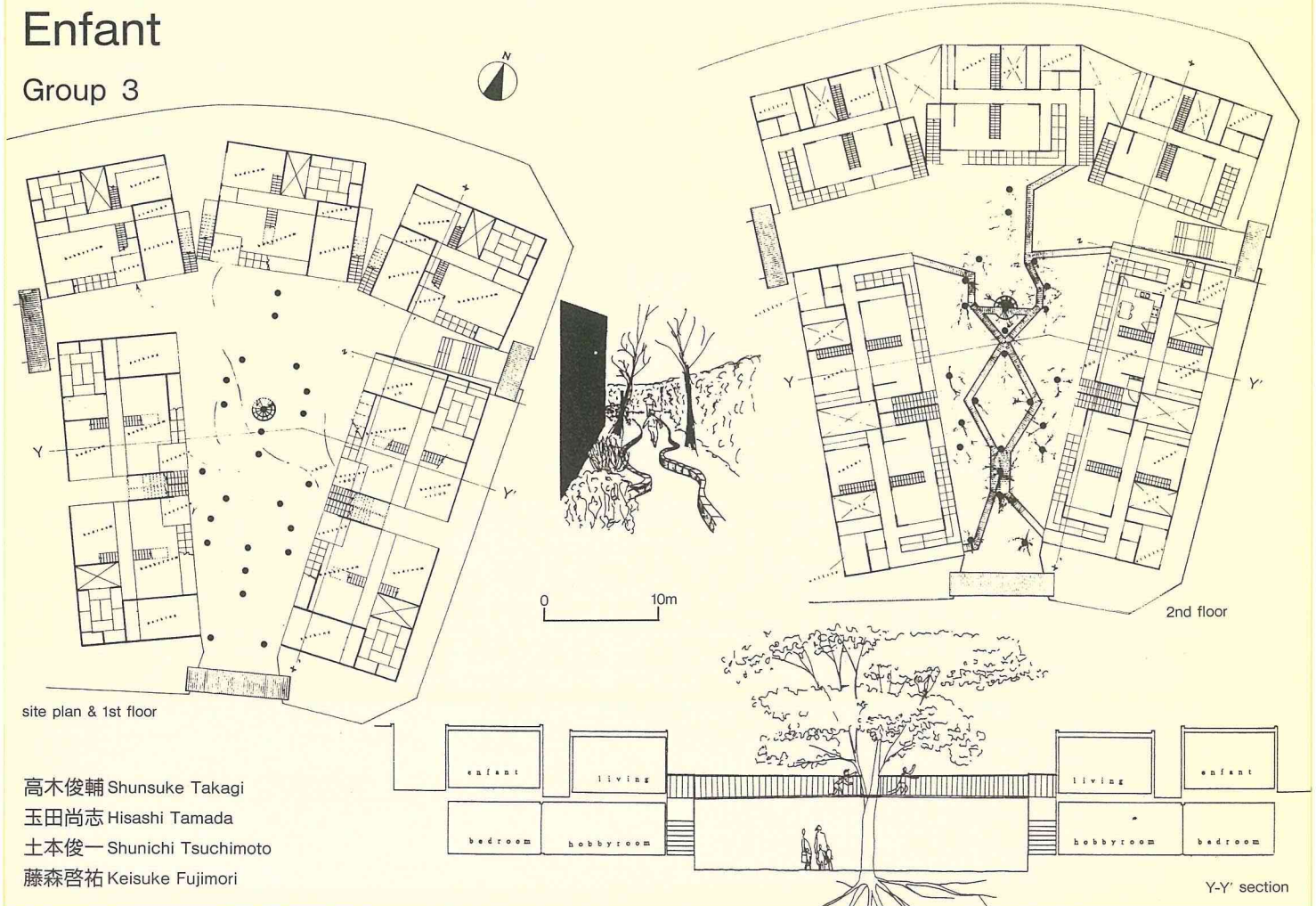
Group 2



加藤園子 Sonoko Kato
 嶋田 麻 Asa Shimada
 西松照生 Teruo Nishimatsu
 伊藤 孝 Takashi Ito

Enfant

Group 3



高木俊輔 Shunsuke Takagi
 玉田尚志 Hisashi Tamada
 土本俊一 Shunichi Tsuchimoto
 藤森啓祐 Keisuke Fujimori

Y-Y' section

1996年度設計製図第四(3年生)優秀作品より

Best Junior-Studio Works: Autumn Semester

【町の小さな美術館】

Museum for a Small Town

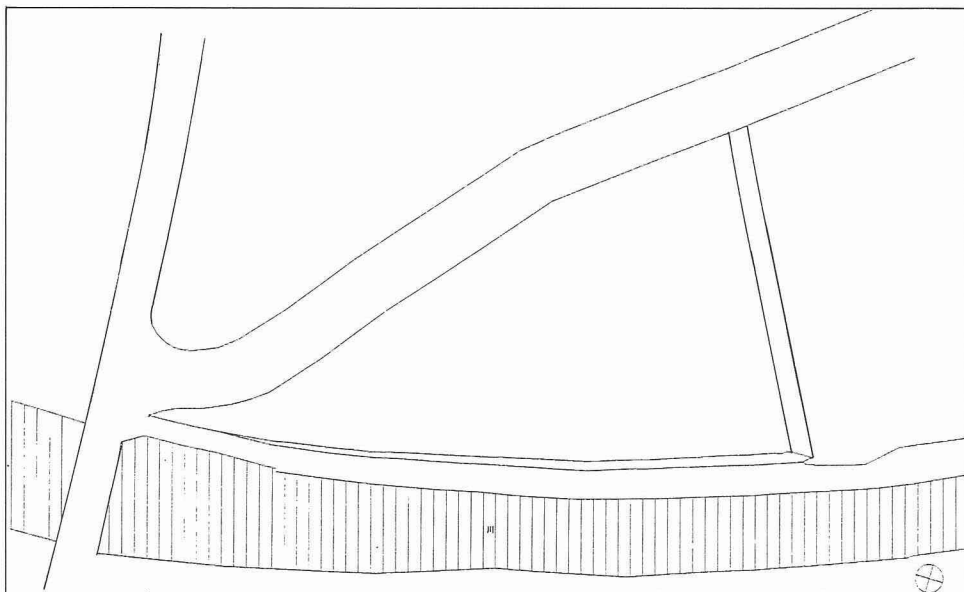
講評

非常勤講師 妹島和世

課題は山に囲まれた場所にある町の小さな美術館でした。私としては、自然にあふれた場所であるように見えながら、いっぽうで、都市となら変わらない情報に満たされた場所でもあるという、いわば新しい環境において、建築のあり方といったものについて考えてみたいと思っておりました。課題の最初にそのように説明したつもりでしたが、私としても解答を提示できるわけでもなく、うまく伝えられなかったようで、どちらかといえば、今回の課題については、美術館というビルディングタイプに対する反応、それもどちらかといえば、強い反発の反応を感じました。しかし、それも十分に考えてみる問題であると思いました。

全体として、力作が多かったように思いますが、エスキスを通して感じたことは、ひとつは、さまざまな建築の構成について知識が豊富であるということ、もうひとつは、コンセプトというものに異常なこだわりがあるといったことです。前者は、そういう新しい構成に興味があるのはよくわかりますし、それを自分なりにうまくまとめて、実際に体験できれば魅力的なものだろうと思わせる優れたものもありましたが、しかしもういっぽうで、建築の構成そのものについて考えてみることも必要なのではないかと思います。

どこかで見たことのあるような構成に頼るのではなく、これから生まれつつある、あるいはもう既に生まれている環境における建築というものについて考えてみると、建築のいわば内部だけで完結する構成を、疑ってみる必要があるように思います。それからコンセプトというものですが、それから何か建築が自動的に生まれてくるというような思いが強すぎるように感じました。ものが良ければそれでいいのだなどというつもりはまったくないのですが、しかし、建築を考えているのであるから、どちらかといえば、建築で、何



課題：町の小さな美術館

まわりを山に囲まれた川べりの敷地に、町の小さな交流スペースを併せもつ美術館を設計してください。敷地周辺は、いっぽうでは豊かな自然が広がりながら、もういっぽうで敷地のまわりには、トタン屋根の住宅群がいくつか点在しているところです。このような環境の中で、ランドスケープについても考え合わせた美術館を設計してください。展示内容は自由とします。

敷地面積：4000㎡ 延床面積：750㎡
各室面積：展示室：250㎡ 交流スペース：100㎡
収蔵・荷解・搬入：130㎡ 管理諸室：70㎡ 共用スペース（エントランス・WC等）：100㎡ 機械室：100㎡
提出物：敷地全体の考え方がわかる模型 S=1:200
図面 S=1:100（必要図面は自由）
建物をよく説明できる模型写真（点数は自由）

かを示してもらいたいと思いました。そして、説明するということは、建築の前提でもなければ、建築の補完でもなく、もう少しそれぞれが、自由に、パラレルにあってよいのではないかと感じました。

そんな中で、高橋空也君の作品は、展示するということと建築の関係を、自分ではじめから考え直した好感のもてるものだったように思います。プレゼンテーションも、それを一瞬にしてうまく伝えるものであったと思います。長岡大樹君の作品は、最終的にはまだまだ不完全だったと思いますが、エスキス・チェックのたびに、うまくまとまっていたものをこわしながら新しい可能性について考え続ける態度に感銘を受けました。遠藤康一君の作品は独特の形態をしていると思います。よくまとめあげたと感じました。香川貴範君、仲山和利君の作品は、完成度は非常に高いものだと思いますが、ここからさらなる展開を期待したいです。

妹島和世
Kazuyo Sejima

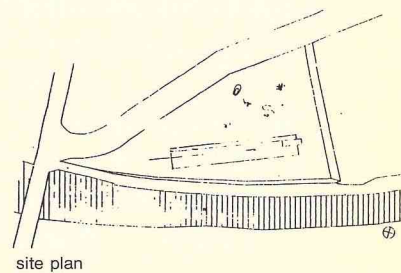
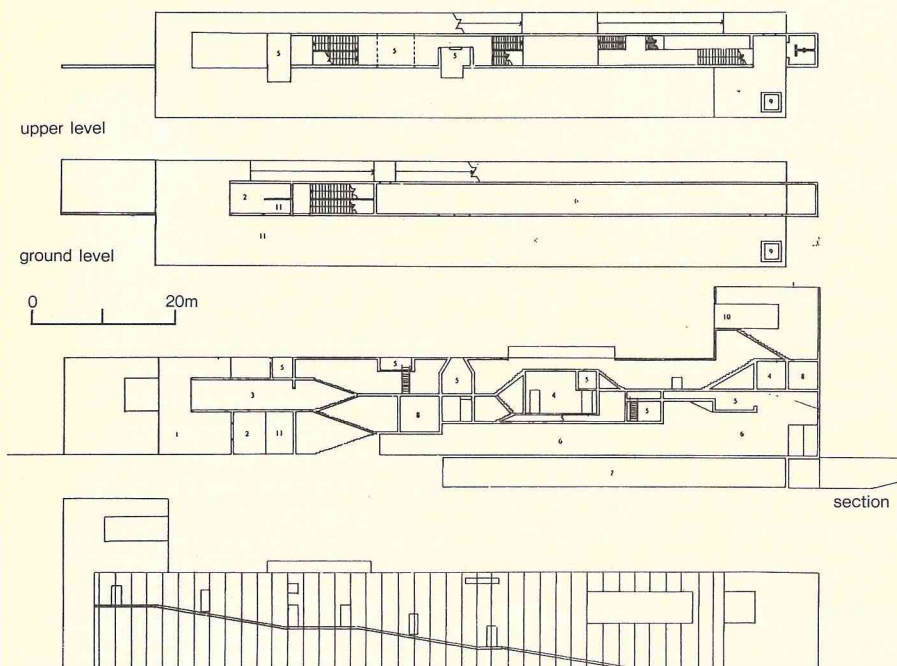
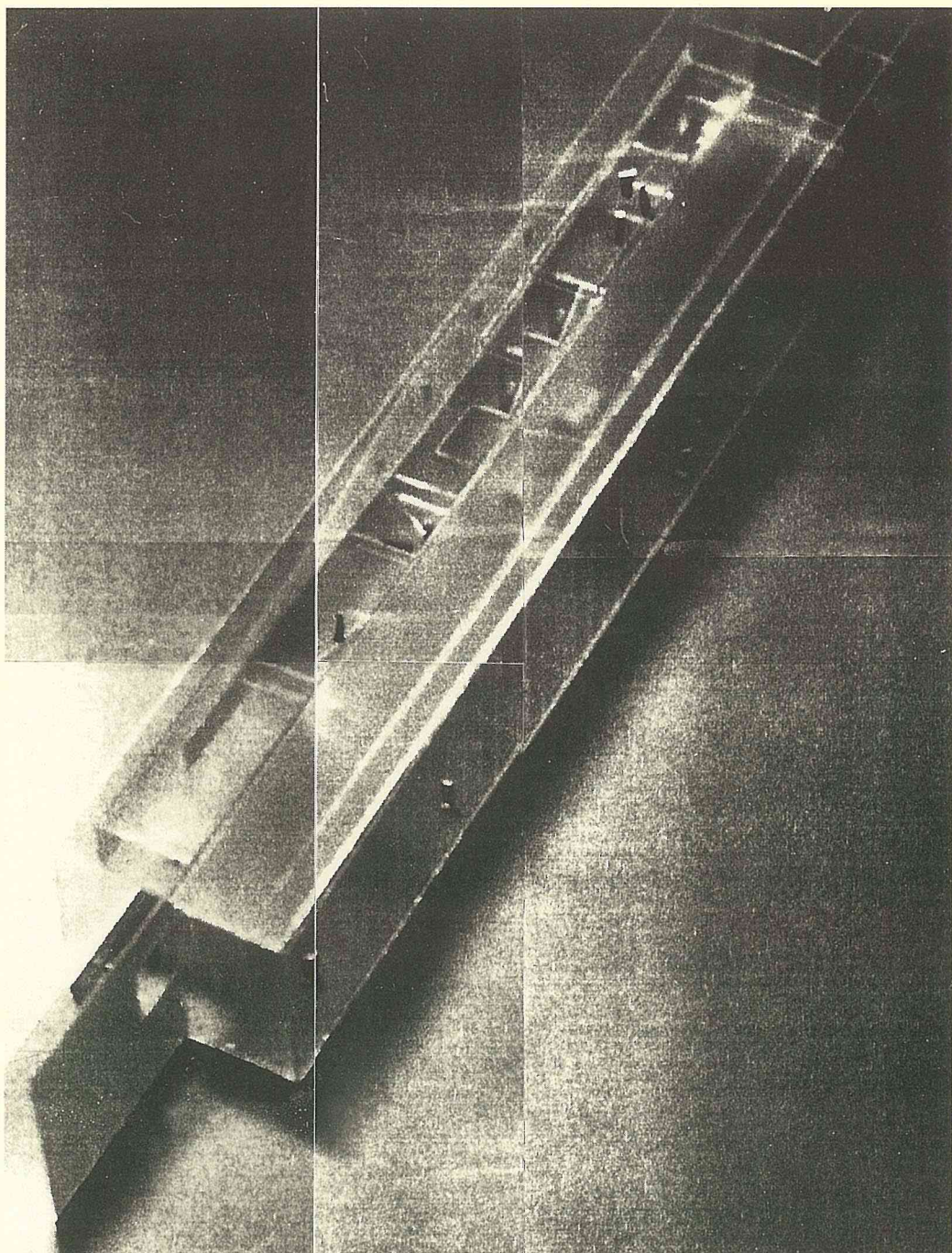


1981年 日本女子大学大学院修了
伊東豊雄建築設計事務所入所
1987年 伊東豊雄建築設計事務所退所
妹島和世建築設計事務所設立
1994年より西沢立衛と共同設計
現在 日本女子大学、東京工業大学、東京理科大学
非常勤講師
主な作品：PLATFORM（新建築住宅特集・新人賞）、再春館製薬女子寮（新日本建築家協会・新人賞、K.F.Brown環太平洋地域文化建築賞）、パチンコパーラーI・II・III、岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー・マルチメディア工房、熊野古道・なかへち美術館

町の小さな美術館

Small Town Museum

高橋空也
Kuya Takahashi

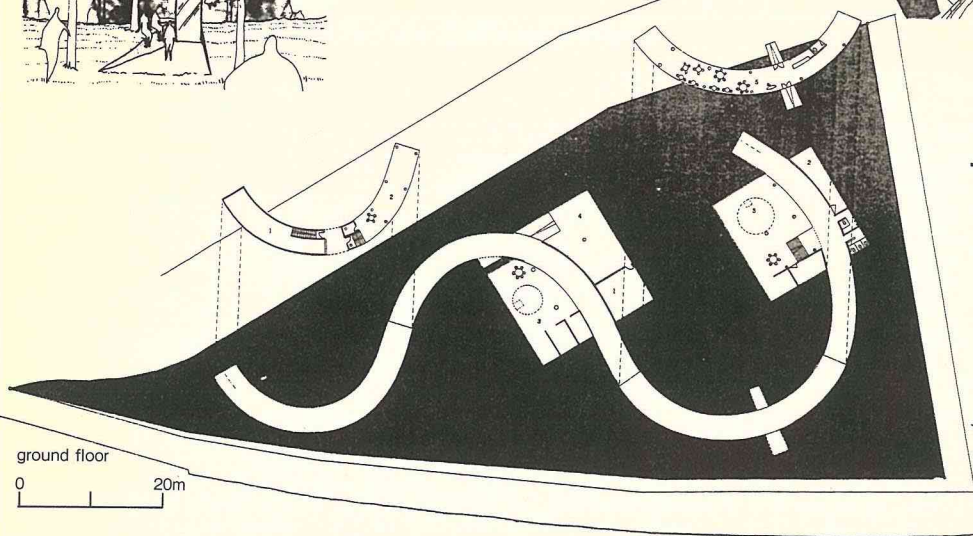
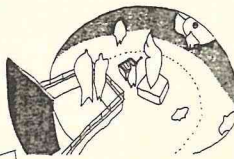
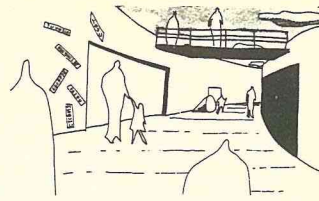
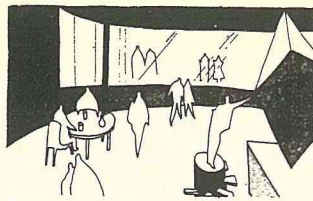
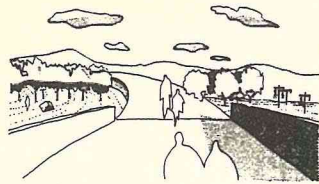
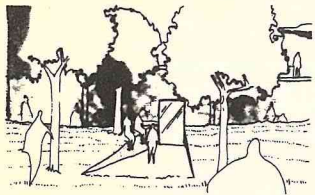


町の小さな美術館

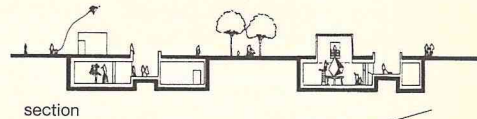
Small Town Museum

長岡大樹

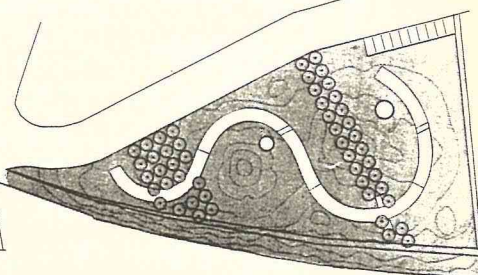
Taiju Nagaoka



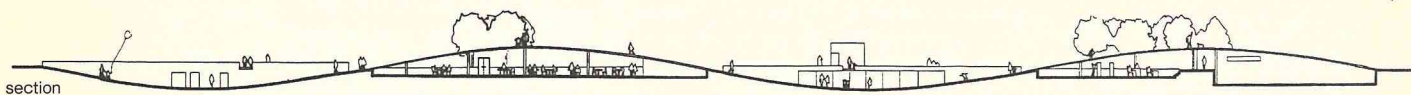
ground floor
0 20m



section



site plan

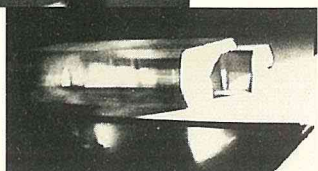
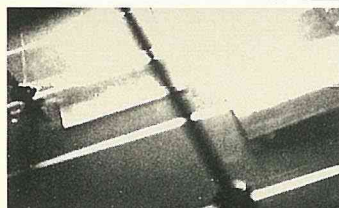
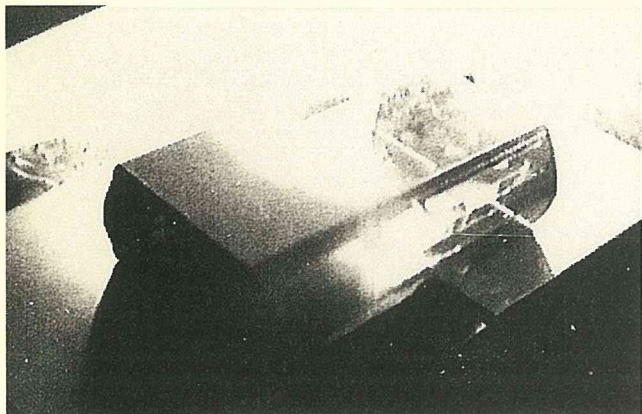


section

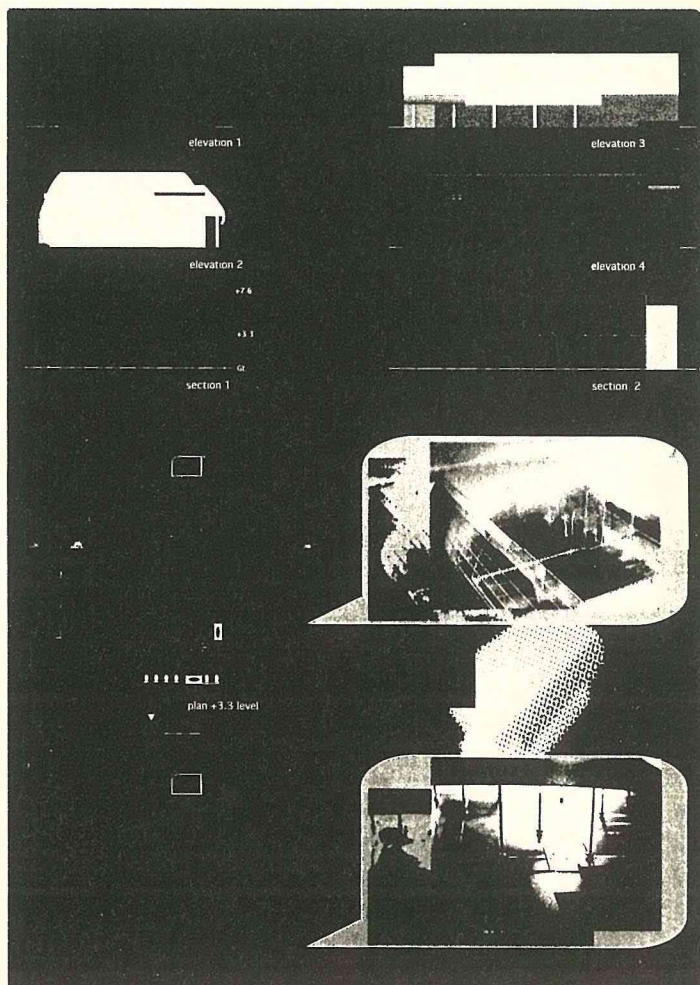
Monitor Pick-up

遠藤康一

Koichi Endo



0 10m



1996年度設計製図第四(3年生)優秀作品より

Best Junior-Studio Works: Autumn Semester

第三の地形 The Third Land

講評

講師 團 紀彦

「第三の地形」は、自然地形を第一の地形とし、建築をはじめとする人工的構造物を第二の地形と考えた場合に、その中間に位置づけられるメディアムとしての存在物を意味している。第三の地形は、自然と人工の関係性によってさまざまな形をとることが考えられる。自然に人間の手が加わり農作物を管理化した水田の風景も、自然環境とのバランスがとれていれば、ある意味で第三の地形の一例だといえるだろうし、また建造物の遺跡のように、かつては人工物であったものが徐々に風化して大地に還ろうとしているようなものも、その中に含めることができるだろう。

この課題では、そうした第三の地形に焦点をあてて、そのメディアムの造形的な可能性をスタディしながら、建築と環境の新たな関わり方の存在形式を追求しようとしている。

寺本恵美さんの計画は、山から平野部につながる斜面と一体化したアートの提案で、新たな地形を造り出しながら、地形との一体化がはかられている。鈴木裕美さんの計画は、土木造成などによって造り出される平場と擁壁を、図書館の建築計画の中に取り込んでいる。高橋雄二君と清水加陽子さんの作品はいくつかのフラグメントを複雑な地形の中に投入し、そこに周辺との異化作用を造り出しながら、それとの一体化をはかっている。根岸健一君の作品は、システムティックな集合住宅の造形を斜面に沿って展開しており、建築自体が新たな地形を造り出している。

こうした学生の優秀作品の中にもいくつかの方向性が示唆されているように思われる。すなわち地形に埋没させる方向性、地形を造り出す方向性、断片化された要素を地形に投入しながら、縫合しようとする方向性等である。こうした方向性にさらに、造形論的および環境論的視点が加われば、よりいっそう建築と環境との関係性の新たな地平が見えてくるはずである。

課題：第三の地形

自然とのダイアログ：多かれ少なかれ建築は、自然環境の中に投入される異物である。建築は樹木でもなければ自然地形でもない。自然の中に調和した建物とよくいわれるが、そういうものがあるとすれば、よほどどこかで見慣れた風景のことか、どこからもよく見えない埋没した建物であるかの、どちらかを指し示してしまうのが現状だ。

人間社会がリアルな自然から遠ざかっていけばいくほど、「自然」は社会にとっての偶像となってゆく。それはちょうど、「歴史」が本来はわれわれの生活の中に密接に関わり合っているものであるのに対して、京都や奈良の古い寺院だけをもってして「歴史」であると考えてしまうような時の歴史の偶像化ともよく似ている。

自然とはそんなに素晴らしいものであろうか。歴史とはそんなに美しいものだろうか。YESと答えた瞬間に、それは、ごく一部の限定された部分や象徴化されたもの、メディアによって創り出された幻想を指し示してしまう。プランクトンの死骸でできた赤潮、藪蚊の棲んでいる何の変哲もない藪、高速道路の法面に生きるアメリカセンダングサ、台風や地震も含めて、それらは果たして象徴化された自然の中に組み入れられているだろうか。電柱や看板の林立する京都や奈良の現実の街は、象徴化された歴史の中からパージされているにもかかわらず、そのような現実そのものの切断面の方が、より重大な歴史を語っているように思う。

そもそも「自然」とは何か。それは「人工」との対比によって二元論的に捉えられるべきものなのか、日本の典型的な水田の風景や、50年前に植林されて再生した山林などは何と呼ぶべきなのか。そうした人間と自然が関わり合ってきた環境に対する適切な言葉を、われわれはもち合わせていない。今こそ、自然と歴史の偶像を破壊して、よりノーマルなそれらとの対話(ダイアログ)を可能にするような自然観、歴史観を再構築する必要があるのではないだろうか。

人間の歴史は、「当事者」の歴史であると同時に、「代弁者」の歴史でもあると言える。物事が当事者から遠退いて象徴化され、偶像となってしまうと、やがて彼の代弁者が現れて(広義の)「政治」が発生する。今や政治の中で「自然」や「環境」といった言葉は、最もポテンシャルの高いフレーズとして多用されているのであるが、それらの多くは偶像の代弁者によって語られているものである。

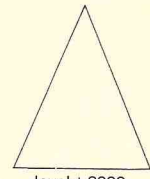
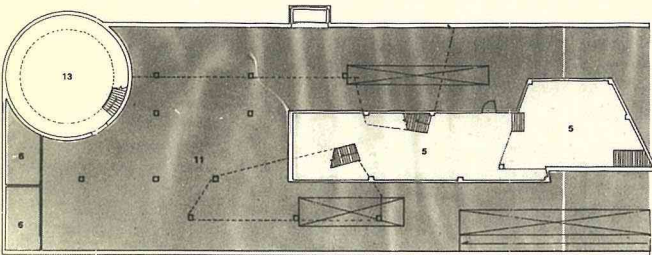
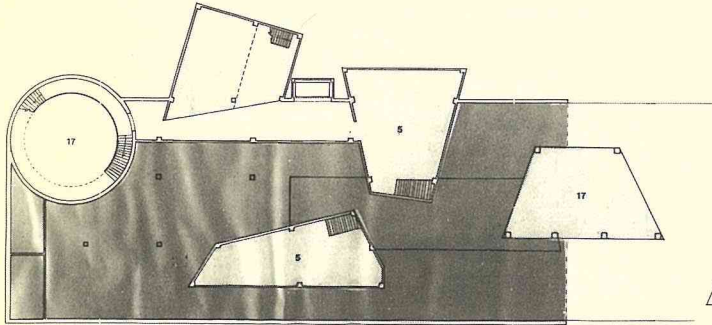
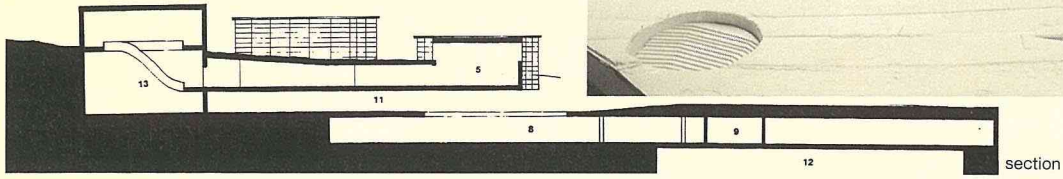
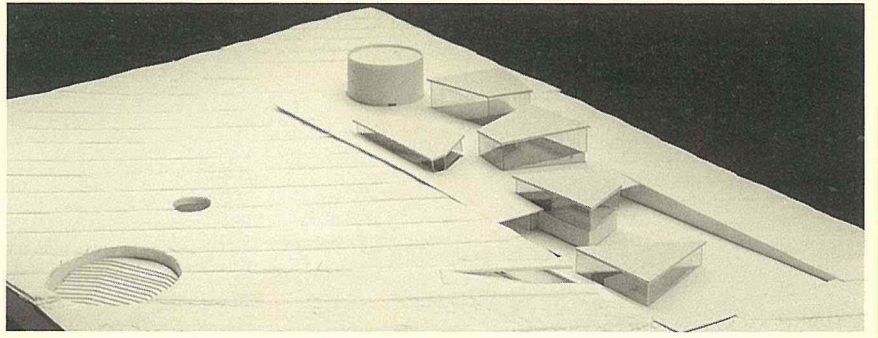
今必要なことは、新しい自然観を考えながら、代弁者としてではなく当事者として、直接的に「自然」との対話(ダイアログ)をもつことである。建築はそうした自然とのダイアログの一形態である。

山のある風景

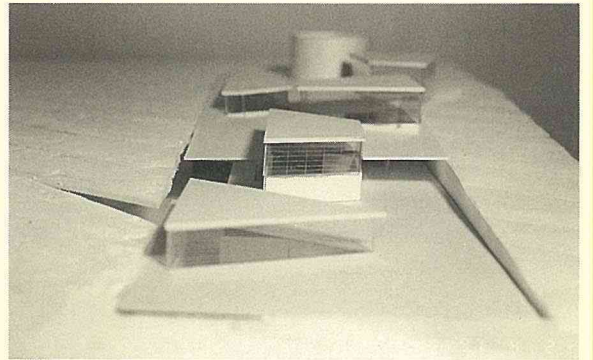
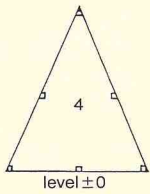
Landscape on a Hill

寺本恵美

Emi Teramoto



0 10m



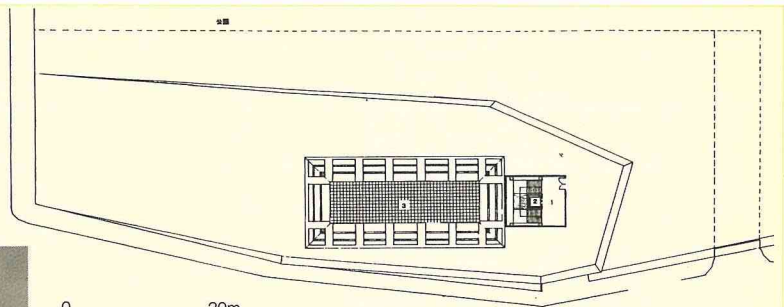
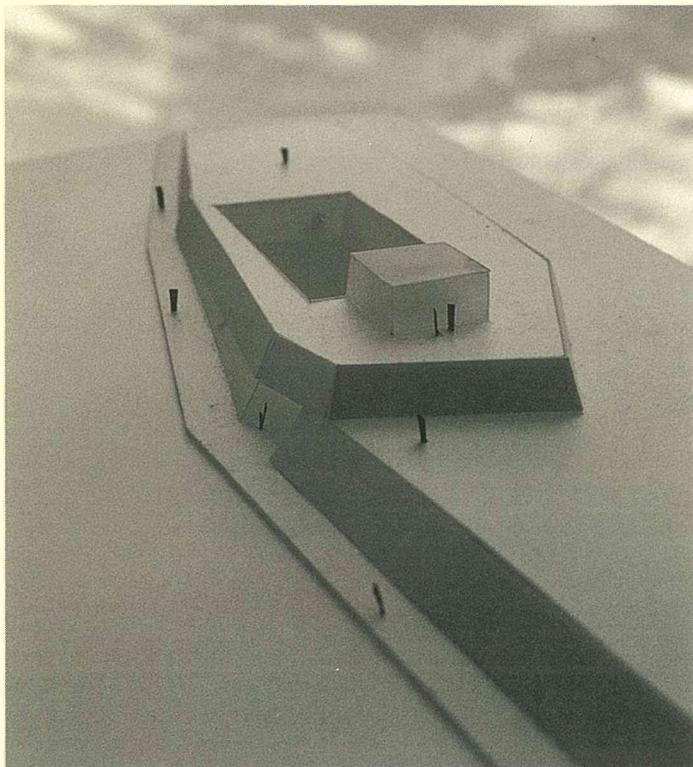
- 1 exhibition space
- 2 gallery
- 3 event hall
- 4 void

図書館+公園 計画案

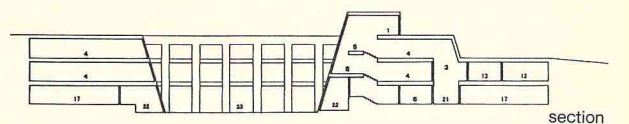
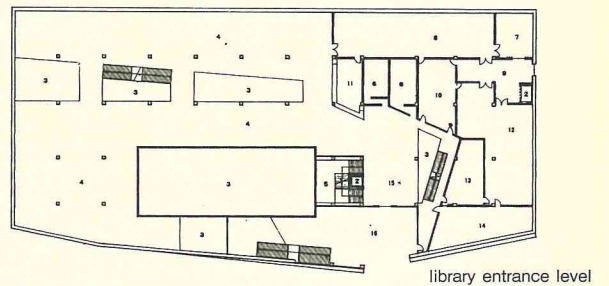
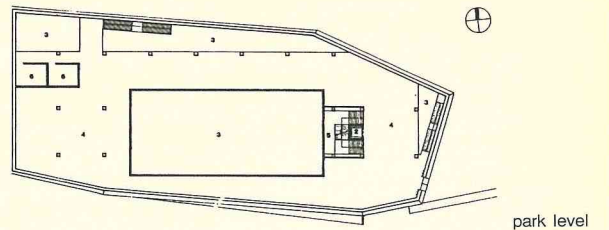
Library+Park Project

鈴木裕美

Yumi Suzuki



0 20m

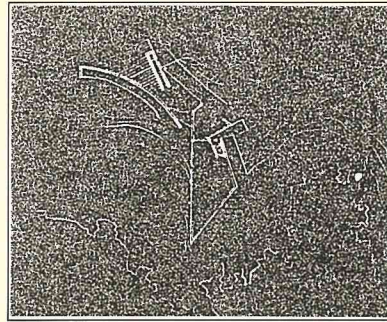
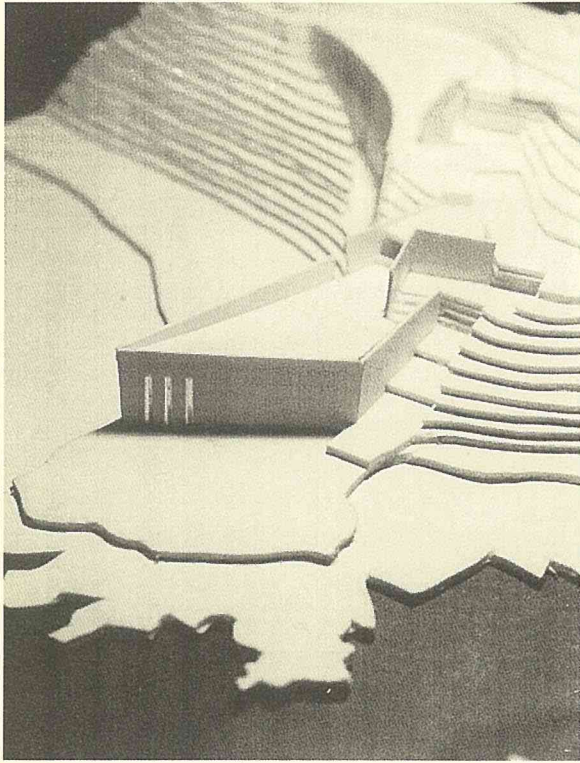


第三の地形

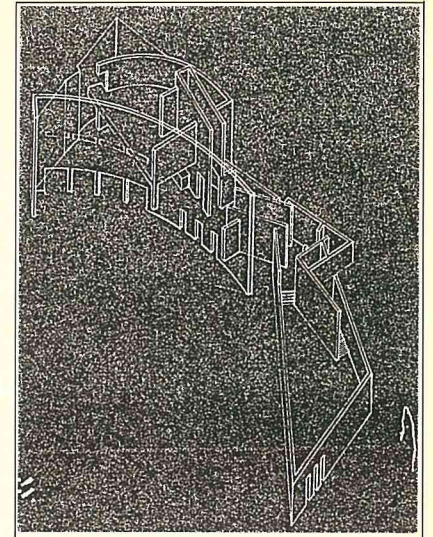
The Third Land

高橋雄二

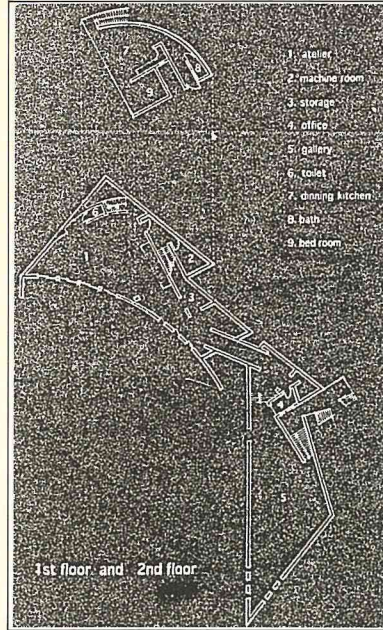
Yuji Takahashi



site plan

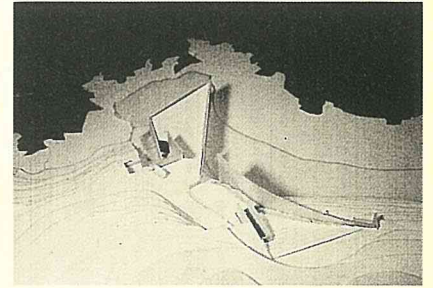


1st+2nd floor



1st floor and 2nd floor

0 10m

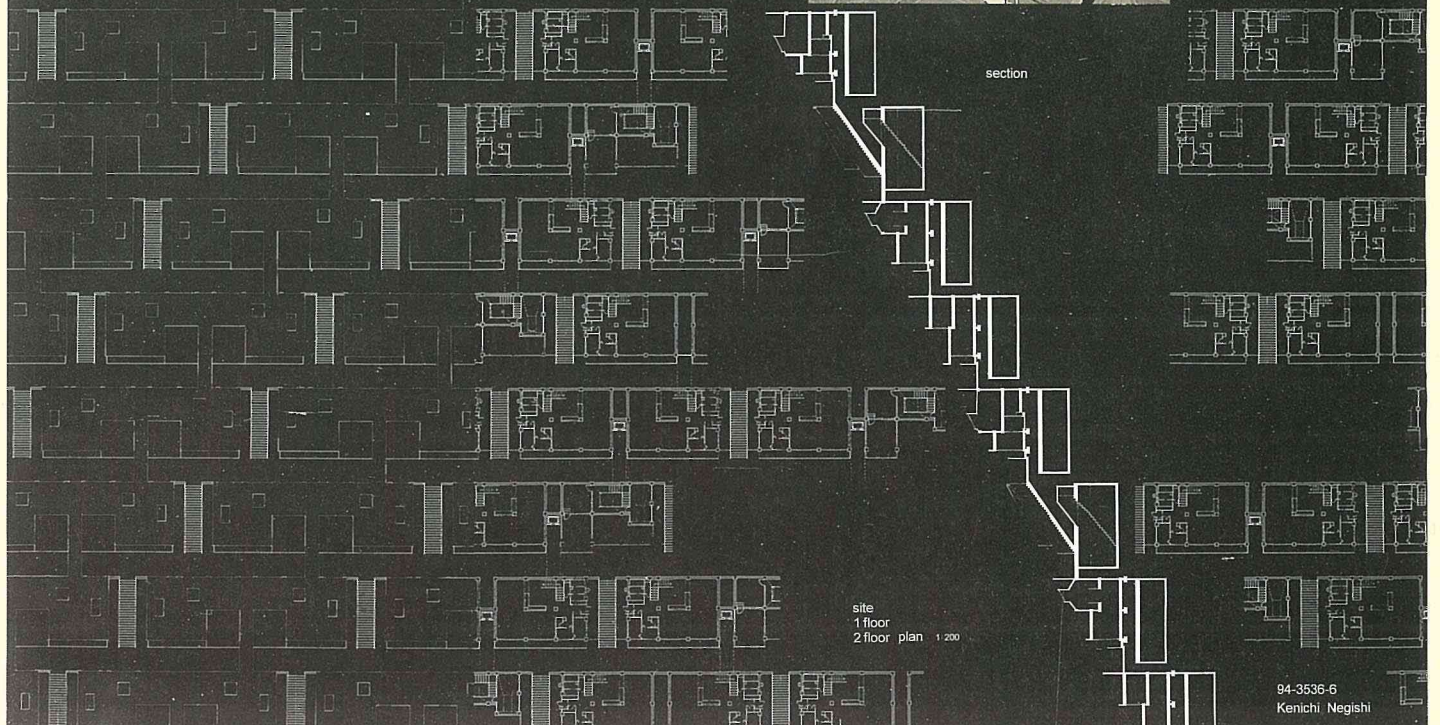
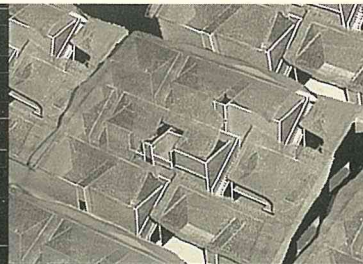


斜面に育つ建築

Architecture on an Inclined Plane: Intersected Multiple dwelling

根岸健一

Kenichi Negishi



section

site
1 floor
2 floor plan 1:200

94-3536-6
Kenichi Negishi

1996年度設計製図第四(3年生)優秀作品より

Best Junior-Studio Work: Autumn Semester

齋場 Funeral Hall

講評

非常勤講師 相田武文

「齋場」という課題は、やや特殊であり学生諸君には取り組みにくかったのではないかとと思う。どちらかといえば、非日常的な建築であり、むしろ、学生諸君には自由な発想で課題に挑戦してほしいと思ったからである。ところが、発想の段階で時間をとりすぎたためか、具体的なドローイングの段階で出来なくなった学生もおり、残念なことである。

死者を祀るということはどういうことなのか、ということに対するそれなりの解答、敷地の条件を自由にし、その場所における齋場の設定条件を自ずから定めなければならなかったことなど、学生諸君には荷が重かったのかもしれない。印象に残った作品について述べると以下ようになる。

浅野尚君の作品は、生と死、死者に対する思いなど、作品をつくるまでのプロセスがよい。そして何より詩情に富んでいることである。列柱は階段と連なり、湖に落ちてゆく。西日が輝く頃になると死者は祭壇の上で焼かれる。それを縁者は時間の経過を忘れて見送る。やがて骨になる。灰と化した骨をこれまで住み慣れた里や町に向かって撒く、というのが浅野君の物語である。空間の構成方法もしっかりしていると思われるが、表現が力不足である。自分の意図するドローイングができるように勉強してほしい。

山口路夫君の作品は今回提出された中で、もっともまとまっているものといえよう。平面計画における池や中庭の配し方もなかなかうまく、齋場としての雰囲気づくりに役立っている。ドローイングやCGも短時間の制約の中では、それなりの密度をもってまとめられており、好感もてるプレゼンテーションだといえよう。

高橋空也君の作品は、一直線に伸びたスロープと齋場の形態がまず目に入る。ほとんどの施設は地下に入れているので、機能上やや無理もあるのだが、ランドスケープデザイン

課題：齋場

これまでの火葬場の暗いイメージを取り除き、落ち着いた雰囲気の中で、人生の終焉の場にふさわしい尊厳と格調のある施設とする。周辺環境を考慮し、ランドスケープとしても、豊かなものにしたい。敷地：各自、自由にこの施設にふさわしい敷地を選定する。

用途：齋場は大分して、火葬部分、待合部分、齋場部分の3つの用途に分れる。これを延床面積2,500㎡以内におさめること。詳細な所要室等については、スライドレクチャー、参考書等を参照のこと。

土地利用計画：場内の緑化・植栽などの環境整備を重視すること。

施設計画全体：重厚にして静的、荘重にして典雅なものを計画する。「葬送」という一連の行為が行われるにふさわしい空間の演出や、施設と周辺環境との調和を求める。

火葬棟：厳粛な行為が執行できるように、空間と雰囲気留意する。火葬炉室、機械室は作業環境(労働環境)を重視する。

齋場：政治的に、もしくは宗教的に、だれから指弾されても十分に説明できる施設とする。特定の宗教的色彩は取り入れない。

待合棟：集団ごとに心静かに過ごせる内部、および外部環境に配慮する。会葬者の気持ちを和らげる雰囲気にする。

その他：広場、庭園などを整備することにより、開放的で楽しめる環境とし、地域社会との調和および地域環境美化をはかる。

提出物：

a. 説明書：一般的に公の施設では、宗教色を特定しないが、この施設では、齋場部分などに、特定の宗教をイメージしてもよい。生と死に対するコメント、人生観などの説明も欲しい。

b. 配置図：1/500 設定した周辺の状況が理解できる図面とし、それをどのようにデザインしたかを表現すること。

c. 平面図・立面図・断面図 1/200

d. 内観・外観透視図(模型写真等でもよい)

以上をA1ケント紙におさめる。

日程：

11/25 課題説明・スライドレクチャー

12/ 2 エスキス

12/ 9 エスキス

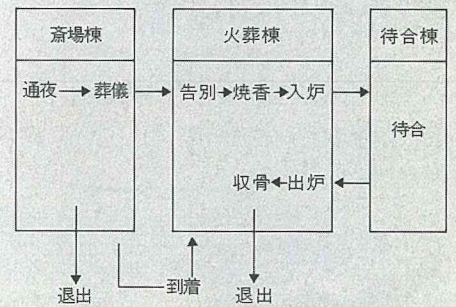
12/16 エスキス

1/13 エスキス

1/20 エスキス

1/27 講評

葬送の動線：葬斎施設を建設に当たっては、葬斎施設内での葬送の行事が支障なく、かつ合理的に行われ、会葬者の状況、火葬時間および待合の方法(風俗・習慣など)を考慮して計画する必要がある。一般的な葬斎施設の構成は、告別、火葬および収骨を行う式場部門、並びに事務などを行う管理部門に分けられる。葬斎施設内での葬送の儀式は、次のような流れとなる。



に対する配慮が感じられ、今後の発展を期待したい。

その他、小柳貴之君の作品は敷地と形態との相関がユニークである。高橋雄二君の作品は齋場らしからぬ形態とランドスケープに対する配慮がなされている。伊藤孝君と橋内英俊君の作品も印象に残った。いずれにせよこれら学生諸君の作品は、現行の建築法規では少々逸脱しているものもあるが、現状の定型化された齋場を越えるデザインとして興味深いものであった。全体的には、学生作品のレベル差が激しいと思われるのだが、これも設計製図という科目の特質かもしれない。

相田武文

Takefumi Aida



1937年 東京都生まれ

1966年 早稲田大学理工学部大学院博士課程修了

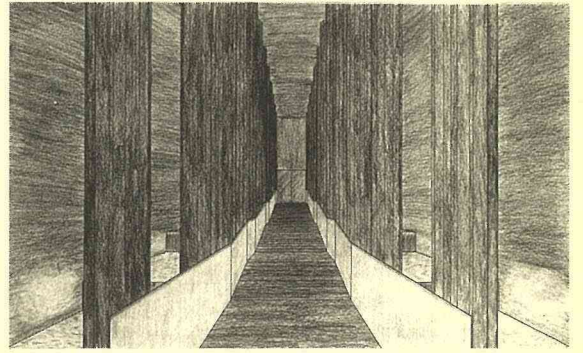
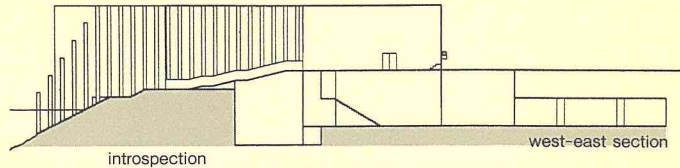
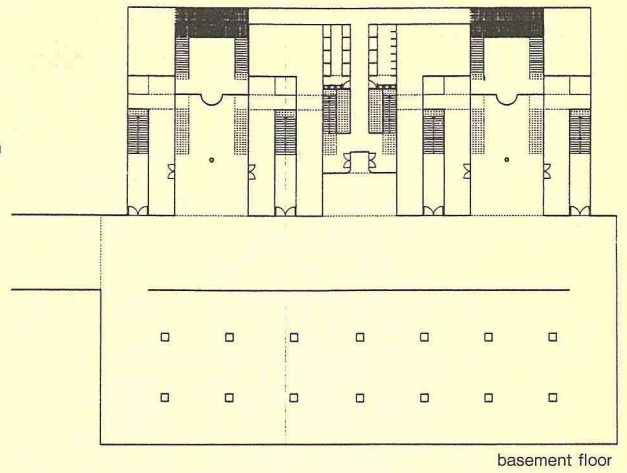
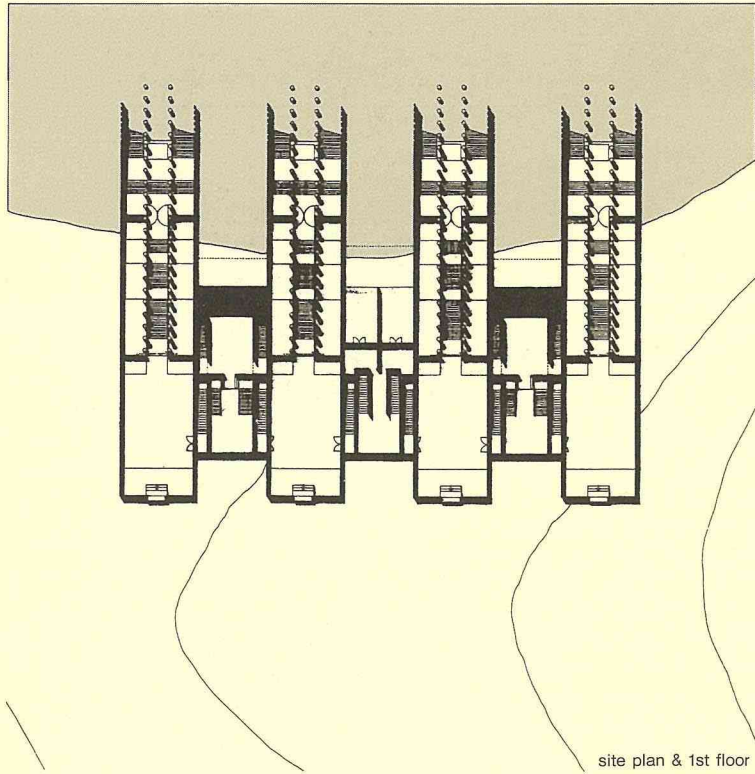
現在 芝浦工業大学教授(工学博士)、相田武文設計研究所

主な作品：積木の家Ⅰ(日本建築家協会新人賞)、東京都戦没者霊苑、芝浦工業大学齋藤記念館(さいたま景観賞)、川里村「ふるさと館」(さいたま景観賞)
著書・訳書：『建築形態論』(明現社)、『建築NOTE/相田武文』、『積木の家』(共に丸善)、P.クック『行動と計画』(共訳、美術出版社)、R.マン『都市の中の川』(鹿島出版会) M.ポーリー『バックミンスター・フラー』(共訳、鹿島出版会)

Life & Death

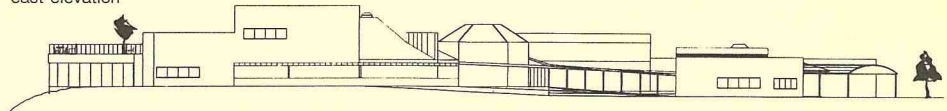
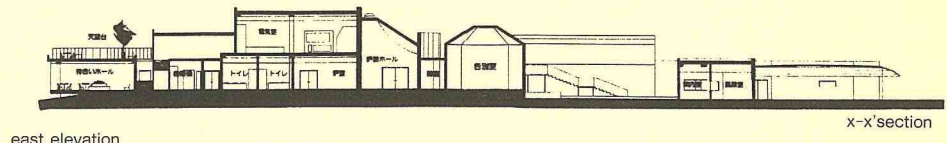
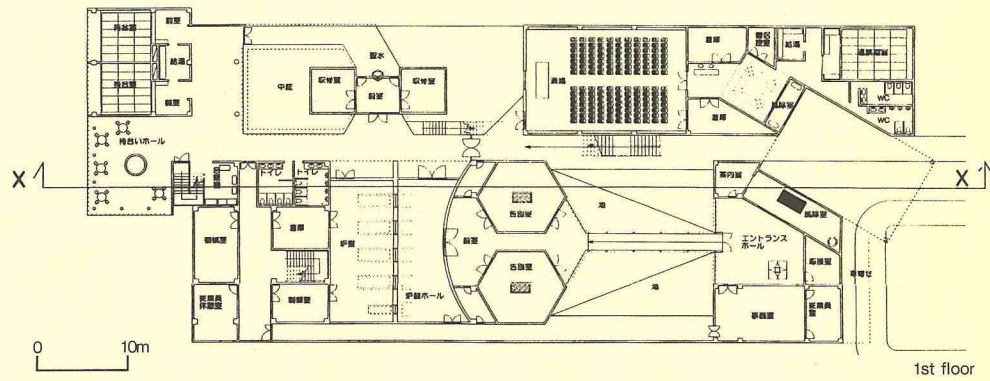
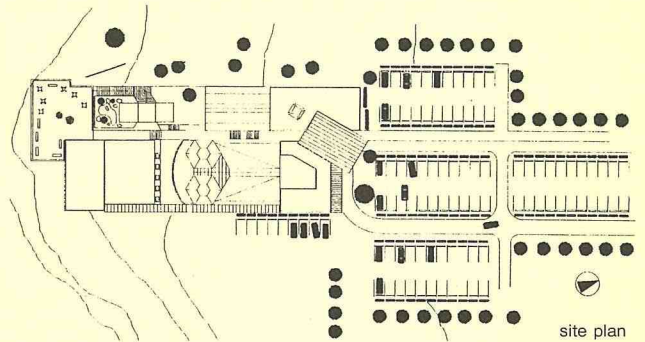
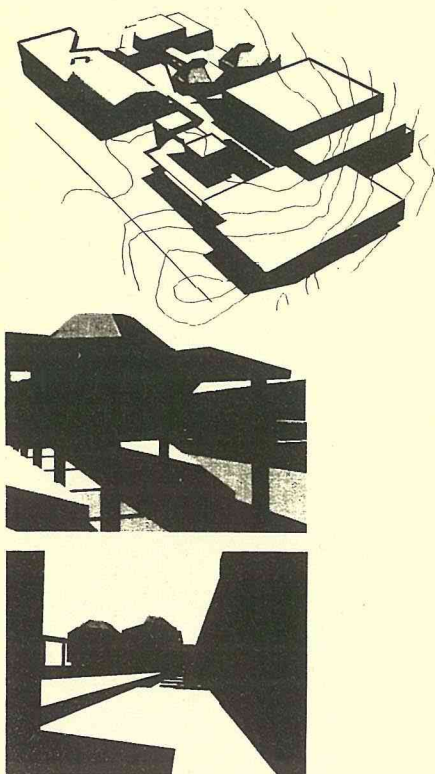
浅野 尚
Hisashi Asano

0 10m



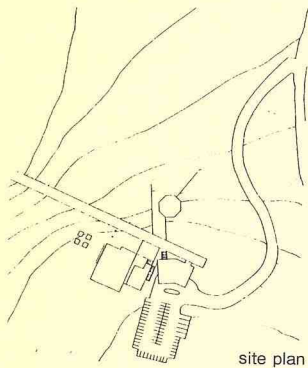
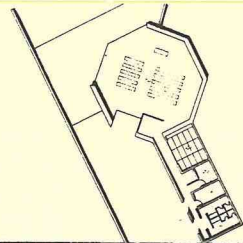
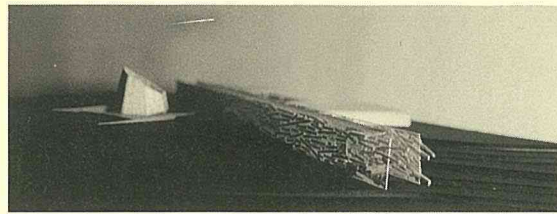
海の端の葬斎場 An Edge of the Sea Called "Death"

山口路夫
Michio Yamaguchi

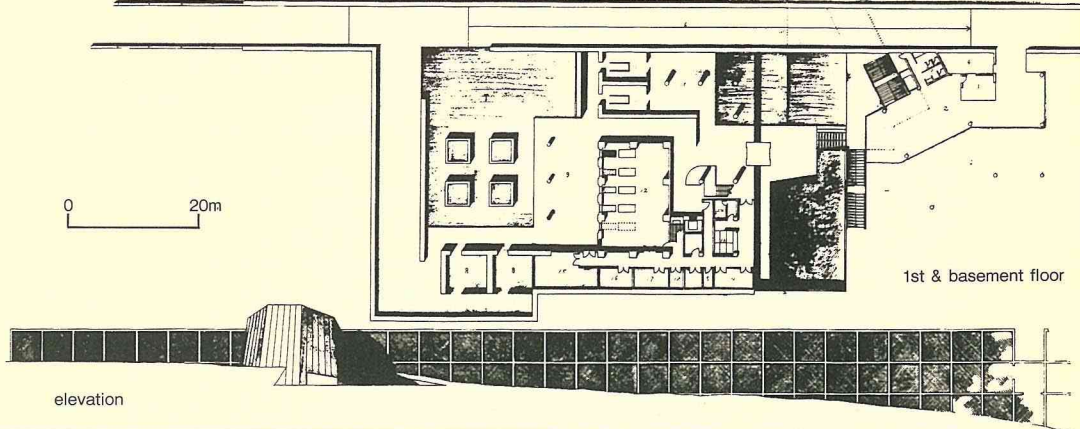


Funeral Hall

高橋空也
Kuya Takahashi



site plan

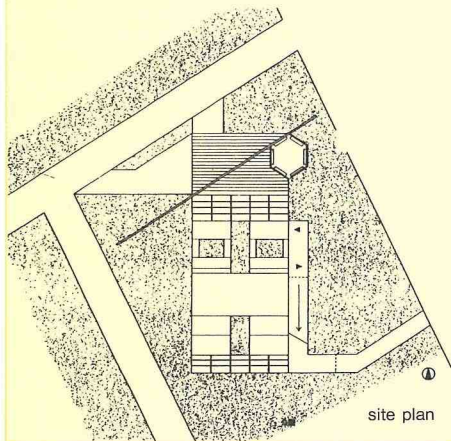


elevation

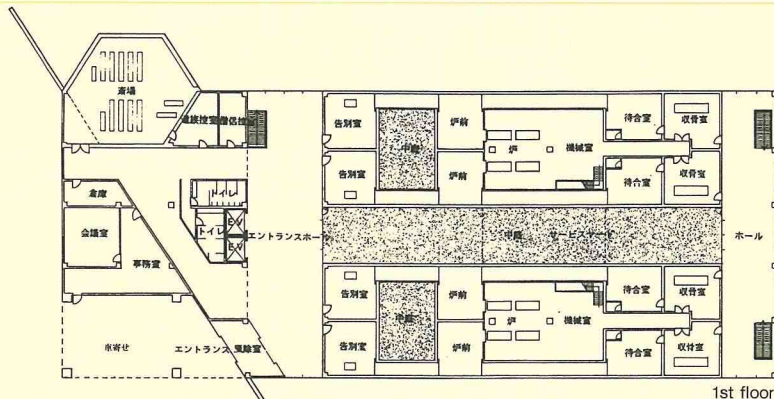
1st & basement floor

The Crematory

小柳貴之
Takayuki Koyanagi

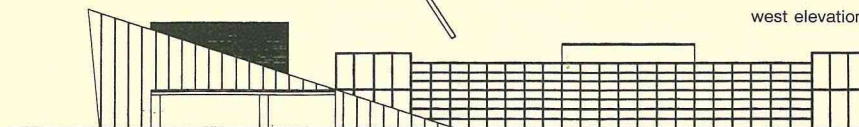


site plan



1st floor

0 10m

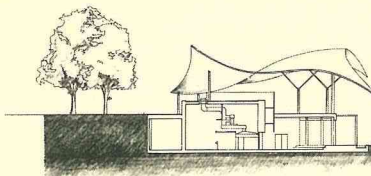


west elevation

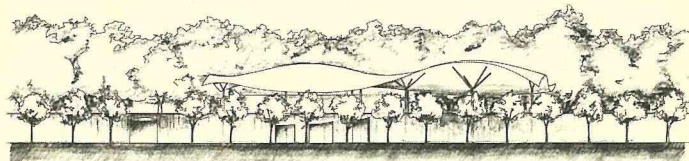
葬斎場計画案

Funeral Hall

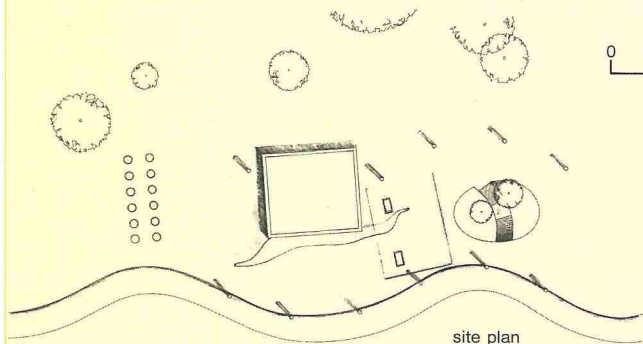
高橋雄二
Yuji Takahashi



section

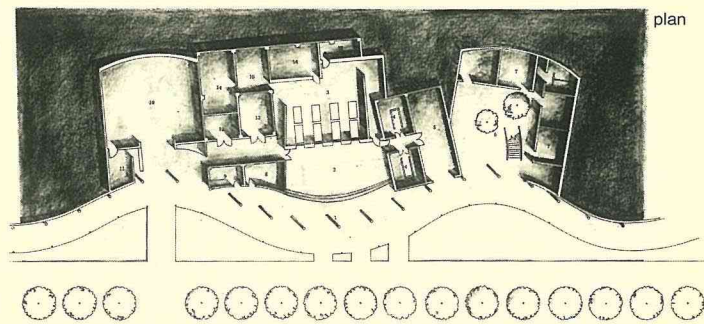


elevation



site plan

0 10m



plan

1996年度設計製図第四(3年生)優秀作品より

Best Junior-Studio Work: Autumn Semester

【住宅 1997】

House for 1997

講評

非常勤講師 葛西 潔

私は実感をもてないものの設計はできない。住宅は学生でも実感をもてる建物である。そこで課題を「住宅」とした。全体の進め方は、

1. 自分が選んだ現在の住宅の問題点の提示。
2. その問題点について参考になる住宅を探してそれを解析する。
3. 企画案を提出。
4. 最終案を提出。
5. 図面と模型の提出、という流れである。

途中で2軒の住宅見学を行った。この中で明快な論理展開の必要性を感じてもらう。毎回全員に考えを発表させ議論をした。それと同時に具体的な制作として、A1用紙1枚の中に自分の考えを表現してもらった。さすがに回を重ねると表現のコツをつかんでうまくなったが、その表現力が最終提出物に反映されない人がいた。自分の考えを人に伝えることが自己表現の第一歩であることを理解してほしい。考えを分かりやすく図面と模型で表現することを目標にしたが、最後の提出物に満足のできるものは少なかった。

課題に取り組む中で、住宅の重要な諸問題は解決していない、ということに多くの学生が気づいたであろう。そして自分の考えで設

葛西 潔
Kiyoshi Kasai



1954年 東京都生まれ
1980年 東京工業大学大学院修了, 山下和正建築研究所入所

1982年 葛西潔建築設計事務所設立
現在 多摩美術大学非常勤講師, 早稲田大学非常勤講師

主な作品: 角地の木箱, 小さい木箱, 木箱3, 大きい木箱, 傾斜地の木箱, 段地の木箱, 木箱210
受賞: 平成4・5年度東京建築士会「住宅建築賞」, 平成8年度東京建築士会「住宅建築賞審査員特別賞」, 平成9年度関東甲信越建築士会ブロック会賞

課題: 住宅1997

1997年のための住宅を設計する。1997年をどのようにとらえるかは自由である。全世界的な視点からはじまり、極私的な見方までさまざまな解釈が可能であろう。しかしどのような方向から考えても住宅をとりまく状況は問題を抱えているはずである。あなたが考える1997年の状況において、どのような住宅が成り立つであろうか。住むことの原点に立ち戻って、住宅を自由に発想してほしい。

作業:

1. あなたが考える1997年を視覚的に表現する。
2. その状況において存在理由の明確な住宅を創造

する。

3. その住宅を具体的に設計し、図面化する。
設計条件: 諸条件は自由に設定してよい。

所要図面:

1. 設計説明書(800字程度) 1997年について説明と住宅の考え方を表現する。
2. 平面図(家具配置を示す)
3. 立面図(2面以上)
4. 断面図(2面以上)
5. 断面矩計図
6. 構造模型
7. 完成模型

計することの難しさを認識したはずだ。

途中の発表と議論に参加したが、最終提出をあきらめた学生がいた。住宅の根本的な問題を取り上げて案にまとめるのに苦労していた学生であった。住宅の基本的な問題であるほど、有効な案を提示することは難しい。設計は自分の案を客観的に見ながら進めなくてはならないが、その学生は自分の案の価値に評価を放棄してしまった。自分の計画を断念するのは、設計者にとって重要な判断である。提出しなかった学生のこの姿勢も認めよう。その興味あるテーマをいつか実際の案としてまとめてほしい。

山崎航平案は、身体に注目した。しかしこのテーマにありがちな哲学的な暗さや難解さはなく、スポーツ感覚の案といえようか。住宅内で人をとにかく動かしてリアリティを得ようとする単純明快な計画だ。この案の魅力はやりたいことを明確に表現した若々しい単純思考である。しかし内容を見ていくと、実際に人間が通れるのか、登れるのか疑わしい箇所があり、動かすことに力点を置きすぎて、住まうことを忘れてしまったようだ。コンピュータによる多くの内観パースでインテリアの移り変わりを表現しようとしたことはよい。

数人の学生が「家族」を扱ったが、家族論に終始して発展がなく、成果はあがらなかったようだ。その中で、清水加陽子案は、家族の関係を屋内と屋外とその中間の領域との関係に置き換えて住宅をまとめた。3つの部分がうまく絡み合い、面白そうな空間を形作った。早めに模型でのスタディをすればさらに

発見があったであろう。

鈴木裕美案は密集地での住宅の利点をいかすことにまじめに取り組んだ。人の視線と明かりを手がかりにして、楕円とガラスボックスによる構成を導き出した。形態的には魅力を感じるが、テーマが成功しているかはこの提出物だけでは判断できない。

寺本恵美案は、道路と住宅との境界を問題にし、都市・社会と住宅との間の障害物を取り除こうとした。渦巻きのような形でまとめられた住宅の全体構成は外部との関係において可能性を感じさせるが、内部の構成を見ると時間が足りなかったようだ。

森田章夫案は、表現を頑張った。人に伝えること、努力することの大切さを感じたはずだ。しかし表現を頑張って得た最大の収穫は、内容の重要性に自分で気付いたことだ。今後に期待したい。

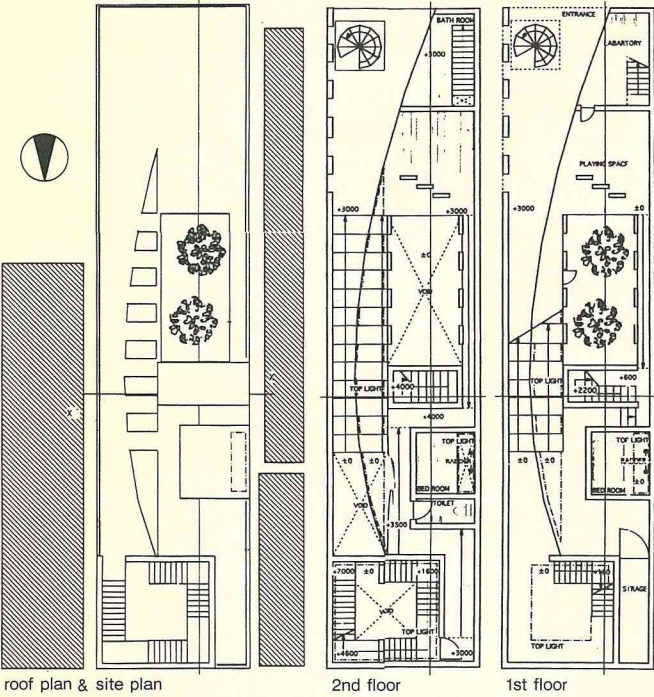
設計者にとって「住宅」は永遠の課題である。君たちもまた、この課題に取り組む真摯な姿勢をもち続けてほしい。

動くための住宅

House for Physical Exercise

山崎航平
Kohei Yamazaki

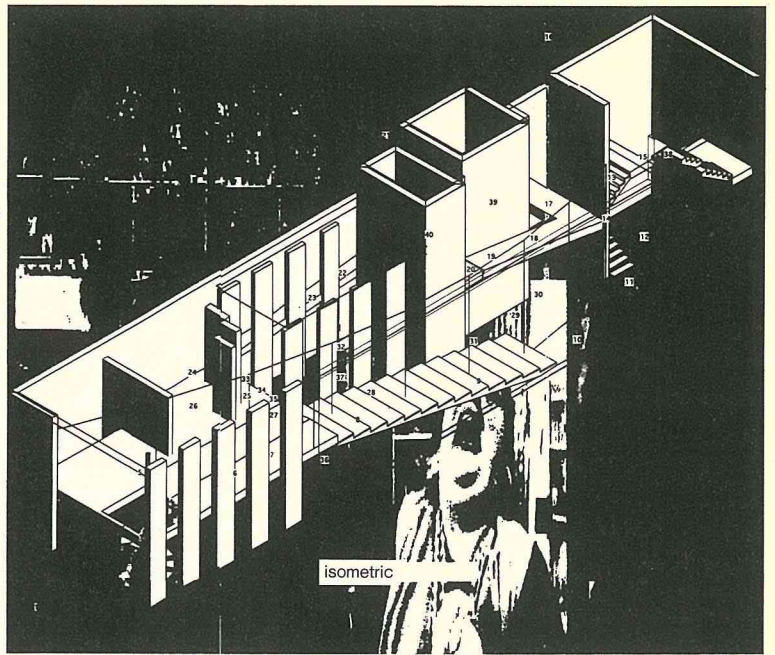
0 10m



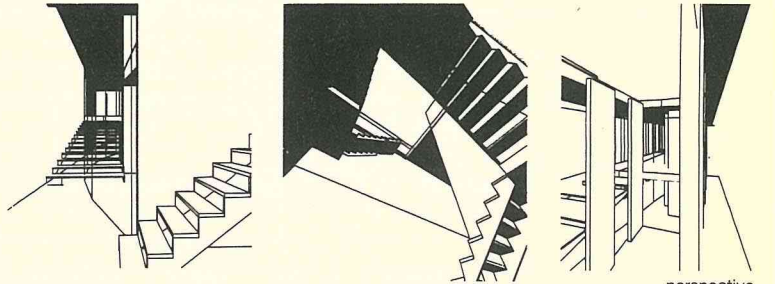
roof plan & site plan

2nd floor

1st floor



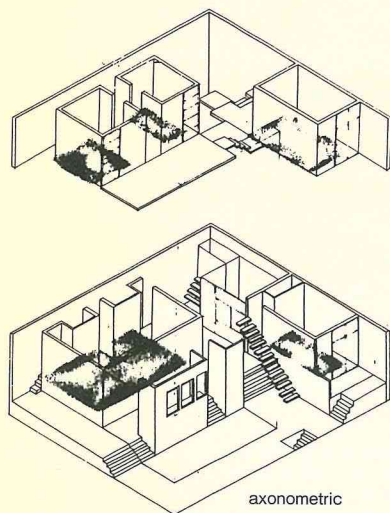
isometric



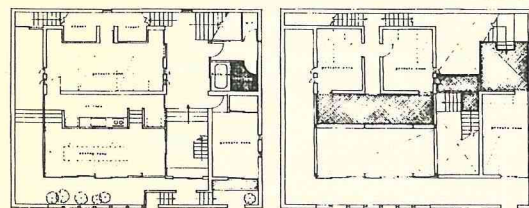
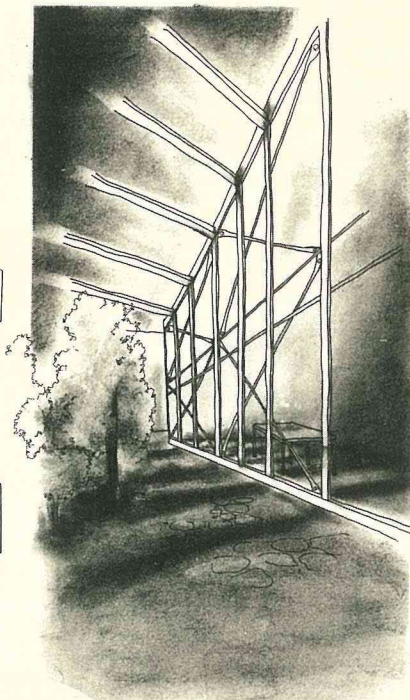
perspective

House with Vagueness

清水加陽子
Kayoko Shimizu



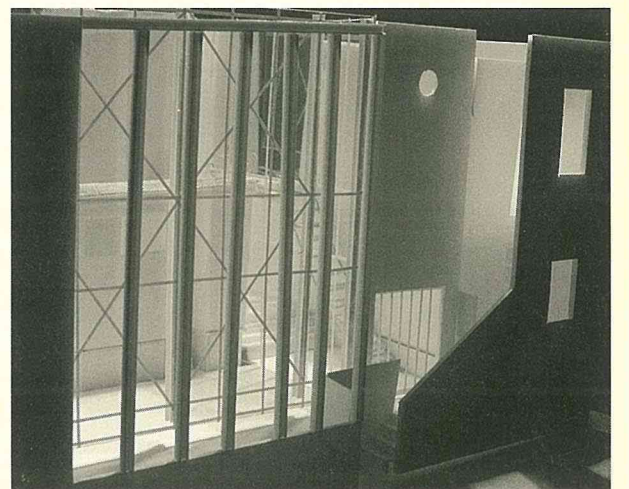
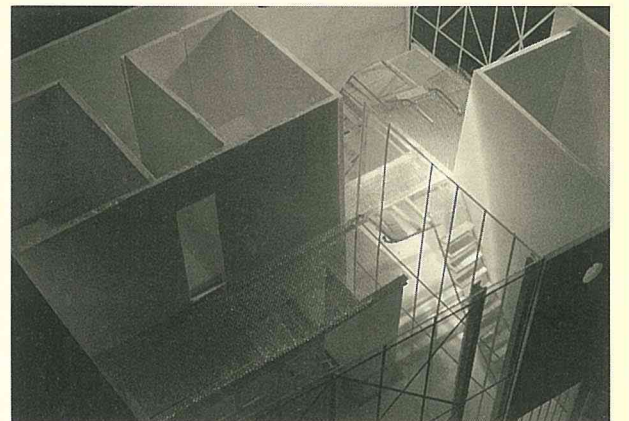
axonometric



1st floor

2nd floor

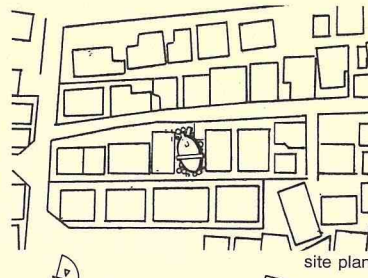
0 10m



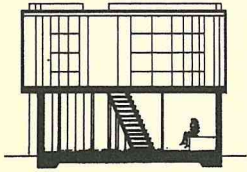
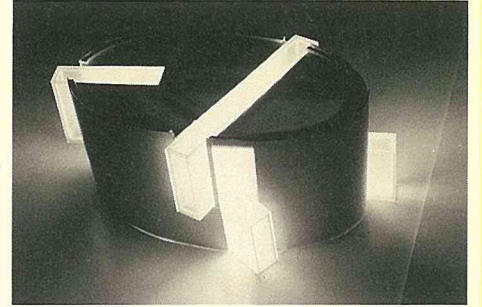
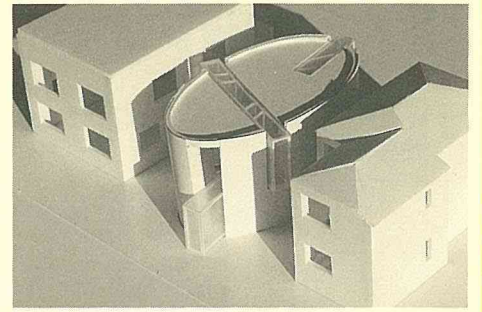
都市に住む人のための住宅

House for City Dwellers

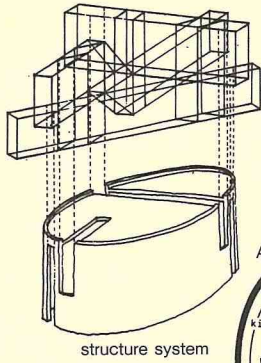
鈴木裕美 Yumi Suzuki



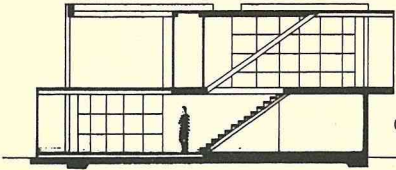
site plan



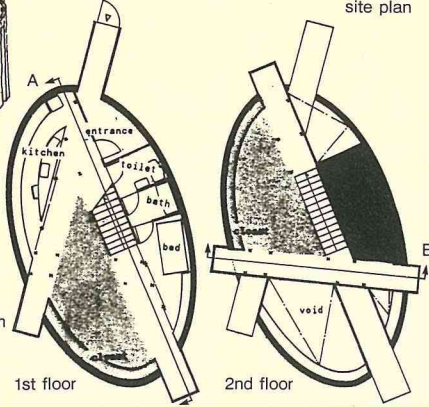
A section



structure system



B section



1st floor

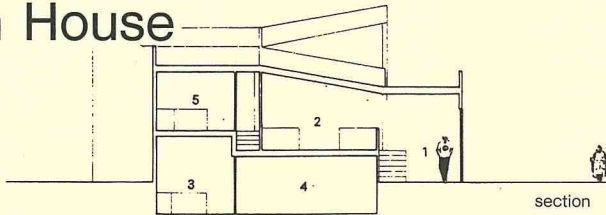
2nd floor

0 5m

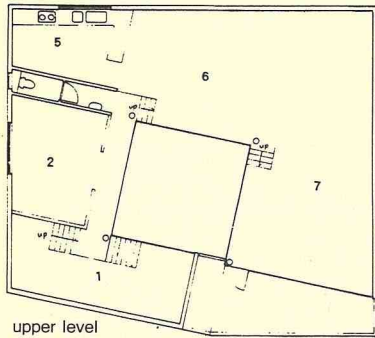
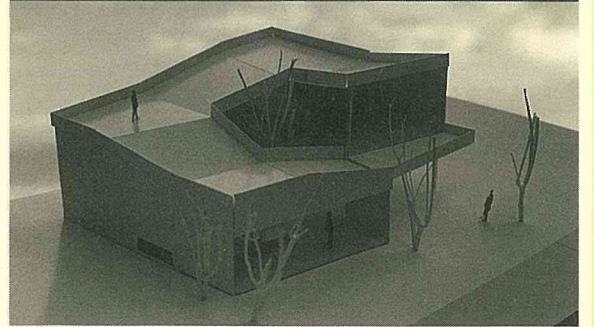
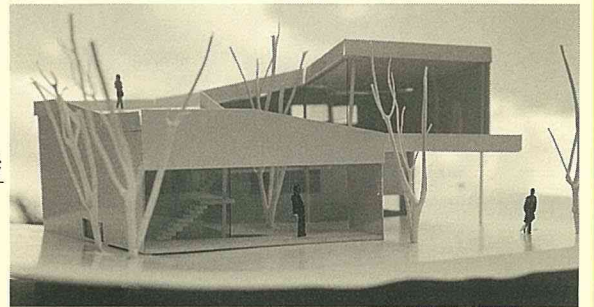
Sky/Town House

寺本恵美

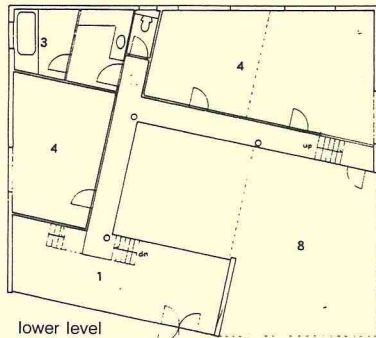
Emi Teramoto



section



upper level



lower level

- 1 entrance hall
- 2 play room
- 3 bath room
- 4 private room
- 5 kitchen
- 6 dining room
- 7 living room
- 8 parking

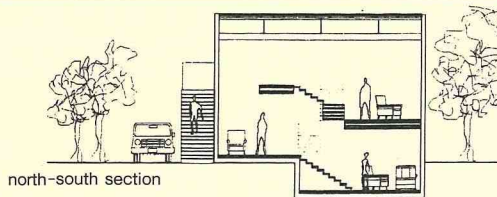
0 5m

Living 解体

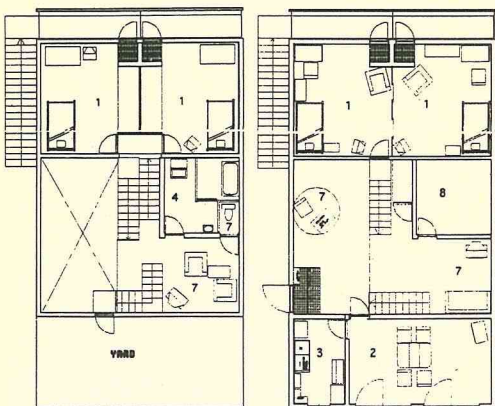
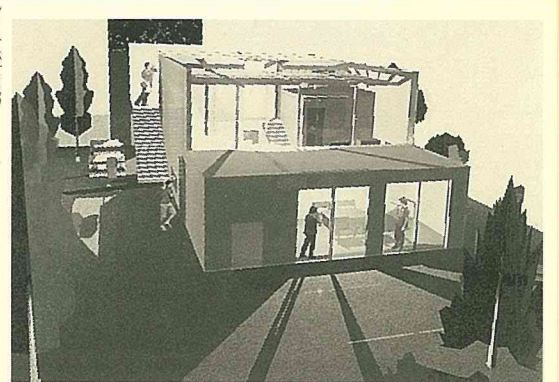
Dissolving Family-Space

森田章夫

Akio Morita

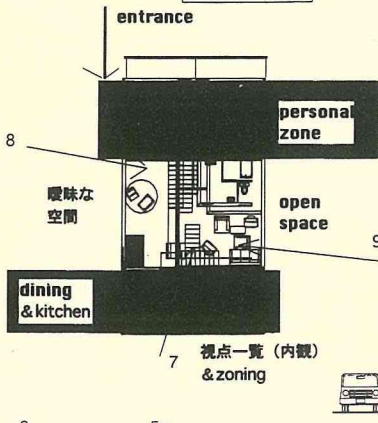


north-south section



-1500 & 0 level

+1500 & 3000 level



entrance

personal zone

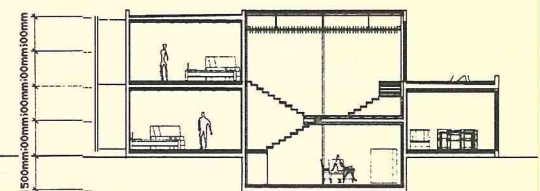
曖昧な空間

open space

dining & kitchen

視点一覽 (内観) & zoning

east-west section



1500mm 100mm 100mm 100mm

1996年度設計製図第四(3年生)優秀作品より

Best Junior-Studio Work: Autumn Semester

建築美術館 Architecture Museum

講評

教授 坂本一成

建築学科に戻って最初に担当したこの設計製図第四の第2課題は、私にとって久方振りに関わった課題ということもあり、また受講者の多くがこの課題に対して私の期待に応えてくれたこともあって、楽しく充実したものとなった。

この建築美術館を含む都市の複合建築という課題は、学生にとっては設計製図の最後の課題となることもあり、いくぶん規模が大きく、使用用途も、建築美術館を中心として学生の自由な企画を含みやすいものとしたが、図面表現を含めてほしいこのことを理解してよい結果を出してくれたと思う。

この課題では、大枠次の3つのことを問題にするよう求めた。ひとつは、絵画や彫塑などのいわゆる美術品のような対象物の展示とは異なる「建築の展示」をどう捉え、「建築美術館」としてどう建築化するかということ。2つは、建築美術館の必要床面積の約1.5倍の建築可能容積の消化を都市の複合建築として、どのような用途に求めるか、そしていかにこの用途を建築空間化するかということ。そして3つは、この高容積率を可能とした巨大都市の中心的市街地に対して、つまりこの建築が置かれている地域や環境といった社会的条件に対して、この建築がいかに対応するかということ。なおこれらの問題はまず企画書として数人ごとのグループ別に報告書を作成してもらい、それを前提に各人の設計を求めた。

最初の問題に対しては、たとえばこの敷地を取り巻く東京の建築の情報センター的役割をもった施設とする、また歴史的に得られた建築関係のドキュメントの収集研究展示センターとして位置づける資料館とし、それを空間化するなど、積極的な案が多々見られた。第2の問題に対しては、多くは地味な施設になりやすいこの建築を、いかに人びとの身近な施設とするかということで商業施設を加えるといった案が多く、用途自身に目新しいも

課題：建築美術館

建築学会および建築家協会等の建築設計に関する諸団体による「建築美術館」の設立協会は、別紙に示す敷地に建築美術館を企画している。設立協会はこの「建築美術館」のプログラム（基本構想）とそれを前提として基本設計を求めている。なお、現在この協会が計画している美術館としての主な事業は、近代・現代建築家を中心とした建築作品に関する資料（図面、写真、模型、スケッチ等）の展示、およびその企画、またそれらの収集、保管、研究等で、現代建築を中心とした情報センター的役割をもたせたいと考えている。以上の仮定を前提として建築美術館の基本構想（企画設計）と基本設計をすること。

設定条件：

- ・敷地／東京都渋谷区渋谷1丁目23
- ・地域指定／商業地域・防火地区・建蔽率100%・容積率800%
- ・建築規模／建築美術館の延床面積は4,000~5,000㎡を想定しているが、法的な許容延床面積まで、この美術館の他の機能、あるいは美術館以外の機能を含めて計画することができる。なおこの許容延床面積から美術館床面積を減じた床面積については検討の上報告のこと。
- ・構造設備等／自由な設定提案のこと
- ・建築美術館内部の面積について／展示室（常設、企画とも）約2,000㎡、ホール（500人程度のもの）約700㎡、収蔵庫約600㎡、会議室、図書室、講義室、研究室、エントランスホール、ロビー、レストラン、コーヒーストック、書店、管理事務所、機械室、駐車場（地下）等、その他プログラムに合わせた必要な諸室。建築美術館の使用目的以外の床面積については、使用用途（例えばオフィス、ショップ等）を想定し、また賃貸経営等の方式を含めて企画、計画を求める。

提出図書：

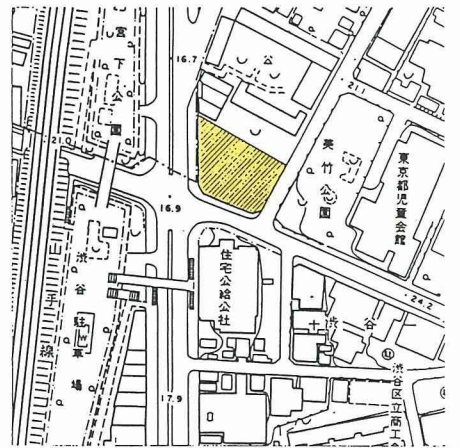
- グループ報告 A2用紙1枚程度にビジュアルな報告書（基本構想）を作成のこと。
- 基本設計図（配置、平面、立面、断面等）、ある

いはそれに代わる図面1/200、A2青図、スケッチ、模型もあればより可。

C. 最終提出物 1. 平面図（配置図を含む）、立面図、断面図それぞれ1/200 2. 単面投象図、模型写真 3. その他 設計説明文、必要図。以上をA1の用紙にまとめること。

授業計画：

- | | |
|--------|-------------------|
| 11月25日 | 課題説明、グループ構成 |
| 29日 | 敷地見学、グループディスカッション |
| 12月2日 | グループ報告作成（A） |
| 6日 | グループ発表 |
| 9日 | 即日設計（B） |
| 13日 | 即日設計発表、講評 |
| 16日 | 一次案提示 |
| 1月10日 | 二次案提示 |
| 13日 | 提案案提示 |
| 20日 | 提出（C） |
| 24日 | 発表 |
| 27日 | 最終講評 |



のはなかったが、建築美術館とそれら商業施設とを空間的に重ねる構成法に面白い提案が見られ、評価できた。第3の問題は、周りの地形との関係をとるものに丁寧な扱いをするものはあったが、それ以上に展開したものは残念ながらほとんどなかった。

ちなみに大学院の建築意匠演習の授業でも同時にほぼ同じ課題を行ったところ、学部作品がラショナルな傾向が強いものに対して、大学院生の作品はより地域性、都市性との関係をともなった社会性を含み込んだものが多く見られた。こうした中で、以下4君の作品が特に評価できた。

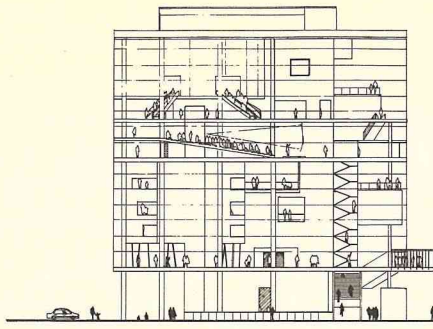
長岡大樹君の作品は、建築全体を閉じた領域と開放された領域との包含関係による空間によって統合した構成となっており、コンセプトでありながら丁寧で現実的な設計となっている。香川貴範君の作品は建築美術館の資料図書館の性格に焦点を当て、その空間化をラショナルに構成している。伊藤立平君の作品は全体構成を現代的な感覚と手法の中で巧妙にまとめたものとなっている。遠藤康一君の作品は用途機能ごとに特化され分節された空間の配列の表現によって、この建築を明確な構成のものとしている。

建築美術館

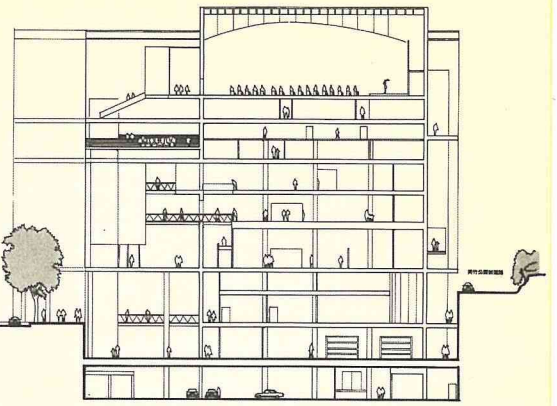
Architecture Museum

長岡大樹
Taijuu Nagaoka

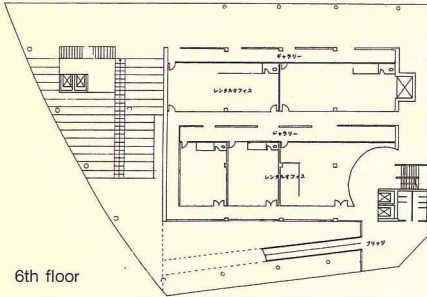
0 20m



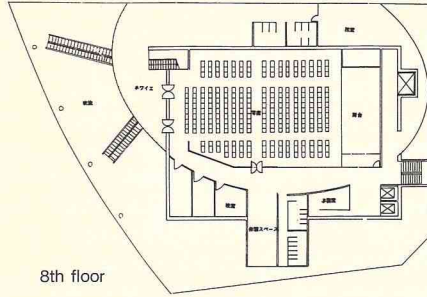
west elevation



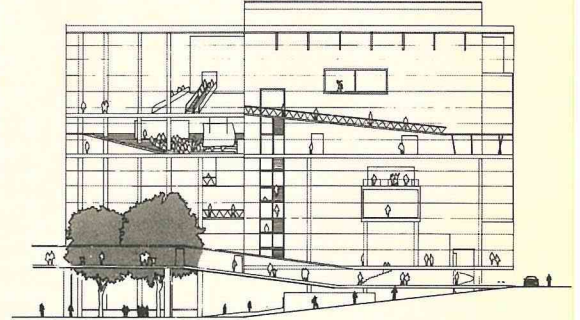
A-A' section



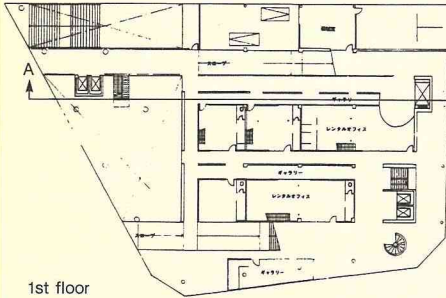
6th floor



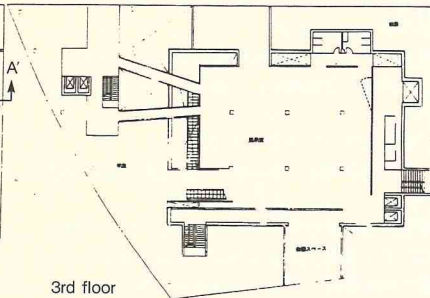
8th floor



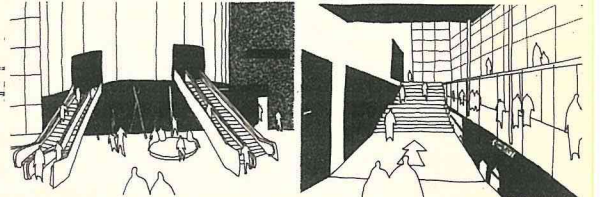
south elevation



1st floor



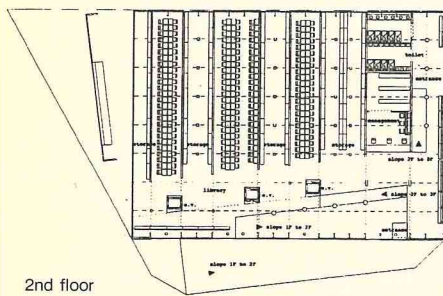
3rd floor



建築のための建築

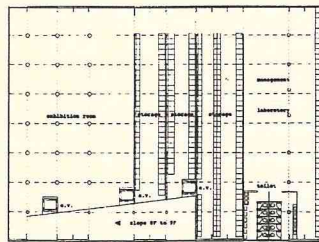
Architecture for Architecture

香川貴範
Takanori Kagawa

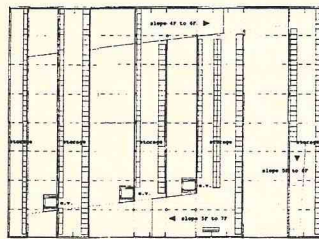


2nd floor

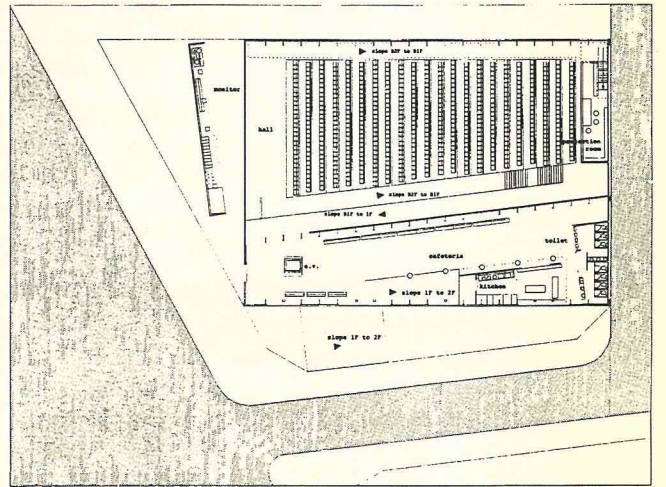
0 10m



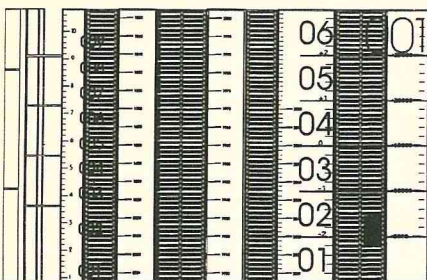
9th floor



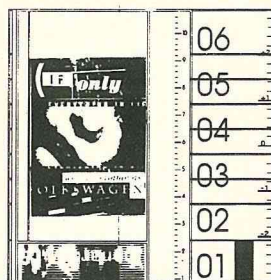
5th floor



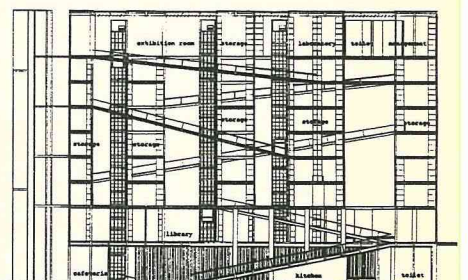
site plan & 1st floor



elevation 001



elevation 002



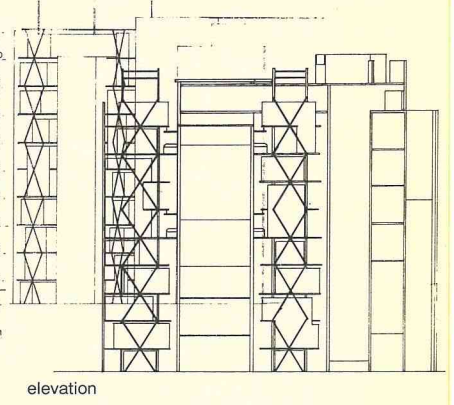
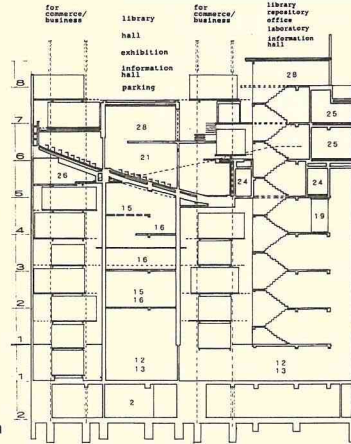
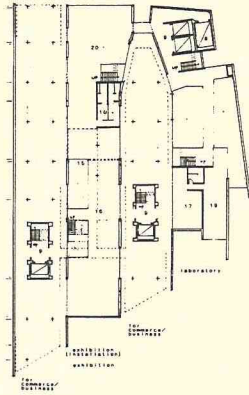
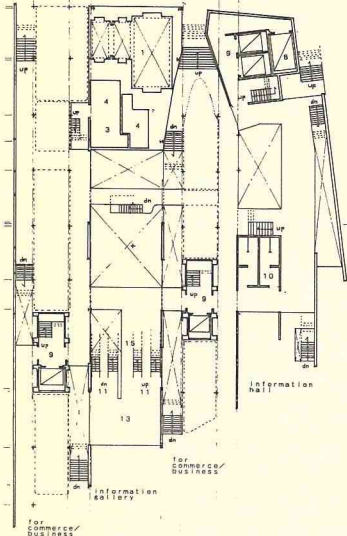
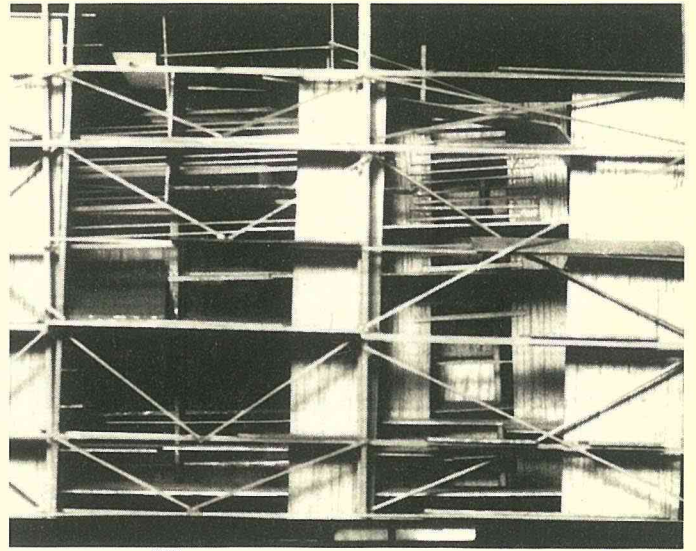
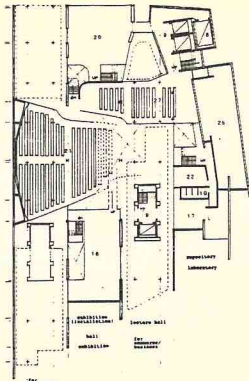
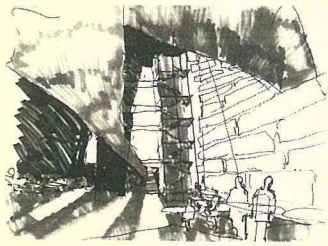
section

0 10m

建築美術館

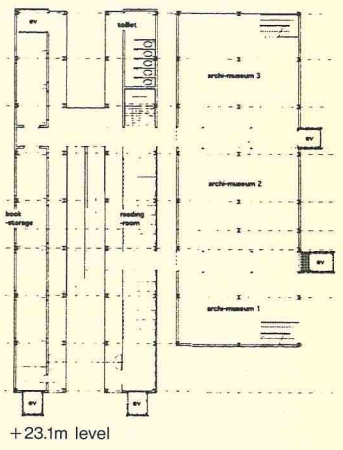
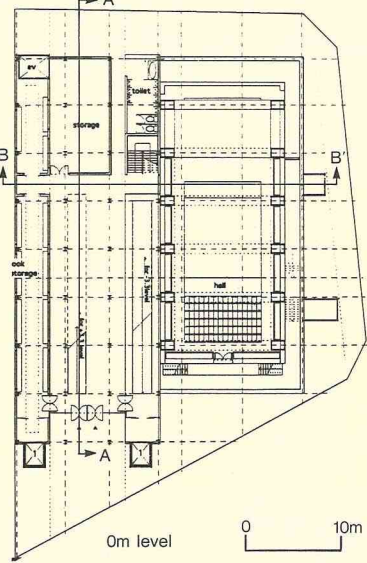
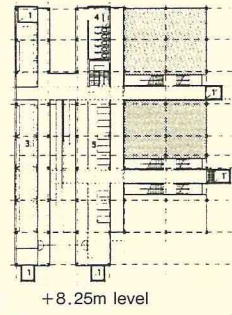
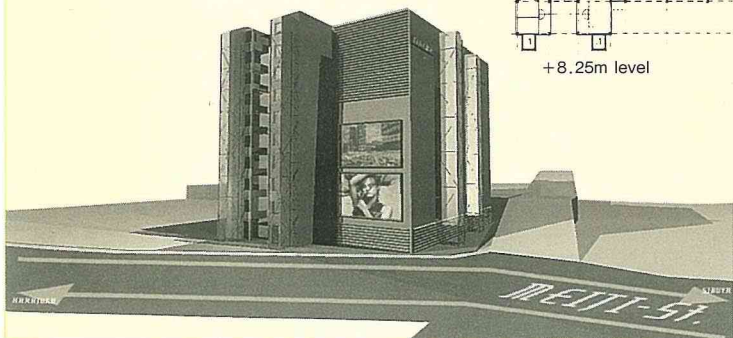
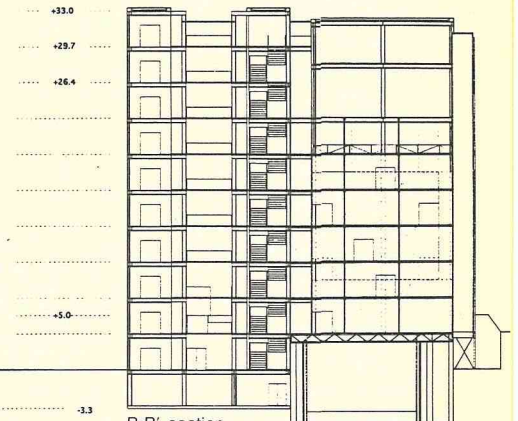
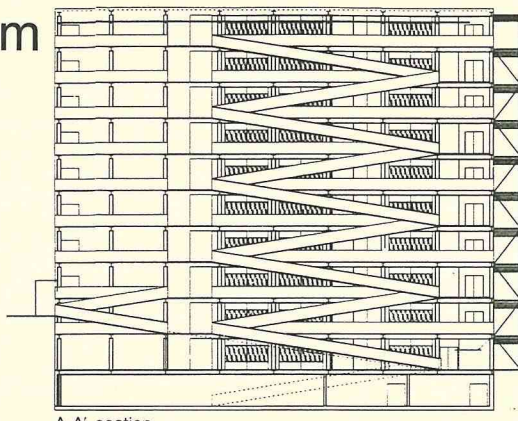
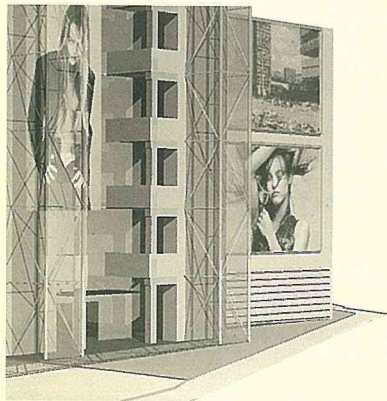
Architecture Museum

伊藤立平
Tappei Ito



Pre·Archi-museum

遠藤康一
Koichi Endo



1996年度卒業設計製図優秀作品・大岡山建築賞

Best Diploma Design Thesis



大岡山建築賞・受賞者（平成9年度TIT建築設計教育研究会総会にて）

講評

教授 仙田 満

卒業設計も年々、CADで提出する数が増えている。この傾向は現代的な流れを反映しており、決して好ましくないことではないが、図面表現の新奇さに流され、建築空間のリアリティーにひどく欠くものも見かける。ドローイングも含め、さまざまな表現に挑戦してもらいたい。しかしながら、どんな表現でもその空間が、人間の行動や意識を感じとれるものであってほしいというのは、大学を卒業する人に対してあまりに過度な欲求だろうか。

米津正臣君の作品は、駅というのはさまざまな人びとが流れ、交流する場であるからテーマにしやすい課題であるが、飯田町貨物駅

跡地に文化、商業の複合空間を挿入するというもので、コンセプトとしての新しさは希薄である。模型を含めたプレゼンテーション力によって金賞を獲得したといつてよからう。

田口陽子君・服部ひかる君の作品も鉄道と関係しているという点で共通している。田口君の作品はさまざまな機能をもった空間がスポンジ状に、すなわちポラスな状態で浮遊し、それを立体的な動線がとりつくということが面白く、また服部君の作品は東南アジアの人びとのためのフリーマーケットを提案し、ベルトコンベアによってお祭りの空間を演出してしまおうというところが極めて面白い。この2つの作品はコンセプトの面白さ、アイデアの面白さという点では秀逸である。デザイン的に楽しさがでている点もよい。

笠井誉仁君のTokyo Woody Landは、とてもアーティストックな作品に仕上がっている。コンセプトも悪くないが、それよりも表現がとてもよい。

小川一人君のScarap/Reclamation/Reconstructionという作品は、そのテーマが現代的だ。リサイクルを建設工程の中に抱え込もうとする若い発想は好感がもてる。建設会社の本社ビルなどに応用されたら楽しい。

大成優子君のドライビング・スクール・ビルディングは、車が走る町を立体的にしまおうというもので、これも車好きな若者らしい発想の建物だ。できれば車らしい軌跡をもつ平面計画になったらと惜まれる。これら6人の作品はそれぞれ甲乙つけ難く、それぞれ特長をもっていて将来が期待される。

飯田町貨物駅跡地再生計画 都市の空白における複合空間

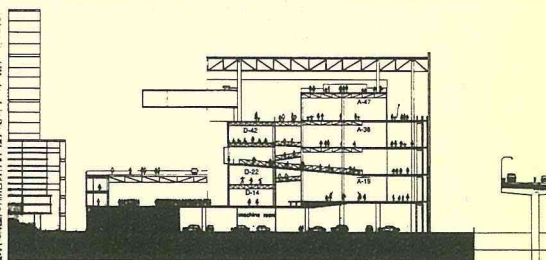
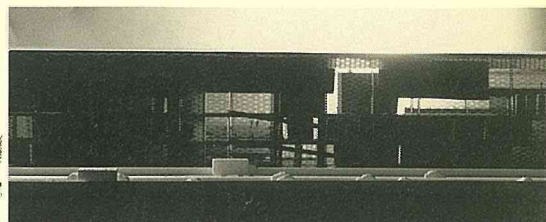
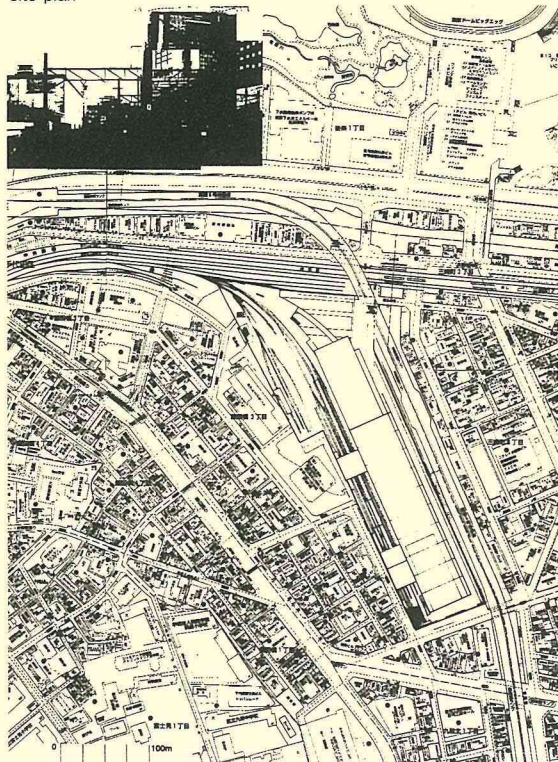
Redevelopment of Iidamachi Freight Station : Filling the blank

米津正臣

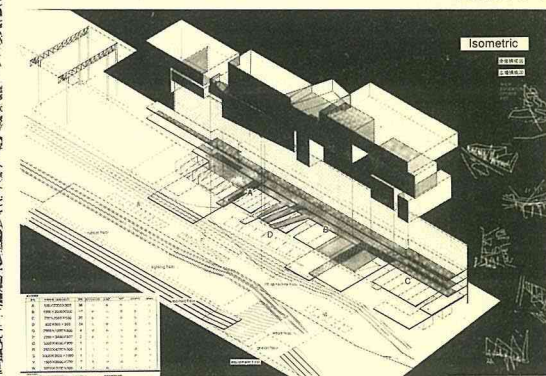
Masaomi Yonezu

■このプロジェクトは、かつて物流の拠点であった貨物駅跡地のロケーションを利用した、複合建築の提案である。通常の複合建築は、球の所は～、四角い所は～といった具合に、プログラムは、形態やあらかじめ規定されたプランニングにより拘束され、多数のプログラムが混在している面白さや、起こりうるハプニングを束縛している。■そこで都市において、道路や下水道を先に整備するように、複合建築においてもプログラムとは独立した空間の構造を設計することで、多様なアクティビティーを誘発しうる「殻」としての建築の構成を試みた。■具体的には、都市広場として再生された線路跡地の上に、敷地に並行して走る首都高速沿いにRCの柱梁構造の「床」を圧縮させて人が通る主動線とし、そこに鉄骨の大架構による「面積と高さ」によって表された数種類の箱のまとまり（A、B、C、etc）を噛み合わせてゆく。このことで、異なった目的をもった人びとの動線は錯綜し、床は都市における「街路」、箱は「ビルディング」となり、建築そのものが都市の空間を内包した空間構造の積層を可能にしている。

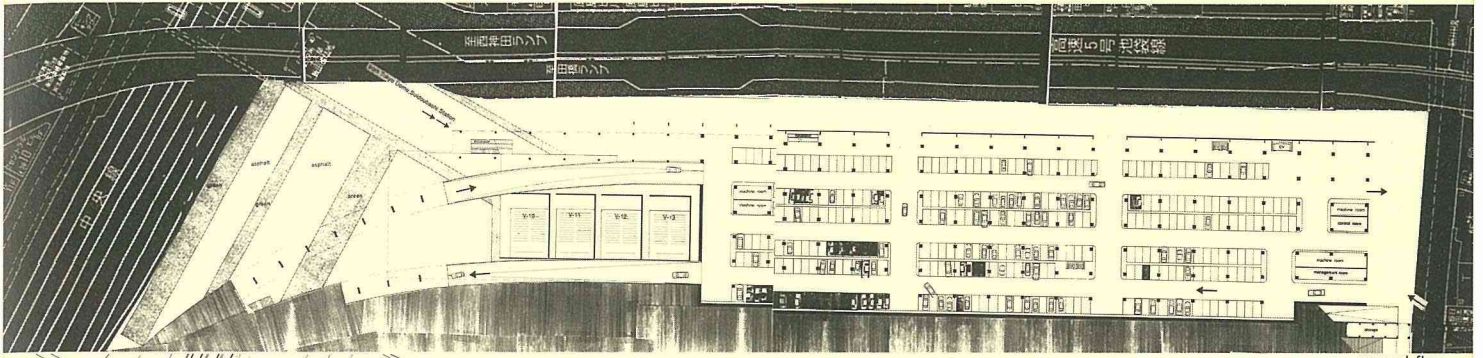
site plan



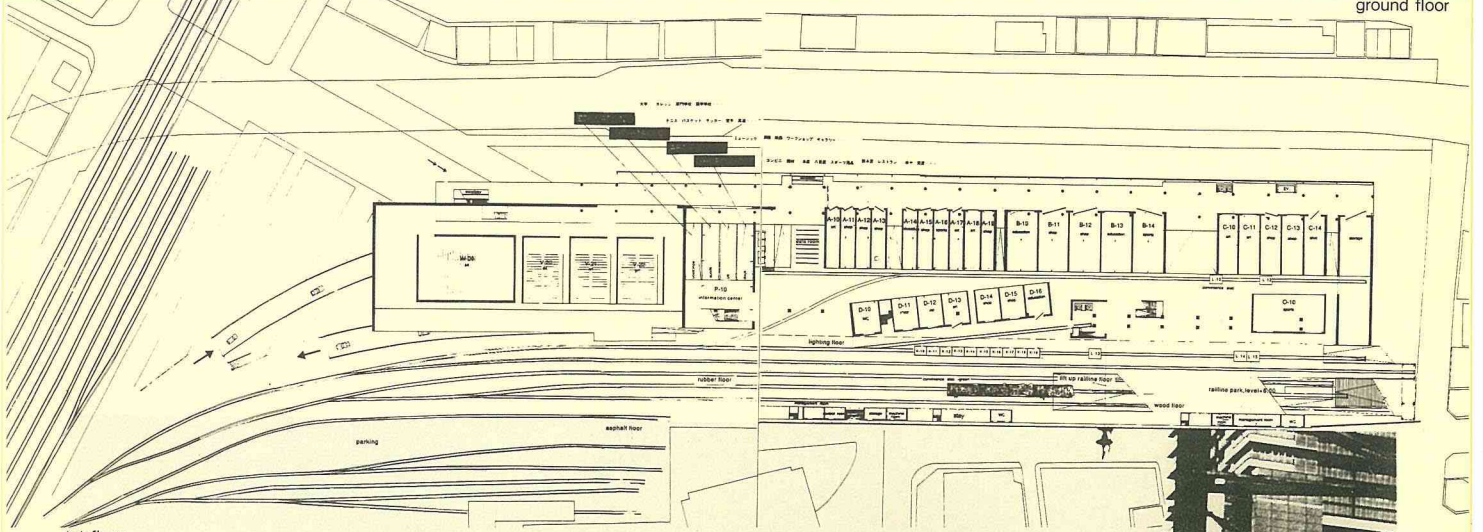
section d-d'



Isometric



ground floor



1st floor

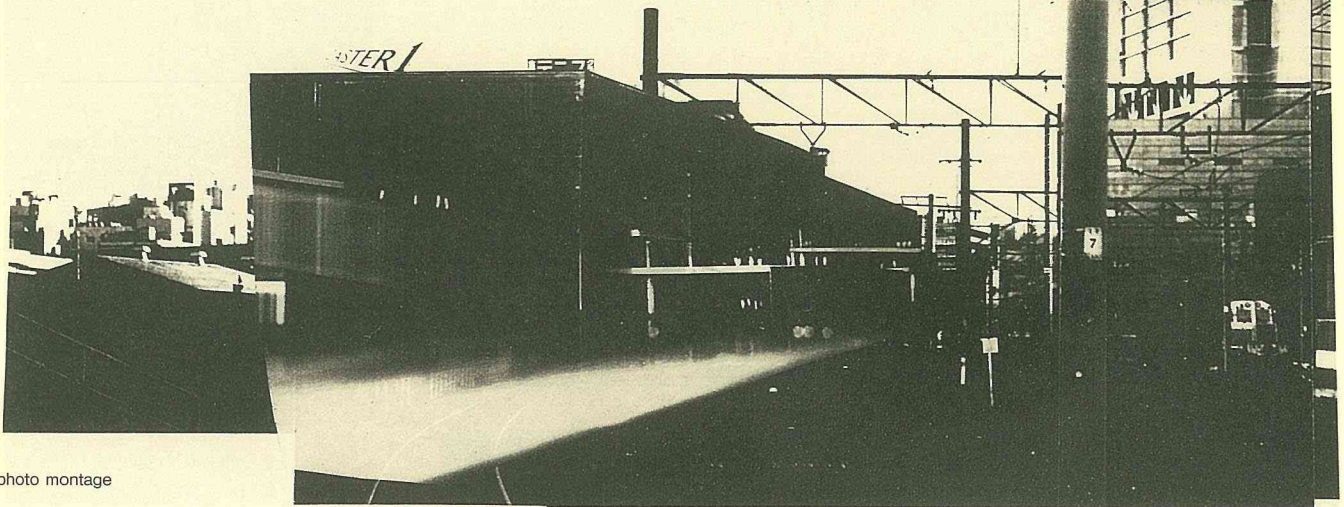
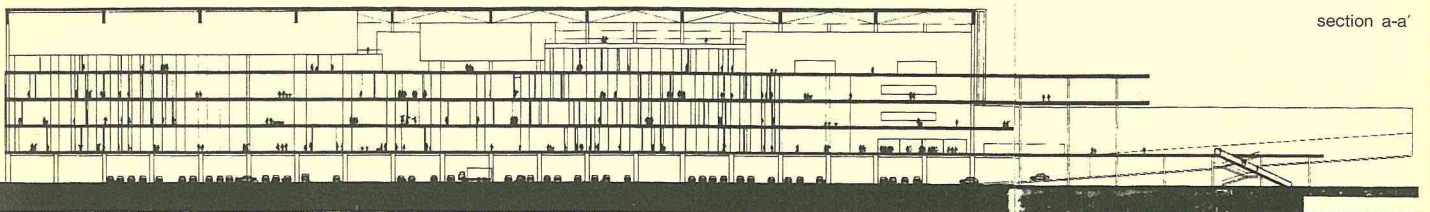
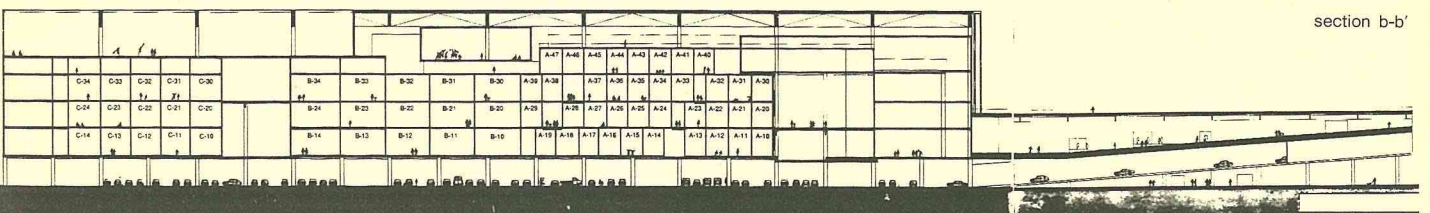


photo montage

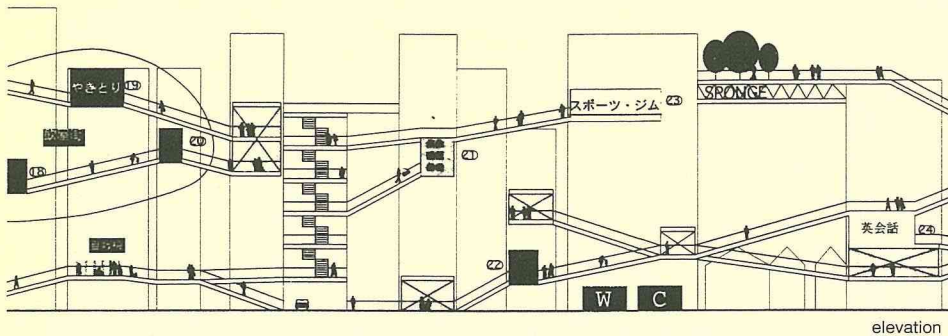
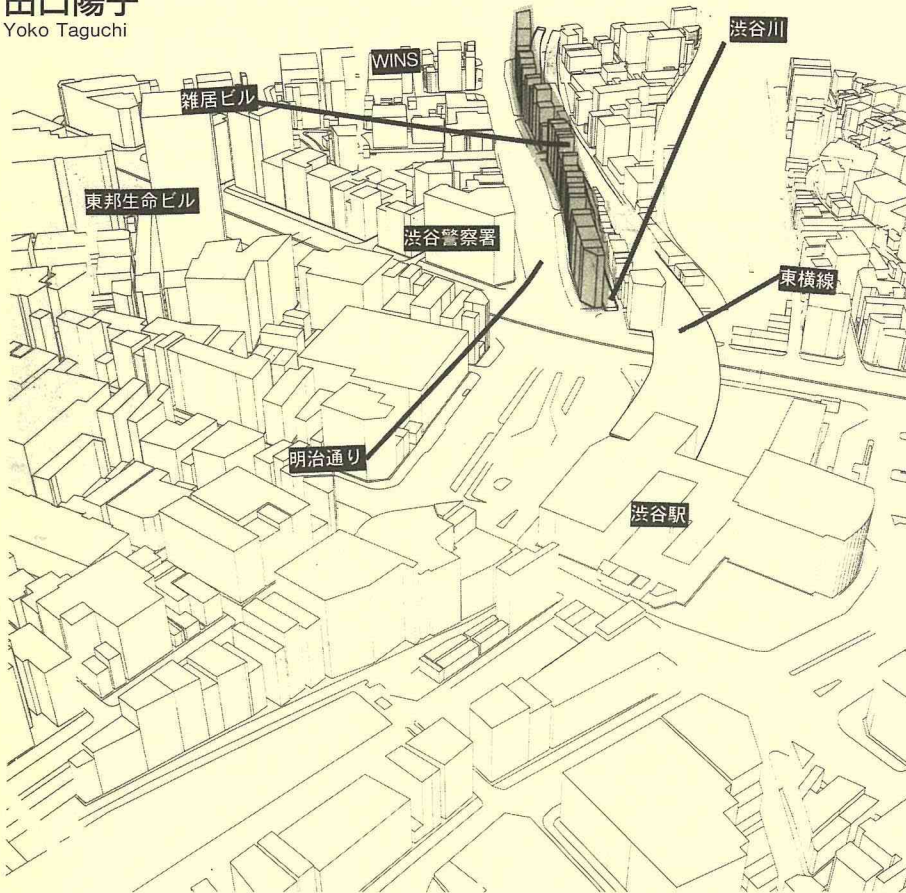


section a-a'

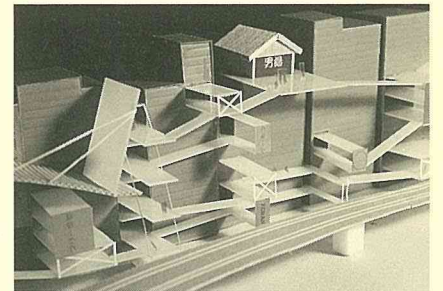
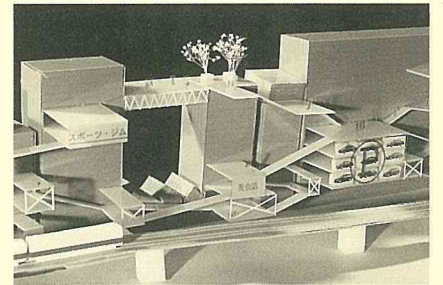
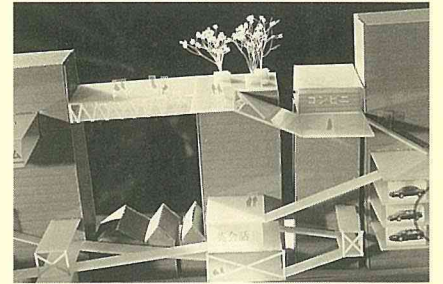
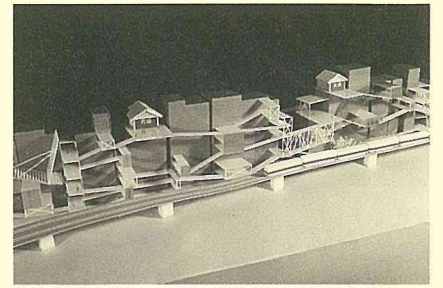
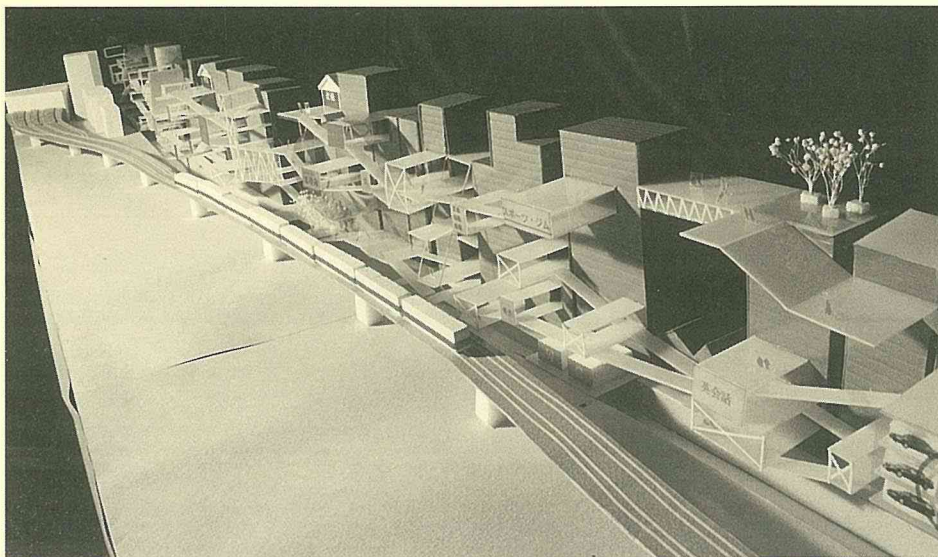


section b-b'

田口陽子
Yoko Taguchi



elevation



■東京には曖昧であるが、用途地域などでは決まり切らない量塊的・用途的まとまりがある。実際には、複合的都市形態がどの都市においても一般的であり、それぞれの差異を見出すことが困難であるため、そのまとまりを明確に取り出すことは困難であるが、時間の集積による何らかの理由によって、量塊的・用途的まとまりが生まれる。

■敷地は、渋谷川と東横線と明治通り沿いに挟まれている。敷地のある雑居ビルは、東西の領域を分断する壁のように建ち、西側に裏空間をつくり出している。また、雑居ビルはさまざまな用途の集まりであるが、箱の中に機能を押し込めているがために、そのポテンシャルをいかしきっていないのが現状である。

■SPONGEは、壁のように建つビルによってつくられた裏空間と雑居ビルのポテンシャルをいかすべく、ビルに孔(VOID)をあけ、機能を引き出し、それらをつないだ、渋谷に集まる多くの人びとの吸収体である。また、雑居ビル群の壁としての性格を残しながらも、孔が東西の領域をつなぎ、東横線に対してにぎわいを見せ、広告としての役割を担う。

服部ひかる
Hikaru Hattori

site plan



BELT CONVEYOR

敷地全体を循環するベルトコンベアで、外国人が販売にかけて売りたい商品が運ばれる。商品を循環させ人の目にさらすことで、購買意欲を高め、MARKETへ人を導くとともに市場全体に活気ある賑わいと活気を与える。

CAR+BICYCLE PARKING

市場の利用者だけでなく、新大久保駅を利用する人の車も考慮する。

BOARD WALK

駐輪場へのアクセスとして利用される他に、ここを歩きMARKET全体を上から見おろすことで自分の現在地を確認し、市場全体の雰囲気を感じとる効果を持つ。

MARKET

メインとなる市場で、ベルトコンベアで運ばれてくる商品のオークション会場、フリーマーケット、輸入食品市場がある。敷地全体から目印となるランドマーク的存在であるとともにほぼ全ての商品の購入、取引などがここで行われる。

BANK

市場を利用する外国人が日本円へ両替するために利用したり市場で買い物する人が利用する。

SHOP

新宿周辺で個人商店を営んでいるような外国人がここにMARKETの一員として店を持つ。

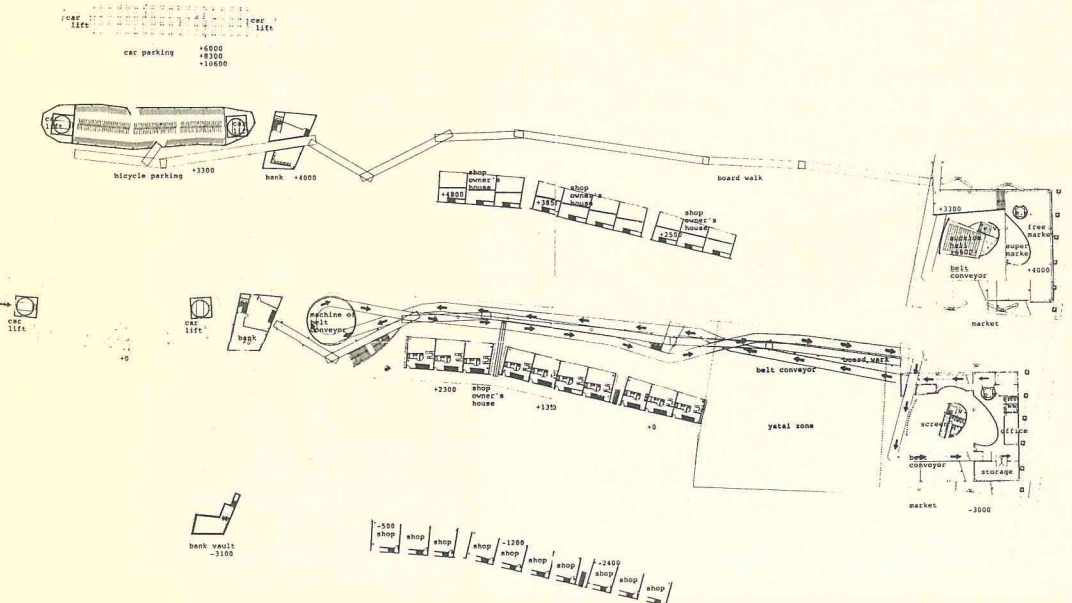
SHOP OWNER'S HOUSE

1階にSHOPを持つ店主のための住宅。1LDKで2階3層部分が住宅である。

YATAI AREA

ここは普段は広場であるが夜になると仮設屋台が店を開くための場所となる。車の乗り入れや仮設テントを貼ることも可能である。新大久保の雑多で活気ある風景が現れる。

■都市には隙間があり、隙間には都市からあふれだした人びとが棲みつく。新大久保は新宿のはずれにあり、都市からあふれだしたさまざまな人びとが生活している。新大久保を歩くと時折日本人よりも外国人の方が多くはないかという錯覚を覚える。しかし彼らは隙間に分散して棲み、日本人の生活とは関わらず生活しているため、彼らの存在はわれわれの生活にとって小さい。■本プロジェクトはJRの線路沿いの一角に、外国人による市場を計画することで、都市の隙間に分散している多国籍からなる外国人を集め、ひとつの国籍をもつものとして積極的に参加していけるような空間を創造することを目的とする。目指すものは混ざりあって均一化してしまうような無国籍地帯(non-national)ではなく、各国籍が主張協力し合う多国籍地帯(multinational)である。■コアとなるベルトコンベアは商品を選び、オークションにかけるといった新しいフリーマーケット方式の道具としてだけではなく、市場全体をお祭り広場的に演出し、市場全体を活気のあるものにする。この市場はさまざまな表情をもつ新大久保の表層を表すものとして、街全体を活気ある多国籍地帯へと導く。

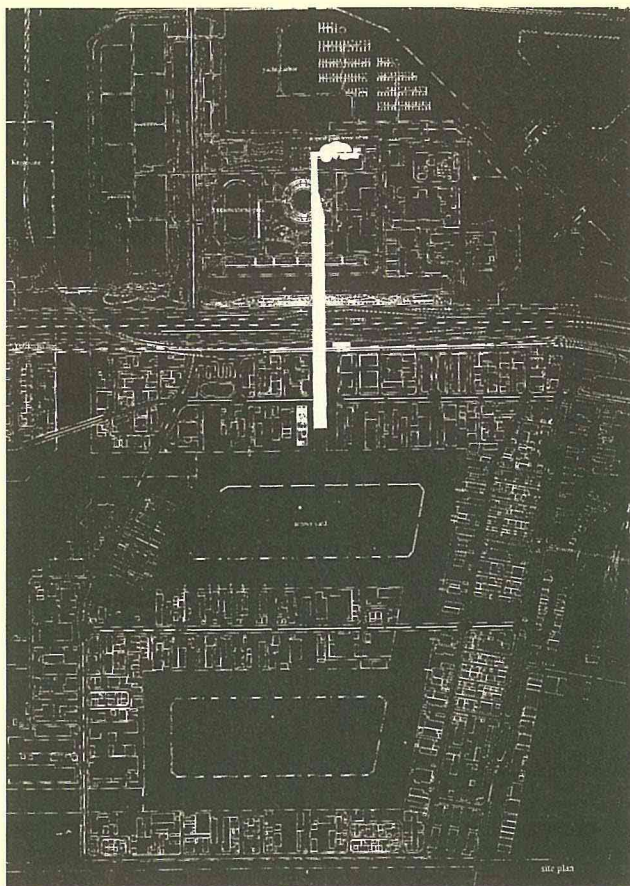
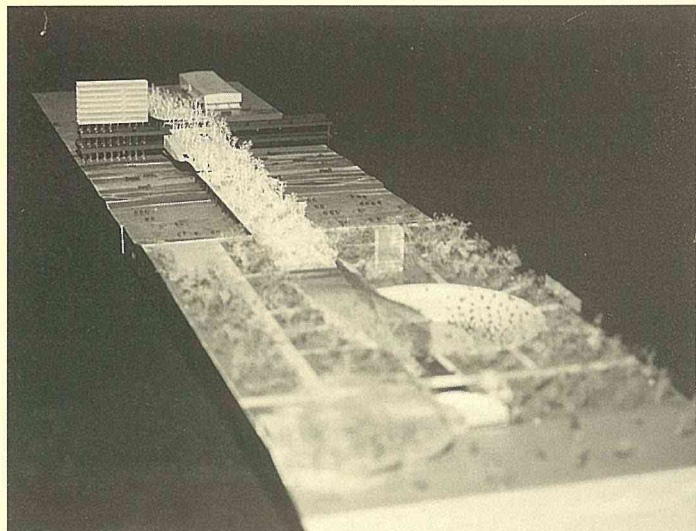


トウキョウ ウッジー ランド

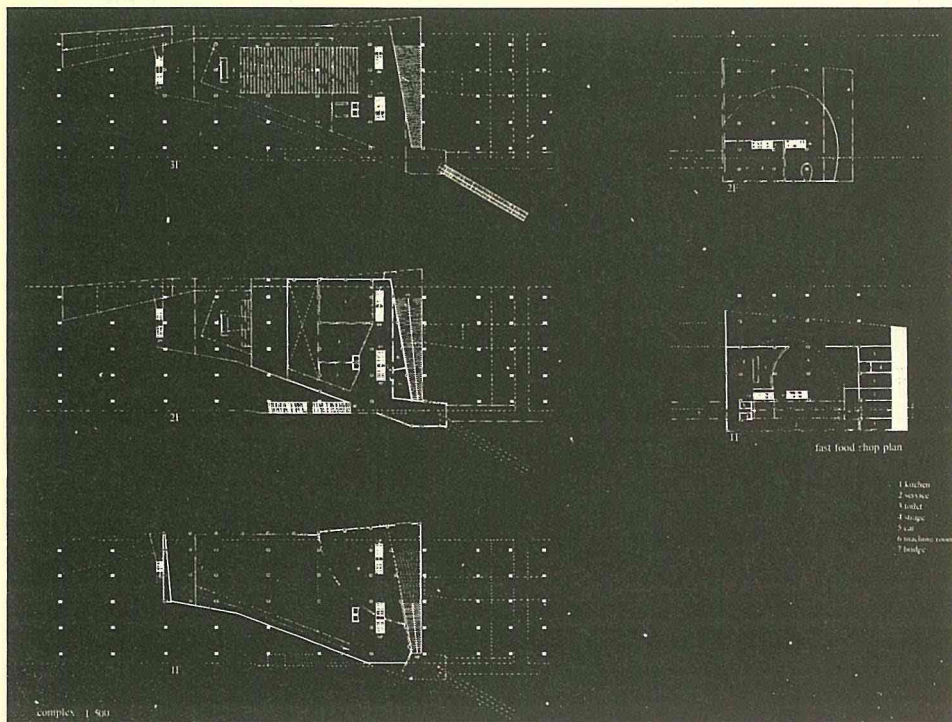
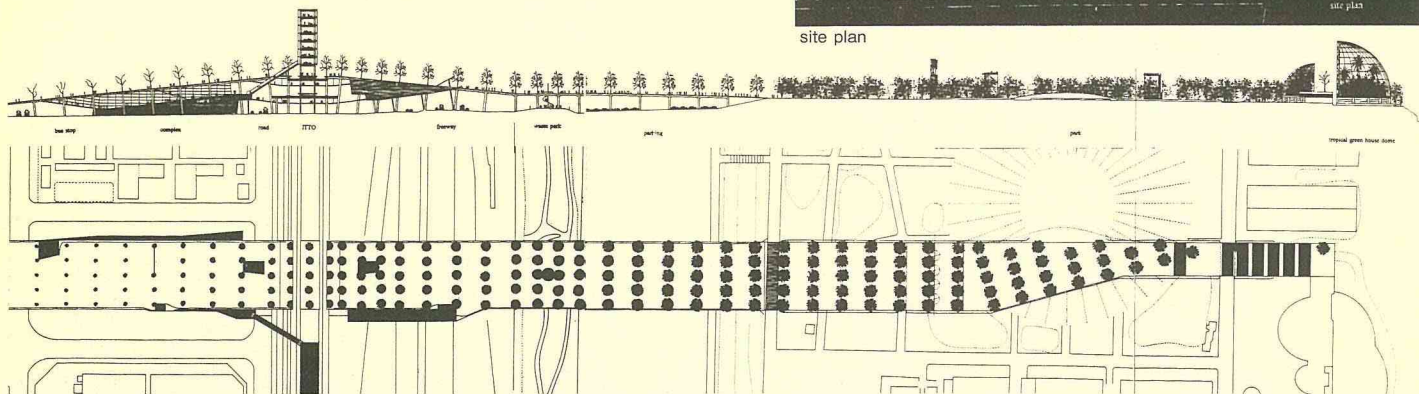
Tokyo Woodsy Land

銀賞/Silver prize

笠井誉仁
Takanori Kasai



site plan



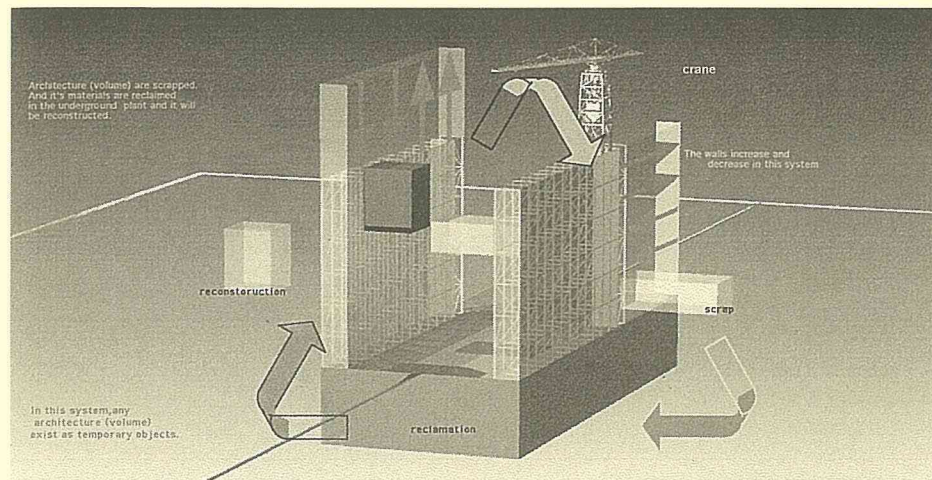
plans

■本計画では、木材流通変化により構造不況に陥っている新木場地区の、再開発の端緒としてのひとつの在り方を提案している。将来、商業・住宅地に変貌することを想定して計画されたプロムナード（この地区と、鉄道や高速道路により分断されがちな内陸側の夢の島公園とを結節する）を軸に、建物が分散配置され、全体が構成されている。■また、都市の単なる物理的な連結にとどまらず、埋立地ならではの矛盾した敷地の状況（生産林を扱う場と、リクリエーション林＝広大な公園の隣接を生かし、ランドスケープの操作、建物の配置を行うことで、夢の島全体をテーマパーク化することを試みている。■“WOODSY”とは、“木のような、森のような“LAND”とは“風景”という意味である。ここでは、都市の変貌自体が、LAND（風景）として展示されることになる。

Scrap/Reclamation/Reconstruction

銀賞/Silver prize

小川一人
Kazuto Ogawa



concept diagram

■現在の産業廃棄物の約2割が建設業により占められており、建築廃材の不法投棄の問題は建築業界のみならず社会全体の問題となっている。建築業界自体の環境破壊に対する認識は他の業種(自動車業界等)に比べ極めて遅れており、建築の危機として重大な問題だと思われる。

■本計画では建築のもつそのような問題に対し、建築廃材(コンクリート、鉄、ガラス、アルミetc)を解体・再生・再構築するプラントをシステムとして建築自体に取り込むことにより、建築廃材の問題に対し積極的に対処していく建築を提案する。

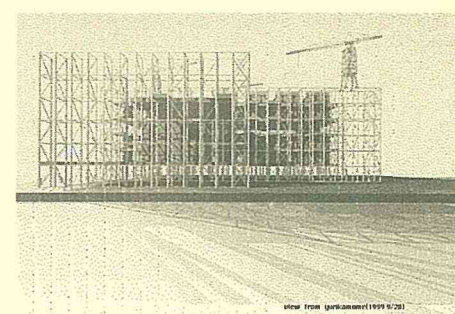
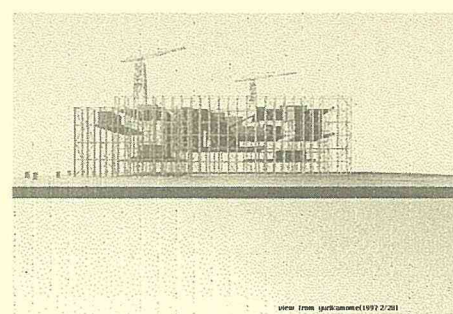
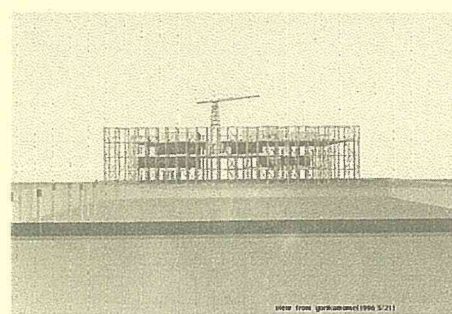
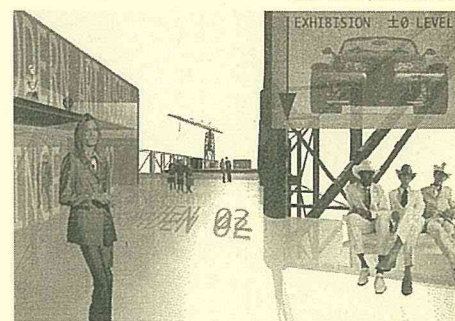
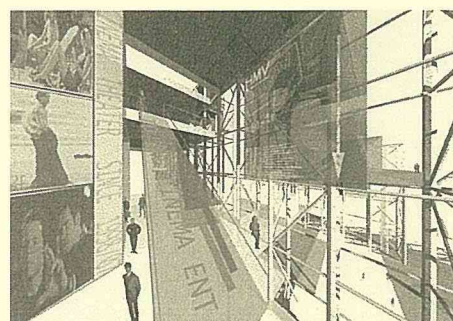
地下……解体/再生/再構築工場、倉庫
地上……ホール、カフェ、学校、図書館、仮設住宅 etc

■地上の建築は機能が組み込まれたトラスの壁に吊られるかたちで存在し、壁、建築ボリューム、スラブはすべてユニットで構成される。また時間と共に、解体、再生、再構築が繰り返され常に変化し続ける。プラントは建築が変化していくことを許容し、この建築の心臓として存在する。

■このような建築を、未だ計画段階にあり、計画上多くの不確定要素をもつ臨海副都心(台場)に提案する。



view from yurikamome



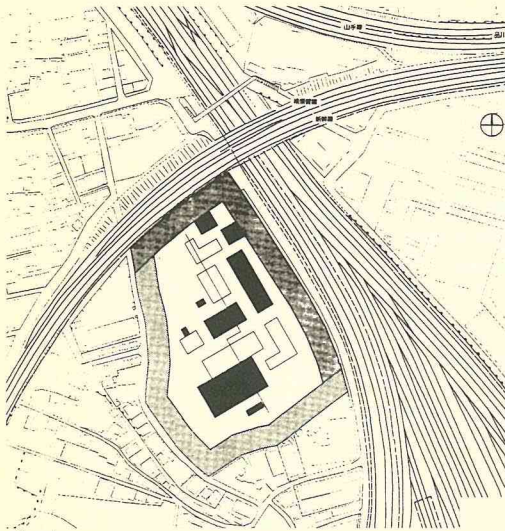
ドライビング スクール ビルディング

Driving-School Building

銀賞/Silver prize

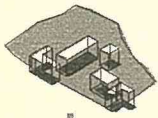
大成優子

Yuko Onari

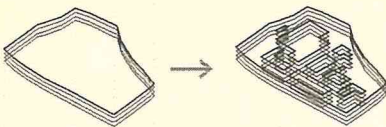


site plan

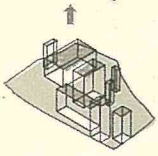
void



slab



volume



diagram

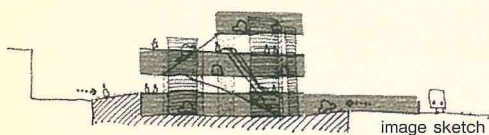
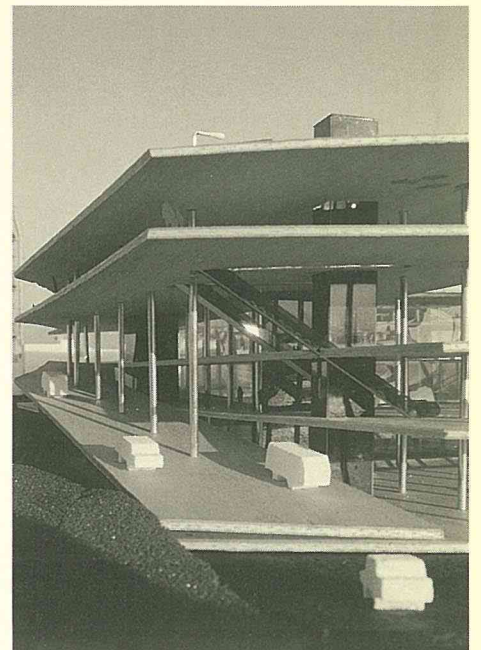
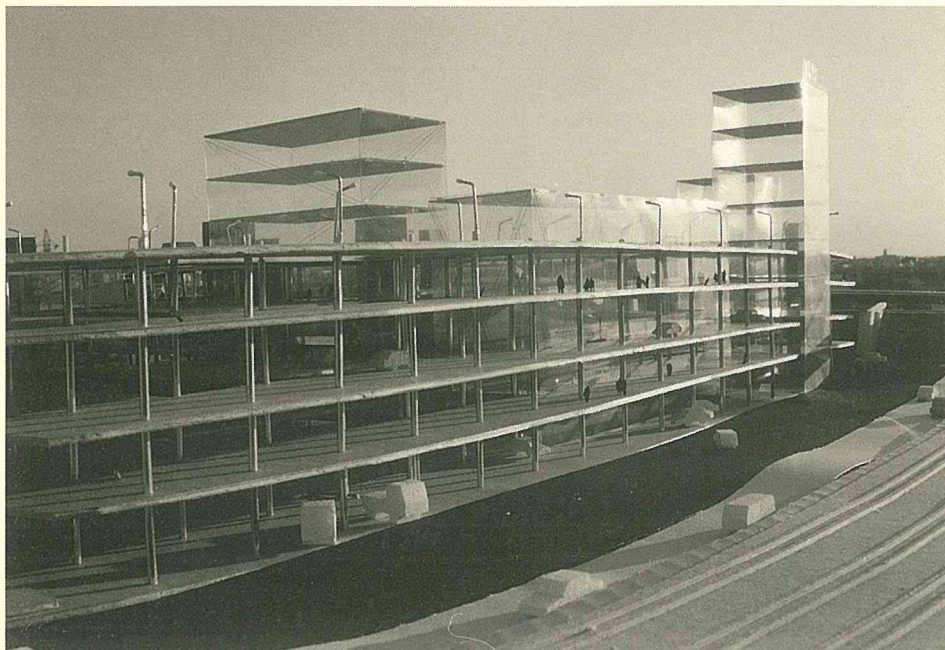
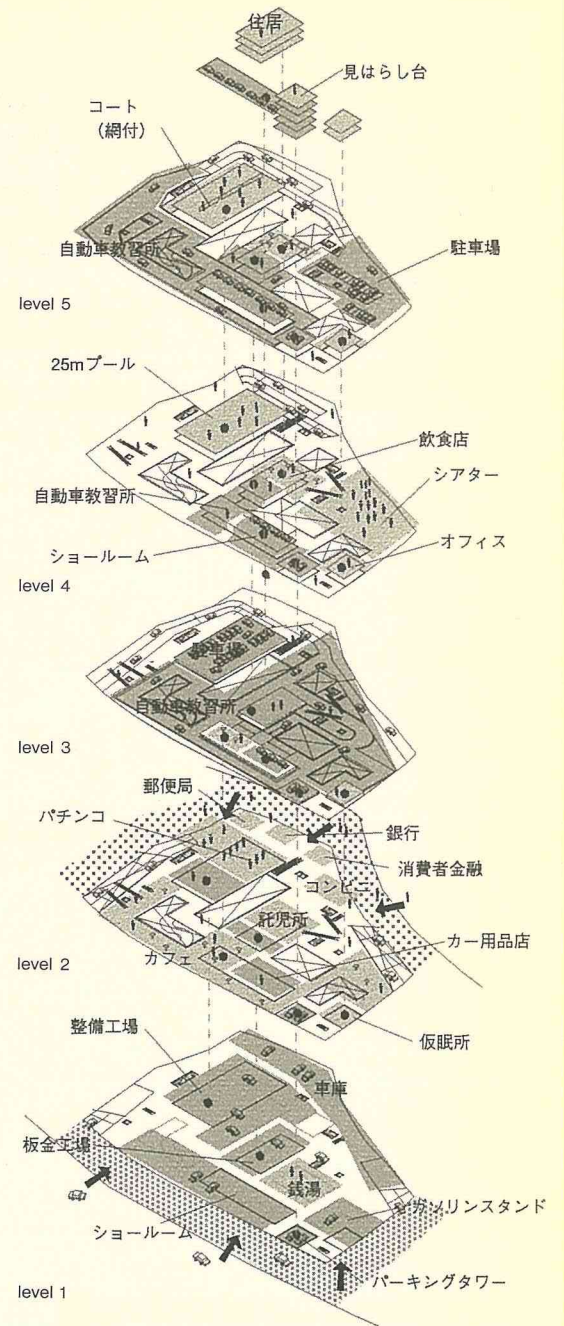
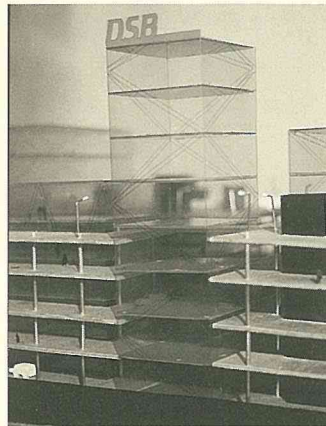


image sketch

■東京のような高密度都市においては限られた土地を有効利用しようと、駐車場がタワー型で出現したり、トラックルームが流行ったりしている。そんななか、都市の中に点在する自動車教習所は大きくまとまった面積を平面的に有し、教習を受ける人以外にはまったく閉じられている。そこで都市施設としての自動車教習所の複合を計画した。敷地は現在自動車教習所とタクシー会社が隣接している場所である。■この計画では車スラブ、人スラブとして異なるスケールが交互に積層され、平面的な自動車教習所は立体化される。これらのスラブは、整備工場や板金工場といった接地すべき機能の面積により規定されたポリウム、およびポイドによって形成される。■ここでは機能から平面を計画するのではなく、まわりの物的な状況によってつくり出された平面に機能が入りこむため、ポリウムの分節と機能的分節とは必ずしも一致しない、さらに建物内を車が走る、つまりインフラを内包することにより、建物と都市との境界の曖昧な複合体となる。



プラン/リアリティ

Plan/Reality

非常勤講師

妹島和世先生に聞く

Visiting kazuyo sejima, Lecturer

インタビューー

五嶋 崇 Takashi Goshima
 米津正臣 Masaomi Yonezu
 鈴木裕美 Yumi Suzuki
 遠藤康一 Kouichi Endo

インタビューは恵比寿にある事務所で行われた。学生時代の話や最近の作品を通して妹島さんの設計活動に対する姿勢をうかがい知ることができた。

建築を始めたきっかけや時期について話していただけませんか？

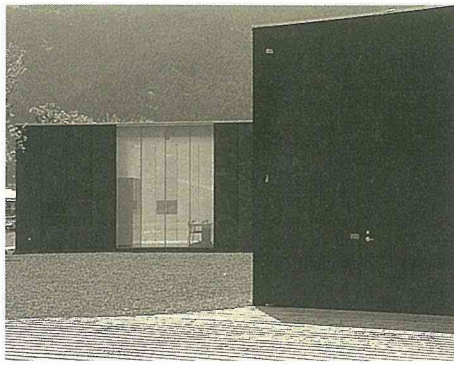
小さい頃から線を引くことが好きで、実家を建て替える話があった時も小さいながらに平面図みたいなものを書いてました。それと小さい頃にみた菊竹清訓さんのスカイハウスがすごく印象に残っています。その後大学でスカイハウスを教わり、これがあどとき見た建物だと改めて知り、それで建築との接点もちやすくなって建築を面白いと感じるようになりました。それからは真面目な学生時代を送ってきました。

建築を始めるきっかけとして、おもちゃのブロックを組み立てるようなことから入ることもあると思うのですが、

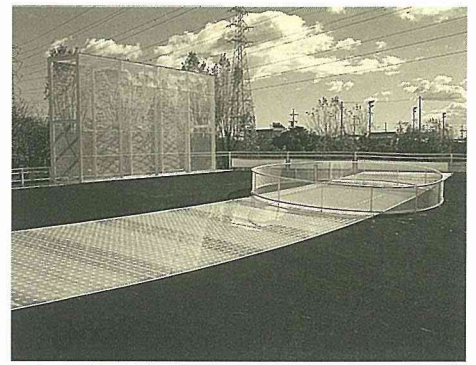
初めは平面を書くことでしたが、あとは人形遊びが影響しているのかもしれない。小学4年生頃に人形遊びがはやって、当時は社宅に住んでいたのですが、同じ様な年代の子がたくさんいたのでみんなで遊んでいました。それで当然、人形遊びの時は必ずシチュエーションがいるわけですね。学校とか自分の家とかをいろんなもので作って、それで物語を作りながら遊んでいました。

学生時代はどんな課題に取り組みまれましたか？

今はわかりませんが、そのころの日本女子大学では歴史にしても建築史というより住居史だったり、設計課題も住宅がメインで最後に美術館などでした。ですから友だちも建築をやる人もいれば、家具やステンドグラスなど他のデザインをする人もいて、その中にあるとどうしても情報的に乗り遅れる気がしたの



熊野古道・なかへち美術館



岐阜県立国際情報科学技術アカデミー マルチメディア工房

で、積極的にいろんなところへ聴講にいきました。設計課題は2年のうちが図面トレースと小さい住宅を、3年は都市住宅や集合住宅のようなものを、4年の最初に美術館というそれまでの住居とは違う用途のものをやりました。

熊野古道なかへち美術館が竣工しましたが、学生時代から比べて美術館というものの捉え方はどう変わりましたか？

学生時代からはもちろんのこと、つい何年前からでも変わってきていると思います。東工大の課題の時に美術館の在り方自体に反発するという反応が多くありましたが、以前だったら私もそう思った気がしますし、今でもそれを否定はしません。しかし一方で、そういった用途などを新しくすることから、アプローチする手法自体がどうかと今は思っています。今まで通りの計画学にのっとってやるのがいいとは思わないけれども、それをいちばんのテーマに考えるよりは、それはそれで考えながら違うことからアプローチした方がいいかなと、ここ最近では思っています。熊野古道なかへち美術館の時も、日本画を展示するので絶対日光を入れてはいけないとキュレーターの方がおっしゃった際、それに対して、入れてはいけないというのはおかしい、こういう光の入れ方ならできるのではないか、という展開の仕方もありますが、今回は展示部分をいちばん内側に配置することにしました。そこが変わればあの美術館もまったく違ったものになったと思います。これをやる以前は、中の機能の関係や、中の行為の関係をいかに完全な図にしていかに興味があつたのですが、最近ではもう少し違うことを考えたいと思い始めました。前回の住宅もそうですけど、ただの平行プランに見える

せいでいつも通り図式的なプランだと思われるのですが、そういうつもりはないのです。大垣のマルチメディア工房にしても短冊プランといわれますが、あれは一度ふたをしているのであって、中の関係のためにしている訳ではないんです。以前は中の構成がそのまま外に現れてきて、そのまゝいろんなものが決まっていたんですが、最近では少し変わって外側は外側、内側は内側で別なもので決めながら、同時に中と外が無関係になるのではない作り方を考えています。平面図が示すものを変えたいと思っています。以前はひとつのことですべてを決めるようにと考えていたんですが、最近は疑問をもっています。それを考え始めるきっかけとなったのが、調布市の交番や東京フロンティア計画でした。交番では中の利用者と建築をみる人の数の差が大きくて、その中でいくら透明で明るい交番を作ろうか、もはや大きなギャップがそこにはあります。フロンティアの施設では、長さが330mもあって一部を透明にしても、見る場所によってもはやパラレルにはいかないわけです。まあプランにこだわってはいらなくても、何かそこに違ったリアリティを示せないかと試行錯誤しています。

立面はどのように決めていきますか？

昔は内部の構成と構造を一致させて構造は壁、それ以外はガラスとしていたので、エレベーションで悩むことはあまりありませんでした。けれども、森の別荘で初めてただの壁構造というのをやり、そこで初めて窓の位置で悩みました。それから先はエレベーションもスタディするようになりました。打ち合わせでは高さ方向の図面はあまりなくて、必ず模型とプランのセットを使います。模型で断面と部



1981年 日本女子大学大学院修了
1987年 妹島和世建築設計事務所設立
1994年より西沢立衛と共同設計
現在 日本女子大学、東京工業大学、
東京理科大学非常勤講師
主な作品：再春館製薬女子寮、パチンコパーラー〜、
調布駅北口交番など

屋の関係を把握して、それを平面で見るとどう見えるか、それがボリュームでは周辺とどのように関係しているかを見ます。つまり断面計画というよりは全体のボリュームがどうなのがいいかを見ながら、プランを踏まえて選択していきます。

なかへち美術館やマルチメディア工房といった比較的広い敷地に対してランドスケープはどのようになされていますか？

美術館ではランドスケープも依頼されましたが、都市の中ならともかく、周囲が曖昧に広がった場所に、突然、敷地内だけデザインす

るのはあまりに白々しいと思い、曖昧に周囲に連続させるように試みました。切れ目は難しいと思いますね。自然の中に物を建てる訳ですから、どうやったって周りにフィットする物といわれても絶対違和感があると思うのです。デザインするという事は、自然のままということとは違いますから。マルチメディア工房では一応校庭というエッジがあったので、そこがステージみたいになるように教えられました。そういう意味ではなかへち美術館がいちばん方向性がなかったわけですね。またマルチメディア工房では、人工物を作っているのに完全に地中に埋めてしまうのはおかしい、しかしいきなり5m立ちあげるのもどうかと思い、少しだけ埋めて完全にランドスケープとして消すことはせずに、存在だけは感じさせるようにしたわけです。現在は地方でも自然があふれているようにみえても、そうじゃない敷地が生まれてたり、逆にパチンコパーラーの敷地のように周りには自然もなくて倉庫やいろいろな物が建っていて、建築自体が都市をつくっていくように始めから期待されていないような場所も生まれています。そう考えると都市のほうが周りを手がかりに考えていけるから、やりやすいといえればやりやすいような気がします。

東工大の学生へアドバイスを。

手を動かすまでに時間がかかって、考えたけれどもイメージがわからないという方が多かったですね。しかしまとめ方を知っている人は、どうしても今まである物になってしまいますから、最初からきれいにまとめてしまうというのがいいとは言い切れないとも思います。私たちがまとめる方向でいくつも作ってから絞るわけですが、実際はクライアントがいるので彼らの要望でわれわれのまとめようとする方向からずれがでてくるわけです。まとめるまでは面白そうだけどまとめてみたら面白くなかったということはよくあることで、つまりまとめた物を一度引いて第三者として見ることが必要だと思います。私たちは面白かったものだけ残していき、ある時期がくるとそれらを並べて本当に進めていくべき物をみんなで話し合い、絞るというやり方をとっています。そのときにひとつ実現することによって、まだ可能性があるだろうという物よりは、ここにはこれだったんだろうという物を選ぶように心がけています。しかしひとつ作るというんな反省が生まれる訳ですから、これからはそれを踏まえるように変わっていくかもしれません。

OB作品紹介
Works by Alumni

インタビュー： 小川一人 Kazuto Ogawa
川上正倫 Masamichi Kawakami

人とのつながり

On Human Relations

竹田秀道さん Hidemichi Takeda

インタビューは青山にあるIAO竹田設計東京事務所で行われた。学生時代の話、独立後の事務所経営の苦労やその根底にある竹田さんの人間関係を大切に作る姿勢をうかがい知ることができた。

学生の頃の話をお聞かせください。

僕は教員養成所を出たのですよ。君たちは知らないかもしれないけど谷口忠さん（通称チュウ先生）という大変に有名な先生がおられて、ちょうど学部を定年退官され教員養成所の主任教授としていらした時期でした。谷口先生は構造の分野で随分と活躍されていた方で、背丈はとても小柄でしたが、このうえなく建築に情熱を燃やされ、非常にスケールの

大きい方で、熱心に学生を教育していただきました。

僕は結果的には構造に進みませんでした。谷口先生は僕に建築家魂を最初に植え付けていただき、その後の僕の建築に対する捉え方に大きな影響を与えていただいた大恩人です。音響の松井先生、構造の岩下先生、材料の仕入先生など多くの先生にもお世話になりました。ただ当時学部との直接的なつながりがほとんどなくて、研究室に出入りすることもなく寂しい思いをした覚えがあります。

しかし卒業してから蔵前工業会や冬夏会に所属して、東京工大教員養成所で学んで大変よかったと思っています。やはり血縁とか学校とか何

か共通するものがなければ仲間意識は生まれなくて、つまり人間関係というのは故意にはつくれない運命的なものがあります。これだけ世界に人がいても自分の一生でお付き合いできる人は限られているわけです。

竹田さんの建築に対するスタンスは一般に建築家といわれる人とは少し違うように感じるのですが？確かに違います。ただ建築に対する情熱は人後に落ちないと思っていますし、建築を通して社会の発展に貢献したいと考えています。

ところが僕は教員養成所で学んだ3年間は教師をやろうと考えていました。そして夜間の工業高校の教壇に立ったのですが、同時に昼間は設

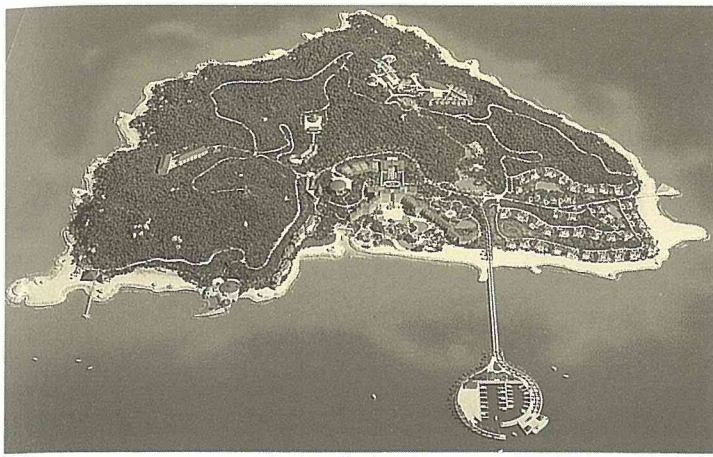
計事務所に所属して実務にも携わったのです。ところが昼間に所属した事務所で、二足のわらじは無理だからとにかく先生を辞めろ、といわれて仕方なく1年で教壇を去ることになったのです。

その後、僕の所属していた事務所が関西で急成長し、その活躍りが注目されるようになったのですが、残念ながら昭和50年前後のオイルショックの影響を受けて経営状態が決定的に悪化してしまいました。とにかく潰すわけにはいなくて、いくつかのグループに分かれて本体を生かそうということになりました。

僕はすでに主要なチーフであり役員だったので何人かのスタッフを連



カデンツァー・ザ・タワー（大阪市・1992年）



中国海南島リゾート・国際指名コンペ入賞作品 (中国・1993年)

竹田秀道
Hidemichi Takeda



1941年 大阪市生まれ
1965年 東京工業大学工業教員養成所建築学科卒業
大阪市立工芸高校建築学科教諭、
井上久雄建築設計事務所を経て
1976年 IAO竹田設計設立
1995年 武漢東芸建築設計有限公司副董事長就任、
現在に至る

れて出ることになったのです。社会の不景氣な時に、独立したくて独立した訳じゃないんで大変でした。マスコミに乗って順調に仕事が増える場合もあるけれど、残念ながらみんながみんなそうはいきません。まともな仕事に恵まれるかどうかということは腕の善し悪し以前の運不運もありますし、それ以外のこともあります。

この世界に腕のいい人はいっぱいいますが、その中で仕事に恵まれるためには社会との接点をいかに多くもつかかか大変に重要なことです。事務所のトップというのはどんなにモノづくりが好きだといっても部下を食べさせなければなりません。夢中で図面を引いている時にふと自分はいま図面を引いていていいのか？ダメじゃないのか？と雑念が走ります。社会との接点が気になるわけです。

とにかく昼間はお付き合いでゴルフし、夜は徹夜で図面を描いたりしながら365日、1日24時間ほとんどプライベートな時間のないまま頑張っているうちに、気がついたら80名余りのミニ事務所の主宰者になっていました。やがてバブルがはじけて大変な目にあった訳です。幸いに苦楽を共にした仲間達を減らすことなく現有勢力を維持し、今日に至っているのは、ただただ神の御加護と深く感謝しております。

たまたま僕は集合住宅を特に積極的に手掛けてきました。総合設計制度を採用し、民間のプロジェクトであっても公的なオープンスペースを取り入れるなどして質の高い集合住宅を大小に関わらず徹底的に数多く設計し、実績をつくりました。その結果、各自治体からさまざまな賞をいただいたり、それなりの評価をいただけて、バブル後もこの関連の仕事だけはコンスタントに受注するこ

とができたのです。

最近の僕は建築家というよりは評論家とでもいうべきかもしれません。何故なら自分の手で描かないでスタッフの横に立って盛んに口で描いている感じです。もっとも評論家は完成したのに対して批評しますが、僕は図面の段階で口を出します。即ち僕は口で図面を描く亜流の建築家というべきかもしれません。

中国事務所開設の契機は？

3年前から縁あって中国で事務所をつくりました。21世紀はアジアの時代といわれていますが、そのために計画的に開設したわけではありません。中国を中心として日系企業がアジアへ出ていった場合のお手伝いができるようにしたいと思っています。僕は昔からアジアの一員という意識をもっていました。僕が今日あるのはいろんな人のお陰なのだから国の内外を問わず人の役に立ちたいと思い、中国からの留学生の保証人になったり、多少ですが外国の人の援助をしてきたんです。そんなことから上海に知人もできて中国の内情については比較的良く判るようになっていました。

ある時、蔵前工業会の大先輩のご指示でマレーシアの留学生をお世話したんです。学校を卒業後、彼はうちのスタッフになったのですが、彼のお兄さんがシンガポールで設計事務所を主宰し、太平洋オセアニア地域で国際的に活躍していました。それで彼を通じて一緒に仕事をしないかというお誘いを受け、中国海南島のコンペを一緒にやりました。それから何度か一緒にリゾート関係や大規模な複合ビルの仕事をしていたのですが、ある時中国から来日し私どもがお世話をしていた武漢市の技術院の方から、武漢市の600人位の大

手設計事務所が日本の企業と提携したい意志があるという話がありました。

これがきっかけとなって、シンガポールの彼とわれわれと一緒に中国本土での甲級ライセンス（中国であらゆる仕事が可能なライセンス）取得を前提として3社で合弁事務所を設立することとなり、会長は中国、副会長は日本とシンガポール、資本金1億円（当時）ということで話が決まり、1995年に正式に認可されました。

先程も言いましたが、日系企業のニーズに対応できるような基盤をつくりたいし、アジア諸国での仕事の時もいちいち日本に帰らずに中継基地となるようにしたいと思います。同時に中国、シンガポールにそれぞれ母胎となる実績のある事務所があり、三者が共通の目標をもち、互いの情報などその他を共有できれば大変に心強いことだと思っています。しかし中国は今後いろいろな意味で制度が変わっていくところですから、今回の香港返還後もどういった変化が起るかわかりません。

中国で設立準備を始めたときは、中国には日本の1級建築士のような個人のライセンスはなく、全て組織に対するライセンス制度でしたが、3年前から米国と相互乗り入れを前提として米国の建築家制度を採用し、個人の1級建築士が誕生しつつあります。一方で中国の建築家もプライドは高いし、コンピューター化も進んでいるし、技術力も大したものですが、しかし新技術というソフトウェアに基づく技術は弱くて、全体的には日本から吸収しようとしています。

また中国の企業が人を日本に派遣する時には日本に受け入れる組織が必要で、中国側のニーズはそこにあ

ります。一方でわれわれのニーズは、まずは中国と共に仕事をし、中国で実績を積むことです。ところが文化の違い、建設業界の制度の違いなどあり、簡単にはいきません。

そこで去年からこっちの仕事のやり方を覚えて帰ってもらおうと中国人スタッフを5人ほどこちらに呼びまして、現在一緒にわれわれと仕事をしています。来世紀初頭には日本の文化と技術そして日本のクライアントのニーズを知る実務経験者20~30人のグループを中国につくりたいと思っています。その時には同時並行的に仕事ができるかなとも思っています。

これも含めて中国での基盤をつくるのが60歳までの目標で、もうひとつはバブル時代の後遺症を完治させることです。これができたらまた原点に戻って仕事ができればと考えているんですが、また建築を直接的に造りたいと思っています。

最後に学生にアドバイスを。

やはり、どんな優秀な人でも一人で一人前にはなれません。いろいろな人にお世話になって一人前になって行くわけです。そしてやがて徐々に力もつきます。しかしせっかくながら力についてもそれを発揮し活かすチャンスがないとさらに大きなステップに結びつきません。そのチャンスを掴むのは確かな実力による訳ですが、現実には実力の活かされていない人の方が多く、それは運の善し悪しでは済まされない何かがあります。計算の成り立たない微妙なところですが、給料分以上にできるだけ多くの人に喜んでもらえるよう常に心配りと努力ができる人を世間は望んでいますし、そのような人には支援者も多く集まるような気がします。

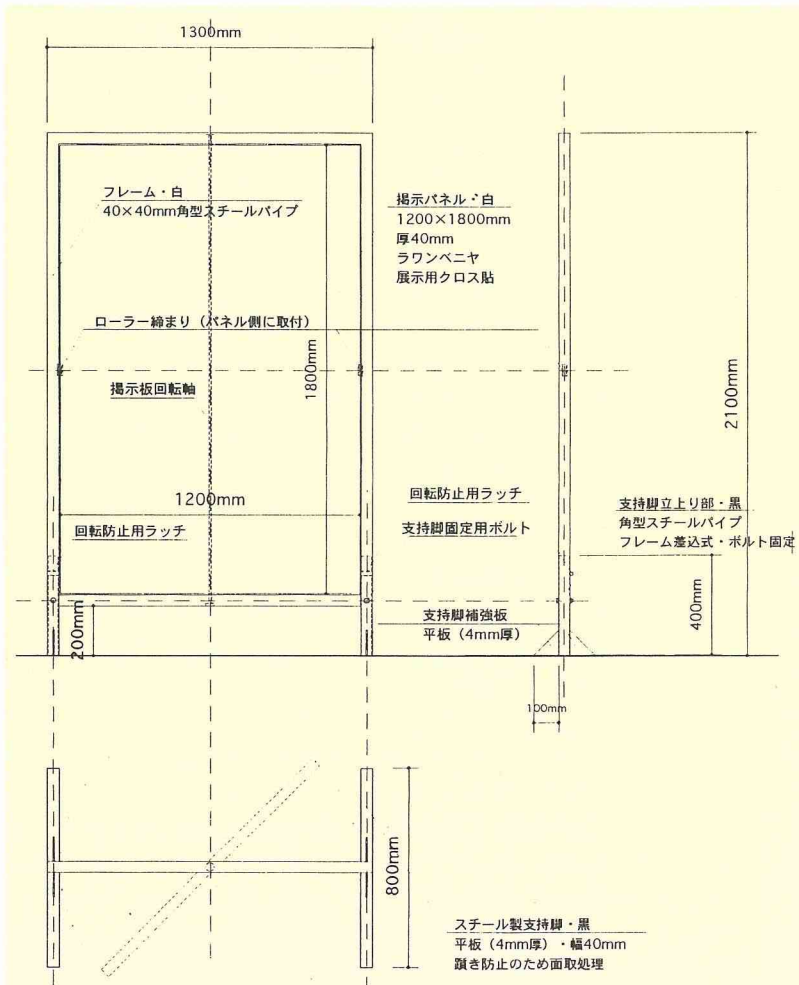
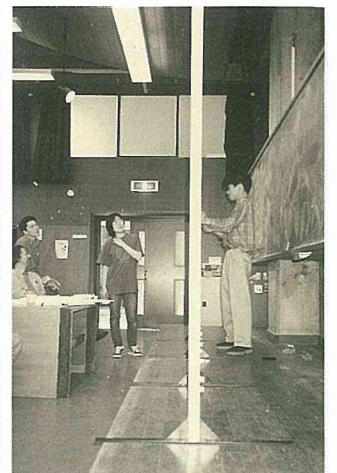
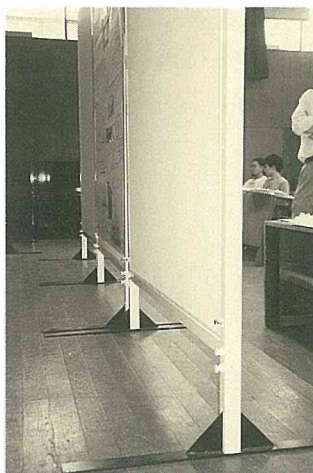
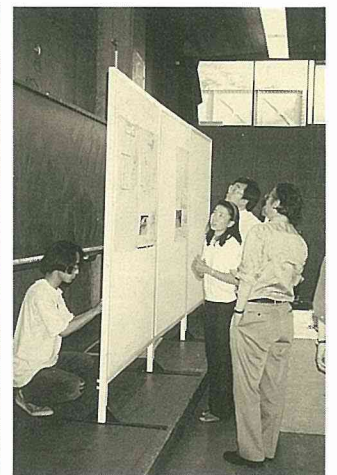
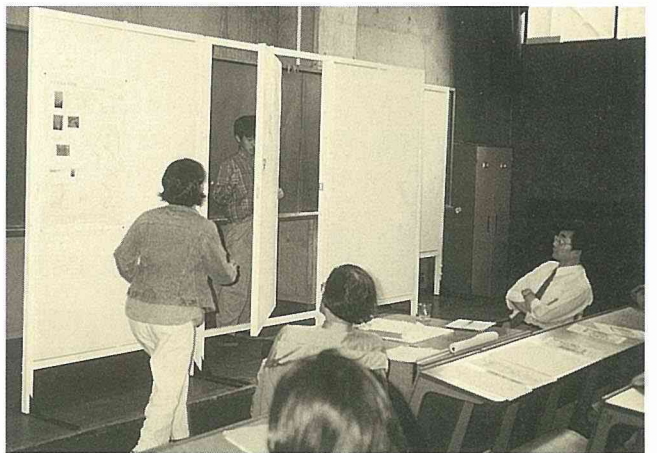
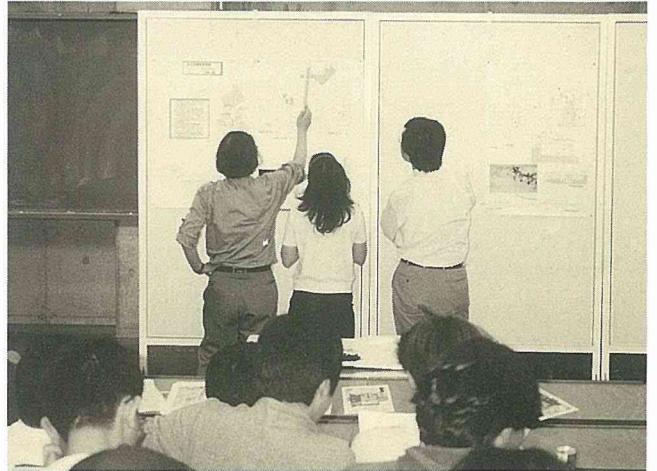
【設計製図講評パネルの製作報告】

Panel for Studio Work Critique

設計製図の講評のシステムはどの大学でも悩みの多いところである。私自身、日大、早大、琉球大、名古屋工大とさまざまなところで講評をしてきたが、特に講評作品の貼り替えに時間がかかり過ぎるのが問題であった。本学ではバーに図面を貼り、それを交換する方式をとってきたが、バーの交換に時間がかかり、またバーが落ちたりして不具合が多かった。3年間東京大学の設計製図の非常勤講師をしたが、そこでの脚部にキャスターがついている回転式パネルに大変感心した。しかし、この方式はキャスターによって全体を回転させるために大きな平面が必要である。本学ではスペース的に適応できない。そのため本学の講評室に適合した回転式パネルを作成した。

本学の講評室には講義台があり、その講義台は奥行きが狭く段差もある。したがってフレームを固定し、その内側に回転パネルを入れたものとした。回転パネルの寸法はA1か縦位置に4枚掲示できる大きさとした。また脚部と上部フレームを分離できるものとし、移動や収納を簡便にした。図のように裏面で次の説明者が図面を貼り付け、前の説明者が終わるとパネルを回転して説明するという方式である。昨年7月に試作品を作成、改良を加えた上で8月末に5枚を完成、昨年度の後半課題より使用している。現在のところ、非常にうまく機能している。作品図面の背景が美しくなったため、図面自体がうま見えるのが不思議である。この方式によって今年の卒業制作発表会の時間は大幅に短縮された。

このパネルを製作するにあたって参考にさせていただいた東京大学建築学科および試作、製作資金を提供いただいたTIT建築設計教育研究会に感謝したい。(仙田 満)



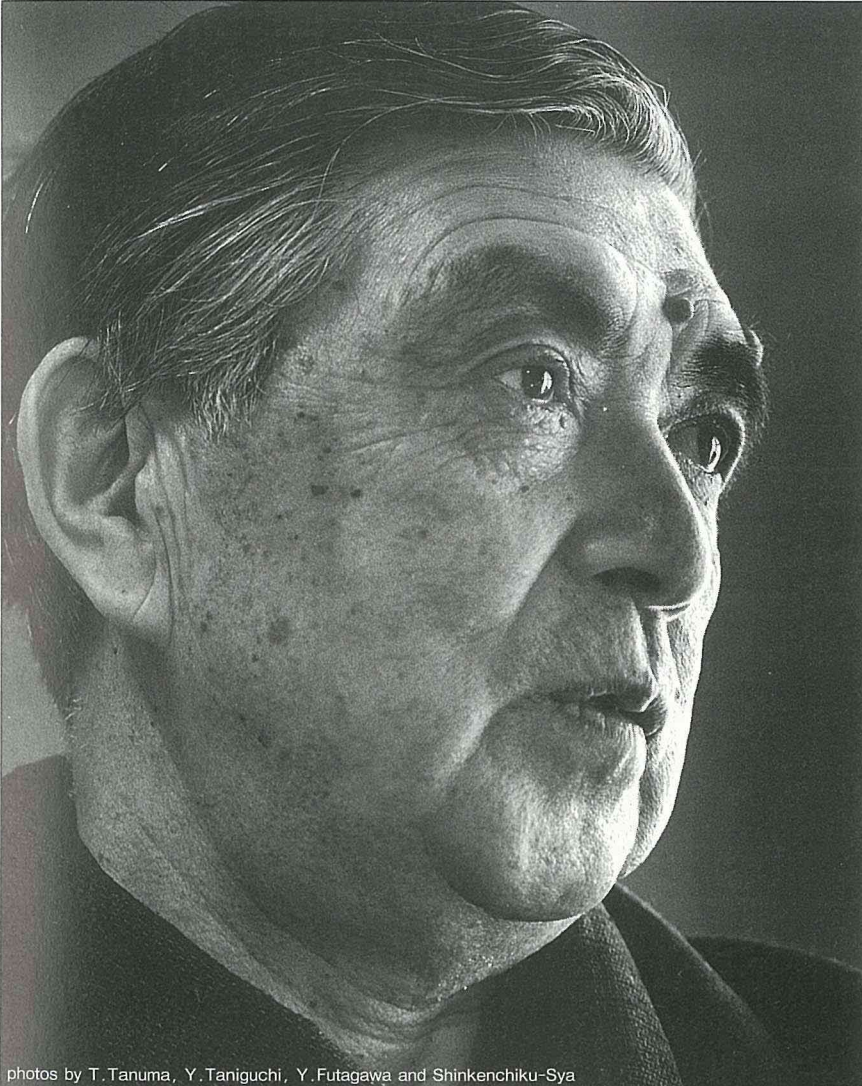
講評パネル図面 S=1:30

1997年度設計製図第三(中間講評)での使用状況

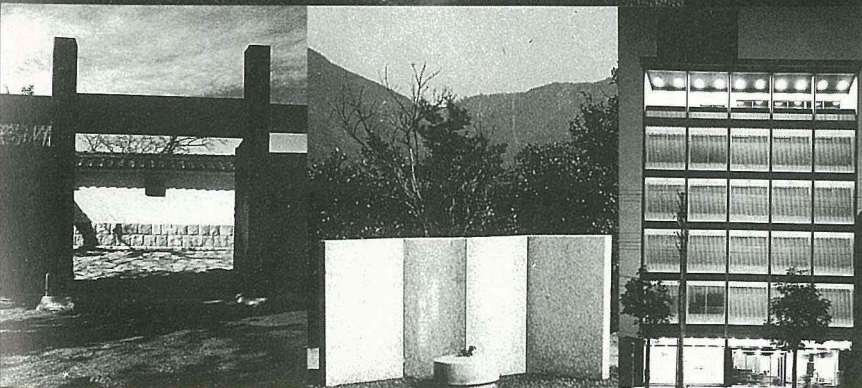
【谷口吉郎展 日本にふさわしい近代建築を目指した建築家】

Yoshiro Taniguchi 1904-1979 : An Appropriate Modernism

TIT建築設計教育研究会の企画により、1995年度総会において、本学の名誉教授であられた谷口吉郎先生の展覧会の開催が決定され、準備会を経て1996年11月、冬夏会員を中心に日本建築学会谷口吉郎展実行委員会が組織された。下記のような日程で、建築会館ホールをはじめ各地で展覧会・シンポジウムが開催される。



photos by T. Tanuma, Y. Taniguchi, Y. Futagawa and Shinkenchiku-Sya



今年には谷口吉郎設計による馬籠の藤村記念堂完成50年にあたる。戦後の混乱の中で、近代建築を伝統との関係において提出された作品は、村人の献身的な努力により建設された。この記念堂は戦後初の日本建築学会賞受賞作品となり、建築界にさわやかな新風を巻き起こし多くの人びとに勇気を与えた。

物質的には豊かであっても不安と混乱に満ちた現代において、谷口の「清らかな意匠」を見つめ直すよい時ではないかと思われる。谷口は、碑のように小さな作品からセメント工場のような巨大建築まで幅広く設計し、またさまざまな著作の他、建築を越えた文化・芸術分野との交流を通じて、明治村や「現代の眼」展のような新しい企画をプロデュースするなど広範に活動した。

この展覧会では谷口吉郎の建築作品、記念碑作品、著作、交流の記録などを構成・展示する。建築学会員を含め多くの人びとに、谷口吉郎の幅広い活動と深い思想に接し、建築家の生き方について理解されれば幸いである。

〈東京展〉 建築会館ホール

1997.9.27 (土) ~ 10.12 (日)
10:00~19:00(月~金), 10:00~16:00(土日祝)

〈シンポジウム〉 建築会館ホール

1997.9.11(木) 18:30~20:30
テーマ=谷口吉郎の清らかな意匠
パネリスト=榎文彦, 鷲塚泰光, 三輪正弘

〈小郡展〉 福岡県小郡市七夕会館ホール

1997.10.18 (土) ~ 10.26 (日)
10:00~19:00 (月休)

〈シンポジウム〉 福岡県小郡市文化会館ホール

1997.10.18(土) 18:30~20:30
テーマ=いま“モダニズム”について考える
パネリスト=杉本俊多, 高橋晶子, 土居義岳, 藤原惠洋

〈名古屋展〉 国際デザインセンター・デザインホール (ナディアパーク)

1998.3.7 (土) ~ 3.22 (日)
10:00~20:00 (無休)

〈シンポジウム〉 国際デザインセンター

プレゼンテーションルーム(6F)
1998.3.8(日) 14:00~16:00
テーマ=「清らかな意匠」の環境倫理
- 建築家: 谷口吉郎の未来展望 -
パネリスト=内藤昌, 木村一男

〈金沢展〉 金沢市立玉川図書館附属展示ホール

1998.4.18 (土) ~ 5.5 (火)
9:30~17:00 (月休・ただし98.5.4は開館)

〈シンポジウム〉 金沢市文化ホール・3F大会議室

1998.4.18 (土) 14:00~16:00
テーマ=建築家谷口吉郎における金沢の風土とデザイン
パネリスト=平井聖, 團紀彦, 笹覚暁, 室生朝子, 新村利夫

*全会場共 展覧会=入場無料, シンポジウム=入場無料・先着順

主催=日本建築学会谷口吉郎展実行委員会 共催=冬夏会, TIT建築設計教育研究会

後援=文化庁, 建築業協会, 日本建築家協会, 日本建築士会連合会, 日本建築士事務所協会連合会, 慶應義塾

協賛企業=資生堂, 大林組, 鹿島建設, 清水建設, 大成建設, 竹中工務店, 熊谷組, 東急建設, 戸田建設, 西松建設, 乃村工務社,

日建設計, 構造計画研究所, 鴻池組, 間組, 安藤建設, 奥村組, 環境デザイン研究所, 新日本製鐵, 住友建設, 大建設計, 淡交社, バコーポレーション, 日本設計,

ブリヂストン, 前田建設工業, 三井建設, 三菱重工業, 山下設計, レーモンド設計事務所, 石本建築事務所, NTTファシリティーズ, 観光企画設計社, 名古屋鉄道, 川崎重工業,

久米設計, 建築研究所アーキヴィジョン, 松田平田, 丸ノ内建築事務所, RIA, 出光美術館, 秩父小野田, テーテンス事務所, デザインシステム, 文藝春秋, ホテルオークラ, 水澤工務店, 岩城造園

*その他冬夏会を中心として個人寄付など多くの方々のご協力をいただいた。

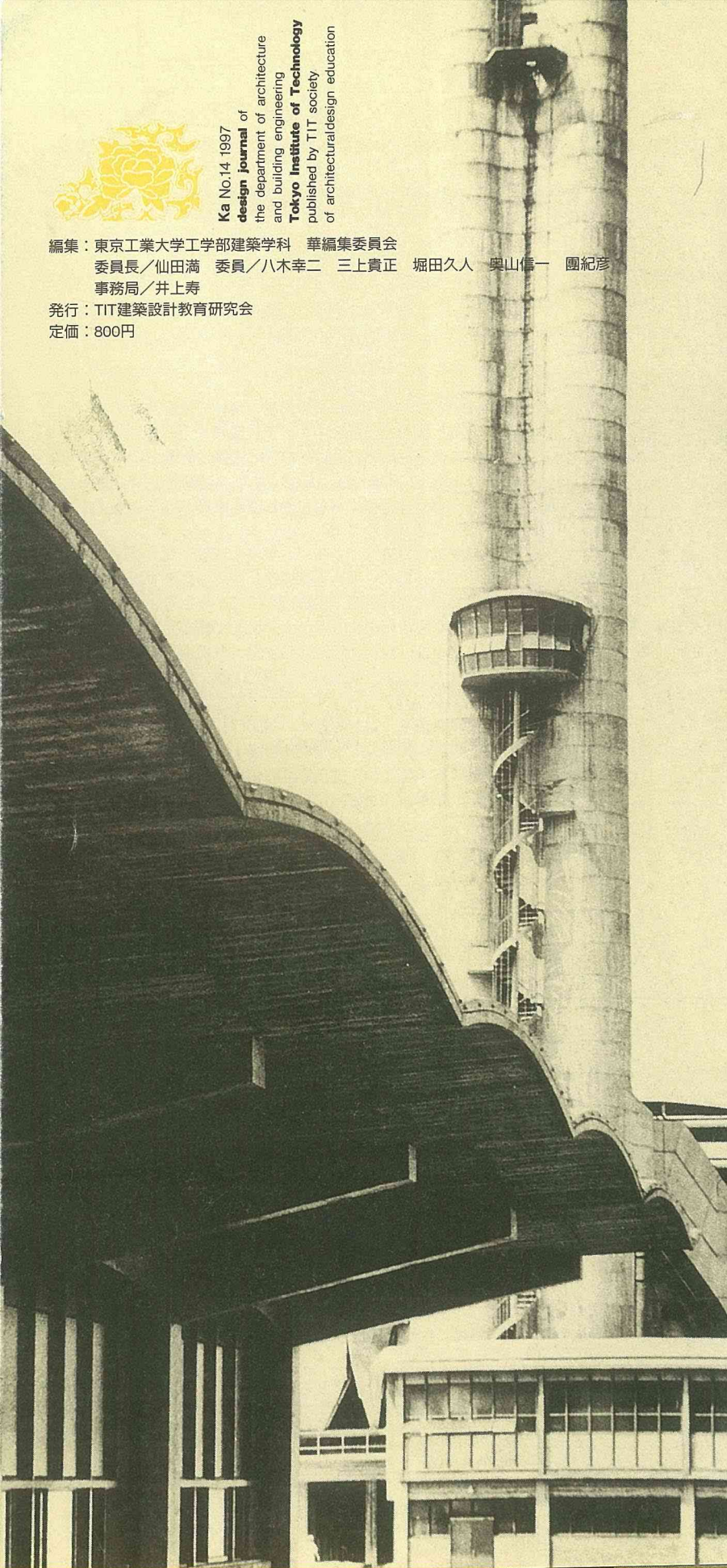
芸術文化振興基金助成事業



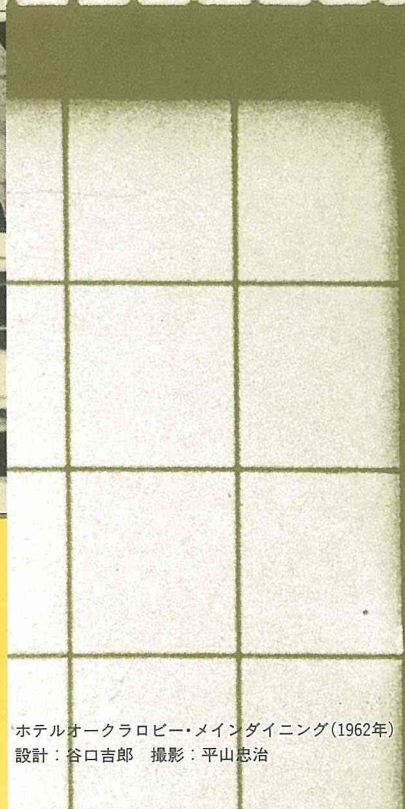
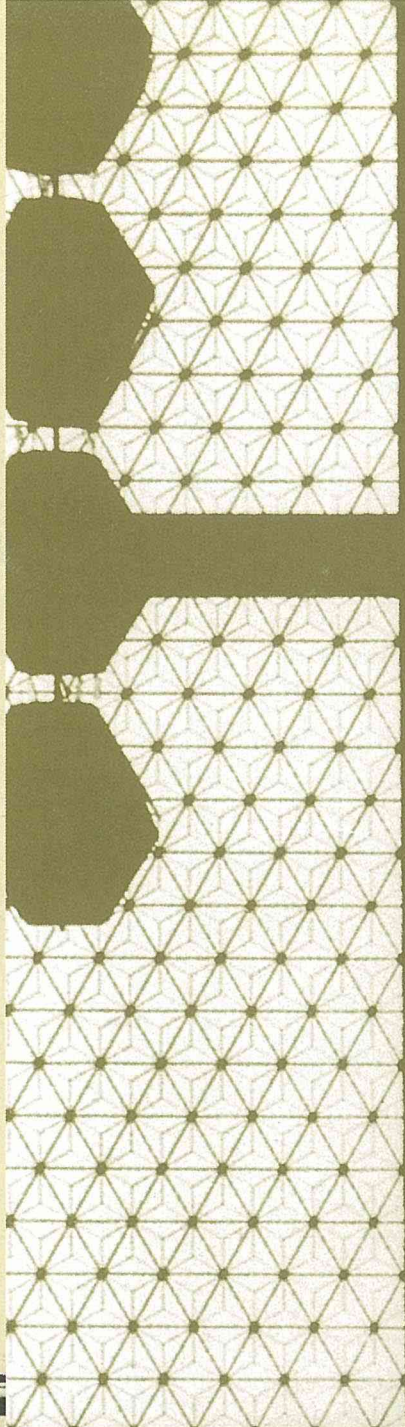


Ka No.14 1997
 design journal of
 the department of architecture
 and building engineering
Tokyo Institute of Technology
 published by TIT society
 of architectural design education

編集：東京工業大学工学部建築学科 華編集委員会
 委員長／仙田満 委員／八木幸二 三上貴正 堀田久人 奥山信一 團紀彦
 事務局／井上寿
 発行：TIT建築設計教育研究会
 定価：800円



秩父セメント第2工場 (1956年) 設計：谷口吉郎 撮影：平山忠治



編集協力：(有)松井編集室 翻訳：デビット・スチュアート
 取材協力：建築学科修士・研究生有志 印刷：三共グラフィック株
 Edition: "Ka" Editorial Committee, chairman/Mitsuru Senda
 member/Koji Yagi Takamasa Mikami Hisato Hotta Shinichi Okuyama Norihiko Dan
 secretariat/Hisashi Inoue translation/David Stewart
 Department of Architecture and Building Engineering Tokyo Institute of Technology
 2-12-1 O-okayama Meguro-ku Tokyo 〒152 phone 03-5734-3163

ホテルオークラロビー・メインダイニング(1962年)
 設計：谷口吉郎 撮影：平山忠治